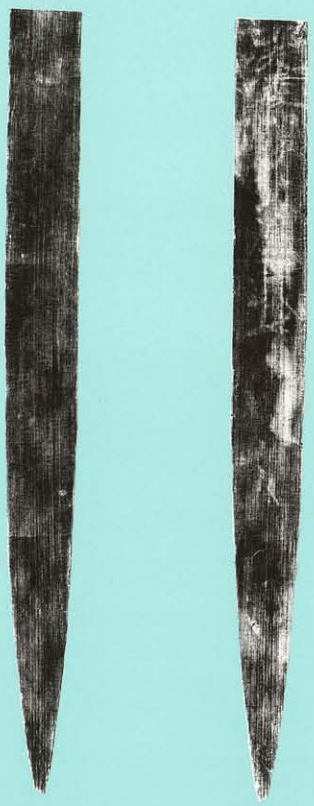
昭和59年度　神戸市埋蔵文化財年報



1987

神戸市教育委員会

序

本市では昭和59年度も教育委員会と神戸市健康教育公社が調査を担当するという体制で文化財行政に取り組んでまいりました。さいわい昭和59年度も２名の学芸員を増員することができ、調査体制の充実を図ることができました。

遺跡の調査件数は28件に増大していますが、事業者の協力により現状保存された遺跡や移設保存された遺跡も７件を数えました。また、６年の歳月を要した史跡処女塚古墳の整備も完了し、史跡公園として市民の皆様に公開できますことを喜ばしく思います。

最後になりましたが、遺跡調査や史跡整備等で協力と指導を賜りました関係各位にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

昭和62年３月

神戸市教育長　　山　本　治　郎

例　　言

1．本書は、神戸市教育委員会が昭和59年度に実施した埋蔵文化財事業の概要である。事業に関わる発掘調査は、神戸市文化財専門委員の指導を得て下記の調査組織によって行った。

調査関係者組織表　神戸市文化財専門委員（埋蔵文化財部会委員）

野地脩左	神戸大学名誉教授
小林行雄	京都大学名誉教授
檀上重光	神戸新聞社監査役　神戸市立博物館副館長

神戸市教育委員会事務局

教育長	山本治郎
社会教育部長	太田修治
文化財課長	増川修三
埋蔵文化財係長	奥田哲通
事務担当　学芸員	菅本宏明
事務職員	沢田　剛
調査担当　学芸員	宮本郁雄
〃	渡辺伸行
〃	口野博史
〃	森田　稔
〃	丹治康明
〃	黒田恭正
〃	西岡誠司

神戸市健康教育公社

理事長	山本　治郎
専務理事	米田　耕
常務理事	西光泰一郎
企画課長	津川　亨
総務係長	川崎　裕昭
事務職員	高井さつき
〃	柴山　智子
調査担当　学芸員	丸山　潔
〃	西岡　巧次
〃	千種　浩
〃	池野　素子
〃	谷　正俊
〃	山本　雅和

2．本書に掲載した位置図は、神戸市立中学校教育研究会社会科研究部編集の５万分の１神戸市全図を使用した。

3．本書は、埋蔵文化財発掘調査一覧表に示した各調査担当者が執筆して作成した。

4．表紙写真は、新方遺跡（高ナギ地点）出土の木簡である。

目　　次

序
例　言
Ⅰ．昭和59年度事業概要……1
昭和59年度埋蔵文化財発掘調査一覧表……6
昭和59年度神戸市埋蔵文化財調査地位置図……8
Ⅱ．昭和59年度の発掘調査……15
1．西神ニュータウン内遺跡……15
　西神第38地点遺跡……15
　西神第90地点遺跡……23
　西神第65地点遺跡……26
　西神第41地点遺跡……38
　西神第42地点遺跡……41
2．新方遺跡（東方地点）－第1次調査－……45
3．新方遺跡（東方地点）－第2次調査－……53
4．新方遺跡（高ナギ地点）……60
5．新方遺跡（村中地点）……69
6．神出古窯址群……72
7．前開遺跡……81
8．長坂遺跡……84
9．福住遺跡……89
10．舞子古墳群東市ケ坂3号墳……92
11．舞子東石ケ谷遺跡……98
12．史跡五色塚古墳・小壺古墳……108
13．会下山二本松古墳……116
14．神楽遺跡……122
15．本山町東山遺跡……132
16．郡家遺跡……138
　城の前地区第5次調査……138
　城の前地区第6次調査……142
　城の前地区第7次調査……147
　城の前地区第9次調査……158
　城の前地区第11次調査……159
17．北神ニュータウン内遺跡……161
　北神第4地点遺跡……161
　北神第5地点遺跡、第6地点遺跡……172
18．山田小学校内遺跡……175
19．下宅原遺跡（大前Ⅱ地区）……183
20．宅原遺跡……186
21．塩田遺跡……198

挿　図　目　次

fig. 1-1　史跡処女塚古墳整備完成後……1
fig. 1-2　北神第４地点見学会と復元住居…3
fig. 2　西神第38地点遺跡調査範囲図……16
fig. 3　西神第38地点遺構平面図……16
fig. 4　ＳＢ01……17
fig. 5　ＳＢ02……17
fig. 6　ＳＢ03……17
fig. 7　ＳＢ01、ＳＢ02、ＳＢ03平面図……18
fig. 8　ＳＴ01実測図……19
fig. 9　ＳＴ01……19
fig. 10　ＳＴ02……19
fig. 11　ＳＴ01出土銀製指輪……21
fig. 12　出土遺物実測図……22
fig. 13　第90地点遺跡地形図……23
fig. 14　窯体検出状況……24
fig. 15　窯体完掘後……24
fig. 16　窯体煙出し付近……24
fig. 17　窯体焚口付近……24
fig. 18　窯体平面図……25
fig. 19　出土須恵器実測図……25
fig. 20　西神第65地点遺跡調査区平面図…27
fig. 21　Ｂ地区遺構平面図……28
fig. 22　Ｂ地区住居址平面図……30
fig. 23　Ａ地区(左)、Ｂ地区(右) 遠景……31
fig. 24　Ｂ地区、ＳＢ03……31
fig. 25　Ｂ地区、ＳＢ04……31
fig. 26　Ｂ地区、ＳＢ05……32
fig. 27　Ｂ地区、ＳＢ06……32
fig. 28　Ｅ地区、ＳＢ01……32
fig. 29　Ｂ地区、ＳＦ01……33
fig. 30　Ｂ地区出土遺物実測図……36
fig. 31　包含層出土遺物実測図……37
fig. 32　出土石器実測図……37
fig. 33　西神第41地点、第42地点遺跡位置図…38
fig. 34　第41地点遠景……39
fig. 35　埋葬施設……39
fig. 36　鉄鏃出土状況……39
fig. 37　第41地点地形測量図……40
fig. 38　出土遺物実測図……40
fig. 39　第42地点地形測量図……42
fig. 40　弥生時代土器棺……42
fig. 41　弥生時代木棺墓……42
fig. 42　第42地点全景……43
fig. 43　弥生時代木棺墓と古墳時代土壙…43
fig. 44　墳丘北側須恵器甕出土状況……43
fig. 45　出土遺物実測図……44
fig. 46　新方遺跡調査地点位置図……46
fig. 47　１次調査、２次調査遺構平面図…47
fig. 48　河道……48
fig. 49　河道内遺物出土状況……48
fig. 50　河道内甕(左)と糸巻状木製品(右)…48
fig. 51　河道内出土弥生土器実測図……49
fig. 52　河道内出土木製品実測図……50
fig. 53　河道内出土石器実測図……52
fig. 54　河道内遺物出土状況実測図……54
fig. 55　河道内ＥＷ土層堆積状況実測図…54
fig. 56　河道全景……55
fig. 57　河道内柱、板材出土状況……55
fig. 58　河道内弥生土器出土状況……55
fig. 59　弥生土器実測図……56
fig. 60　木製品実測図……57
fig. 61　広鍬出土状況……58
fig. 62　鋸歯文帯環状木製品……58
fig. 63　石器実測図……59
fig. 64　第Ⅰ遺構面全景……61
fig. 65　第Ⅰ遺構面平面図……62
fig. 66　第Ⅱ遺構面平面図……62
fig. 67　ＳＥ01……63
fig. 68　ＳＥ02、03……63
fig. 69　ＳＢ05……65
fig. 70　第Ⅲ遺構面ＳＢ05平面図……65
fig. 71　ＳＢ06……66
fig. 72　ＳＢ07……66
fig. 73　ＳＢ08……66
fig. 74　第Ⅳ遺構面平面図……67
fig. 75　ＳＢ06実測図……68
fig. 76　トレンチ内遺構平面図……70
fig. 77　トレンチ全景……71
fig. 78　周溝状遺構……71
fig. 79　周溝内弥生土器出土状況……71
fig. 80　トレンチ設定図……72
fig. 81　１～４トレンチ平面図……73
fig. 82　１～５トレンチ全景……74
fig. 83　１、２トレンチ……75
fig. 84　２、３トレンチ……75
fig. 85　７トレンチ平面図……75
fig. 86　出土遺物実測図……76
fig. 87　７トレンチ全景……77
fig. 88　８トレンチ２号窯……77
fig. 89　８トレンチ５号窯……77

fig. 90　6トレンチ平面図……78
fig. 91　8トレンチ平面図……79
fig. 92　5号窯実測図……79
fig. 93　2号窯実測図……80
fig. 94　5号窯出土遺物実測図……80
fig. 95　トレンチ設定図……82
fig. 96　6トレンチＳＫ01、ＳＫ02実測図…83
fig. 97　ＳＫ01……83
fig. 98　トレンチ位置図……84
fig. 99　第1トレンチ平面図……85
fig. 100　第3トレンチＳＫ01、ＳＸ01……86
fig. 101　第3トレンチＳＤ01、02……86
fig. 102　第4トレンチ遺構平面図……86
fig. 103　第3トレンチ平面図……87
fig. 104　ＳＢ01……88
fig. 105　ＳＢ02……88
fig. 106　ＳＢ01平面図……88
fig. 107　ＳＢ02平面図……88
fig. 108　調査区位置図……89
fig. 109　福住遺跡トレンチ断面図……90
fig. 110　福住遺跡ＳＸ01出土遺物実測図…91
fig. 111　東市ケ坂3号墳位置図……92
fig. 112　東市ケ坂3号墳墳丘測量図……93
fig. 113　東市ケ坂3号墳石室実測図……94
fig. 114　玄室内石敷棺床と羨道閉塞石……95
fig. 115　周溝内須恵器出土状況……95
fig. 116　石室と排水溝……95
fig. 117　玄室内石敷棺床細部……96
fig. 118　出土遺物実測図……96
fig. 119　東市ケ坂3号墳出土須恵器実測図…97
fig. 120　調査区位置図……98
fig. 121　調査区全景……99
fig. 122　調査区全図……100
fig. 123　ＳＢ01……101
fig. 124　ＳＢ02遺物出土状況……102
fig. 125　ＳＢ02とＳＢ01……102
fig. 126　ＳＢ03、ＳＫ02……102
fig. 127　ＳＢ01、ＳＢ02実測図……103
fig. 128　ＳＢ01土層堆積状況実測図……104
fig. 129　ＳＢ03、ＳＫ02実測図……104
fig. 130　石器実測図……106
fig. 131　弥生土器実測図……107
fig. 132　調査地位置図……108
fig. 133　トレンチ配置図……109
fig. 134　6トレンチ、ＳＤ01内結晶片岩実測図……110
fig. 135　11トレンチ平面図……110
fig. 136　9トレンチ平面図……111
fig. 137　ＳＤ01、6トレンチ……112
fig. 138　ＳＤ01と埴輪抜き取り痕……112
fig. 139　ＳＤ01、7トレンチ……112
fig. 140　小壺古墳周濠、陸橋……113
fig. 141　陸橋……113
fig. 142　10トレンチ平面図……115
fig. 143　10トレンチＳＤ01内須恵器出土状況……115
fig. 144　位置図……116
fig. 145　地形測量図……117
fig. 146　調査区平面図……118
fig. 147　葺石平面図……119
fig. 148　墳丘と上段、下段の葺石……120
fig. 149　下段葺石列……120
fig. 150　上段葺石と小段……120
fig. 151　墳丘土層断面図……121
fig. 152　位置図……122
fig. 153　検出遺構平面図……123
fig. 154　調査区全景……125
fig. 155　ＳＢ01全景……125
fig. 156　ＳＢ02全景……125
fig. 157　ＳＤ03全景……126
fig. 158　ＳＫ01、ＳＫ02……127
fig. 159　韓式系土器拓影……129
fig. 160　出土須恵器実測図……130
fig. 161　出土遺物実測図……131
fig. 162　東山遺跡遠景……132
fig. 163　ＳＢ02……133
fig. 164　東山遺跡Ｍライン地区遺構位置図…134
fig. 165　ＳＢ01実測図……135
fig. 166　ＳＢ02実測図……135
fig. 167　ＳＸ01（焼土壙）平面図……135
fig. 168　ＳＢ02出土炭化材……136
fig. 169　ＳＤ01出土弥生土器……136
fig. 170　弥生土器実測図……137
fig. 171　郡家遺跡調査地位置図……139
fig. 172　第1次遺構面平面図……140
fig. 173　調査地南部第2次遺構面平面図…140
fig. 174　調査地南部全景……141
fig. 175　土器群……141
fig. 176　第2遺面平面図……143
fig. 177　第2遺構面……145
fig. 178　ＳＢ02……145
fig. 179　円形周溝1小形壺出土状況……145
fig. 180　城の前地区第6次調査出土遺物実測図…146
fig. 181　城の前地区第7次調査トレンチ配置図…148
fig. 182　東1区調査地全景……149
fig. 183　西3区調査地全景……149

fig. 184　西３区ＳＢ02…… 149
fig. 185　東１区水田内出土鋤先…… 149
fig. 186　西3区河道2内子持勾玉出土状況… 149
fig. 187　西３区河道２出土土器実測図… 151
fig. 188　土壙出土土器実測図…… 151
fig. 189　西３区河道５出土遺物…… 152
fig. 190　西３区河道８出土遺物…… 152
fig. 191　西４区東部遺構平面図…… 154
fig. 192　西３区遺構平面図…… 154
fig. 193　ＳＢ13出土土器実測図…… 156
fig. 194　西４区調査地全景…… 157
fig. 195　西４区ＳＢ15…… 157
fig. 196　郡家遺跡城の前地区
　　第11次調査遺構平面図…… 158
fig. 197　城の前地区
　　第11次調査出土遺物実測図… 160
fig. 198　調査地区位置図…… 161
fig. 199　Ⅰ－13～15地区遺構配置図…… 161
fig. 200　Ⅰ－13～15地区全景…… 162
fig. 201　ＳＫ04出土土器…… 162
fig. 202　磨製石器実測図…… 163
fig. 203　北神第4地点Ⅱ－41～51地区全景‥ 163
fig. 204　Ⅱ－41～51地区遺構平面図…… 164
fig. 205　ＳＢ01…… 165
fig. 206　ＳＫ05出土遺物…… 165
fig. 207　墓址実測図…… 166
fig. 208　ＳＴ02…… 166
fig. 209　ＳＴ01…… 166
fig. 210　墓址全景…… 167
fig. 211　墓址近景…… 167
fig. 212　ＳＢ01出土土器…… 168
fig. 213　ＳＢ02出土土器…… 168
fig. 214　ＳＢ03出土土器…… 168
fig. 215　石鏃…… 169
fig. 216　ＳＢ01出土打製刃器…… 169
fig. 217　ＳＢ03サヌカイト集積状況…… 169
fig. 218　ＳＢ03出土ガラス玉…… 170
fig. 219　蔵骨器遺物実測図…… 170
fig. 220　蔵骨器出土状況…… 170
fig. 221　蔵骨器…… 171
fig. 222　北神第5、6地点調査区位置図… 172
fig. 223　第５地点調査前現況…… 173
fig. 224　第５地点全景…… 173
fig. 225　第５地点近景…… 173
fig. 226　第５地点全景…… 173
fig. 227　第６地点全景…… 174
fig. 228　第６地点ヤガネ出土状況…… 174
fig. 229　位置図…… 175
fig. 230　遺構平面図…… 177
fig. 231　掘立柱建物３平面図…… 178
fig. 232　掘立柱建物４、６平面図…… 178
fig. 233　調査区全景…… 179
fig. 234　竪穴住居址…… 179
fig. 235　土壙墓１…… 179
fig. 236　木棺墓１検出状況…… 180
fig. 237　木棺墓１棺底の人骨…… 180
fig. 238　土壙墓１平面図…… 180
fig. 239　木棺墓１平面図…… 180
fig. 240　石敷遺構１実測図…… 181
fig. 241　石敷遺構２実測図…… 181
fig. 242　出土遺物実測図…… 182
fig. 243　遺構配置図…… 184
fig. 244　ＳＤ01断面図…… 184
fig. 245　ＳＤ01…… 184
fig. 246　ＳＸ01全景…… 184
fig. 247　ＳＤ01出土遺物…… 185
fig. 248　近世の遺物…… 185
fig. 249　宅原遺跡調査地位置図…… 187
fig. 250　１トレンチ全景…… 188
fig. 251　１トレンチ平面図…… 189
fig. 252　14トレンチ遺構平面図…… 193
fig. 253　ＳＴ01実測図…… 195
fig. 254　ＳＴ01…… 195
fig. 255　ＳＴ01蓋板除去後…… 195
fig. 256　出土遺物実測図…… 197
fig. 257　トレンチ位置図…… 199
fig. 258　Ⅳトレンチ平面図…… 200
fig. 259　ＳＫ02実測図…… 201
fig. 260　ＳＫ03実測図…… 201
fig. 261　ＳＴ01…… 202
fig. 262　ＳＴ01底板と人骨…… 202
fig. 263　ＳＫ02…… 203
fig. 264　ＳＫ03…… 203
fig. 265　ＳＴ01実測図…… 204
fig. 266　Ⅵトレンチ ＳＢ02、ＳＢ03平面図…… 204
fig. 267　ＳＢ02、ＳＢ03…… 205
fig. 268　Ⅷトレンチ平面図…… 206
fig. 269　ＳＤ07…… 206
fig. 270　Ⅷトレンチ…… 206
fig. 271　ＴＰ22…… 207
fig. 272　ＴＰ56平面図…… 209
fig. 273　ＴＰ56、ＳＢ01…… 209
fig. 274　出土土器実測図…… 211
fig. 275　Ⅸトレンチ出土石庖丁実測図… 212

Ⅰ．昭和59年度事業概要

1．文 化 財　史跡処女塚古墳の整備完成

保護事業　東灘区御影塚町２丁目に所在する史跡処女塚古墳は、昭和54年度より国の補助金を得て墳丘等整備事業に着手したが、６年の歳月を要し、昭和59年11月、総事業費6,122万円をかけて完成した。整備事業は文化庁、奈良国立文化財研究所および58年度より設置した史跡処女塚古墳整備委員会の指導の下に実施した。この整備事業により、57年度までの発掘調査で全長約70ｍの市内唯一の前方後方墳であることが判明するなど新たな成果も得られた。昨年度までの整備で、周辺の石垣、擁壁および防護柵の設置、墳丘部の盛土整形、芝張り等を行ってきた。

今年度は、西側の一部擁壁、墳丘部の階段、排水施設、照明設備等の設置と石碑の移設などを行い、説明板の設置をもって整備事業を完了した。整備費用は、1,062万円である。

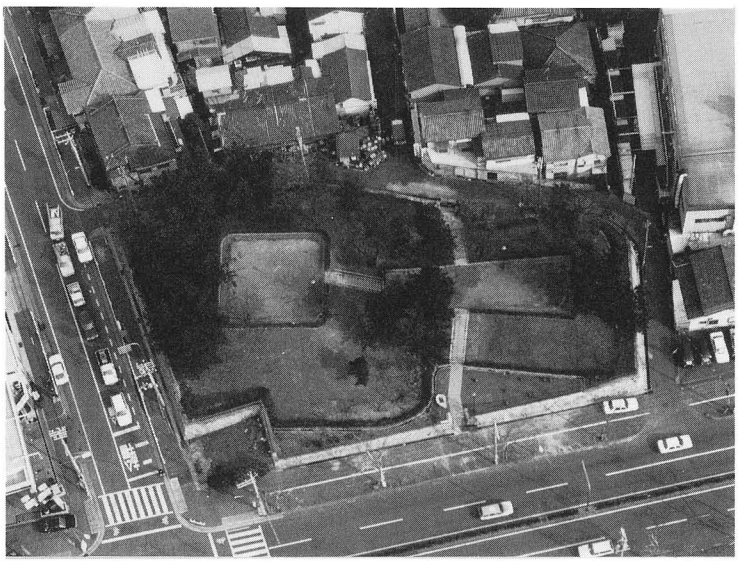
史跡処女塚古墳復元整備委員会委員

工楽善通	奈良国立文化財研究所
田中哲雄	〃
野地脩左	神戸市文化財専門委員
小林行雄	〃
檀上重光	〃

整備事業費年度別内訳

年 度	事業費(万円)	年 度	事業費(万円)
54	1,000	57	1,000
55	1,000	58	1,060
56	1,000	59	1,062

fig. 1-1　史跡処女塚古墳整備完成後



2．普及啓発　史跡五色塚古墳の公開と大歳山復元住居の公開

事　　業　史跡五色塚古墳（垂水区五色山２丁目）は、復元整備された前方後円墳として知られ、市民をはじめ各地から見学者が訪れている。年間を通じ無料公開しており、昭和59年の見学者は、団体20,264名、個人19,357名、合計39,621名であった。

大歳山遺跡公園（垂水区西舞子４丁目）では、例年11月１日から７日まで文化財保護強調月間の催しのひとつとして、弥生時代の復元住居の内部を公開している。今年度は、復元住居の公開とともに、特に弥生人の生活体験として、火おこし、機織り、木器づくりなどを訪れた見学者に参加し、実演してもらうための催しを行った。

「地下に眠る神戸の歴史展Ⅱ」の開催

昭和55年に「地下に眠る神戸の歴史展」と題し、発掘調査の成果を広く知っていただくために神戸市立考古館の特別展として開催したが、その後４年を経て発掘調査による新たな資料や多くの成果が得られたため、昭和59年11月10日より11月30日までの期間、同題の第２回目の特別展示を旧考古館（市立考古館は昭和57年市立博物館開館により廃止）において開催した。今回は、22遺跡の出土遺物を展示し、その発掘調査の成果を紹介した。

また、西区の玉津南公民館で催された同館主催の地域の歴史、遺跡を紹介する第一回「新方遺跡展」に新方遺跡出土品を中心として展示への協力を行った。昭和60年１月25日から１月31日。

このほか北神調査事務所に２間×２間の展示室を設け、北神地区から出土した弥生時代から明治時代までの出土品を展示し、訪れた見学者に公開した。

現地説明会の開催

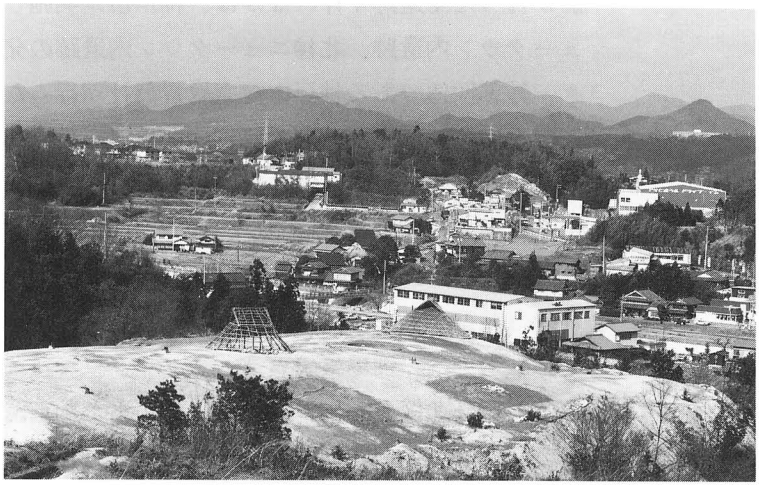
発掘調査の成果を広く市民に公表するため、随時現地説明会を行っているが昭和59年度は、下記の８遺跡で開催した

番号	遺　跡　名	説明年月日
1	舞子古墳群　東市ケ坂３号古墳	昭和59年５月３日
2	山田（小学校内）遺跡	昭和59年５月27日
3	新方遺跡（高ナギ地点）	昭和59年６月10日
4	舞子東石ケ谷遺跡	昭和59年８月11日
5	北神第４地点遺跡	昭和59年10月28日
6	西神ニュータウン内第65地点遺跡	昭和60年２月３日
7	郡家遺跡（城の前地区第７次）	昭和60年３月３日
8	史跡五色塚古墳・小壺古墳	昭和60年３月10日

このうち、北神第４地点遺跡では、弥生時代の竪穴式住居址の上屋を２棟復元し、説明会当日、見学者に披露した。１棟はカヤ葺きの屋根を復元し、１棟

は柱の骨組を復元した。

fig. 1-2　北神第４地点見学会と復元住居



刊行物

昭和59年度の埋蔵文化財関係の刊行物は、下記の５点である。

１．昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報　　頒価 1,200円
２．史跡処女塚古墳　　300円
３．昭和58年度遺跡現地説明会資料集　　500円
４．神戸市文化財分布図（改訂版）　　1,200円
５．地下に眠る神戸の歴史展Ⅱ　　800円（神戸市健康教育公社発行）

３．文化財調査事業　埋蔵文化財関係の事業の大半を占める調査事業は、年々、その件数、費用ともに増加している。開発行為についての事前審査に伴う埋蔵文化財分布調査依頼書の提出は、昭和59年度に276件あり、昨年度より29件、一昨年度に比べ72件の増加である。発掘調査の原因となる開発行為は、件数で見る限り増加傾向に衰えが見られない。分布調査の結果により、試掘調査を実施したものは103件にのぼり、このうち公共事業が29件、約３割を占める。試掘調査の結果、遺跡が確認されたのは16件である。地域別に見れば昨年度とその傾向に変わりなく、市街地での試掘調査件数が６割以上を占める。これは民間事業のマンション建設、宅地造成の占める割合が高い。

昭和59年度埋蔵文化財試掘調査件数

地区	件数	備考
市街地東部	44	東灘区、灘区、中央区（旧葺合区）
市街地西部	21	中央区（旧生田区）、兵庫区、長田区、須磨区、垂水区
西区	29	
北区	4	
計	103	

緊急発掘調査は、33遺跡42件で別表のとおりである。このうち、県教育委員会が行った4遺跡4件のほかは、神戸市が実施した。なお、郡家遺跡、西神ニュータウン内遺跡、北神ニュータウン内遺跡の発掘調査業務は、昨年度に引続き、外郭団体である神戸市健康教育公社が行った。

調査原因の事業別件数では、民間事業6件、公共事業36件で、8割以上を公共事業が占めている。この傾向は、ここ数年来変わっていない。また、民間事業では大規模開発が沈静化しているにもかかわらず、公共事業においてはニュータウン建設、圃場整備、道路建設、再開発事業などが主となっており、これらに伴う発掘調査面積は、民間事業に伴うものを遥かに圧倒している。発掘調査の地域別では、圃場整備事業、ニュータウン建設など大規模な開発が集中している西区、北区で大半を占めている。また、東灘区のように再開発事業や民間のマンション建設などにより、市街地での緊急発掘調査は近年増えつつある。

今年度発掘調査を行った各遺跡の概要については、次章に記すとおりである。これら33遺跡の大半は、調査後消滅し記録保存となった。その中で舞子東石ケ谷遺跡や舞子古墳群東市ケ坂3号墳、西神第90地点遺跡の窯体など、一部ではあるが現状保存されている。

現状保存された遺跡

1．西神ニュータウン第90地点遺跡　50㎡　神戸市開発局
2．舞子古墳群東市ケ坂3号墳　30㎡　神戸市水道局
3．舞子東石ケ谷遺跡(古墳を含む) 2,800㎡　神戸市衛生局
4．圃場整備関係　神出遺跡他　神戸市農政局　緑農開発公社

このほか、数遺跡について、現状保存等の対策について開発者と協議を継続している。なお、昭和59年度の緊急発掘調査に要した費用は、4億3千万円にのぼり、前年度に比べ1億2百万円の増加である。

また、現地保存が不可能なものについては、切り取り保存の措置を講じた。今年度切り取り保存したものとして、宅原遺跡の木棺墓、塩田遺跡の木棺墓、会下山二本松古墳の葺石等が上げられる。会下山二本松古墳では、墳丘の土層断面剝ぎ取りをあわせて行った。

4．市内の遺跡調査の動向

市内で前期から後期までの11遺跡の調査が実施された。この内前期の遺跡としては兵庫県教育委員会が調査を実施した北青木遺跡がある。この遺跡は旧海岸線に近い砂堆上に立地する遺跡で、弥生土器の他、鍬等の木製農具が出土している。土器は前期前半のもので、昨年発見された玉津田中遺跡のものと共に市内最古の弥生土器の発見である。

弥生時代

弥生時代中期の遺跡の調査としては、新方・玉津田中・塩田・西神ニュータウン内第65地点の4遺跡の調査が実施された。

新方遺跡では３地点に４事業が集中した。高ナギ地点では旧河川内から中期前半から中頃の土器と共に多量の木製品や碧玉の原石などが発見された。この３地点は従来から知られる遺跡の中心からは離れて位置しており、これらから推定される遺跡範囲は南北700ｍ・東西1,000ｍとなる。

塩田遺跡では竪穴住居址等が発見され、その周辺から土器と共に石庖丁の未製品が多量に発見された。この発見で従来不明な点の多かった北区内の弥生集落の一端が明らかになりつつある。

後期の遺跡の調査は３遺跡で調査が実施された。北神ニュータウン第４地点では弥生時代中期後半から後期の竪穴住居址３棟と箱式石棺墓２基が発見された。弥生時代の箱式石棺墓の発見は神戸市内では初例である。

古墳時代

水道配水池の改造に伴う調査によって今まで円墳であると考えられていた会下山二本松古墳が、前方後円墳であることが判明した。

前方部の一部分であったが、二段の斜面には葺石が残存していた。この発見ですでに破壊された古墳でも再調査することによって新しい事実を得られることがわかり、その意味は大きい。また、市内の古墳時代の前半期を考える上で重要な発見と言える。

現在のところ兵庫県下でも発見例のない指輪が西神ニュータウン第38地点遺跡で発見された。尾根の頂部に埋葬施設を造らず頂部からやや下ったところに木棺を直葬していた。指輪は棺内から出土した。出土した須恵器から６世紀中葉の時期の埋葬施設と考えられる。

歴史時代

歴史時代遺跡の調査は８遺跡で実施されている。山田遺跡では７世紀前半と考えられる竪穴住居址が発見された他、掘立柱建物７棟・土壙墓２基・石敷遺構２基が発見されている。旧街道に近い山間部に位置しており、山間部の集落の変遷や文化の交流を考える上で重要な発見と言える。

東播系須恵器の生産地として知られる神出遺跡の調査では窯址の発見のほか、11世紀から12世紀にかけての集落址が発見された。この集落址は掘立柱建物を主体とするもので、窯業集団と密接な関連をもつ集落と予想され、また、その周辺部からは粘土採掘址と考えられる土壙群が発見されている。

新方遺跡村中地点の調査では14世紀の集落が発見され、その中に造られた井戸の中から２点の呪符木簡が出土した。当時の風習を知るうえで貴重な発見と言える。

５．そ の 他　新修神戸市史編集への協力

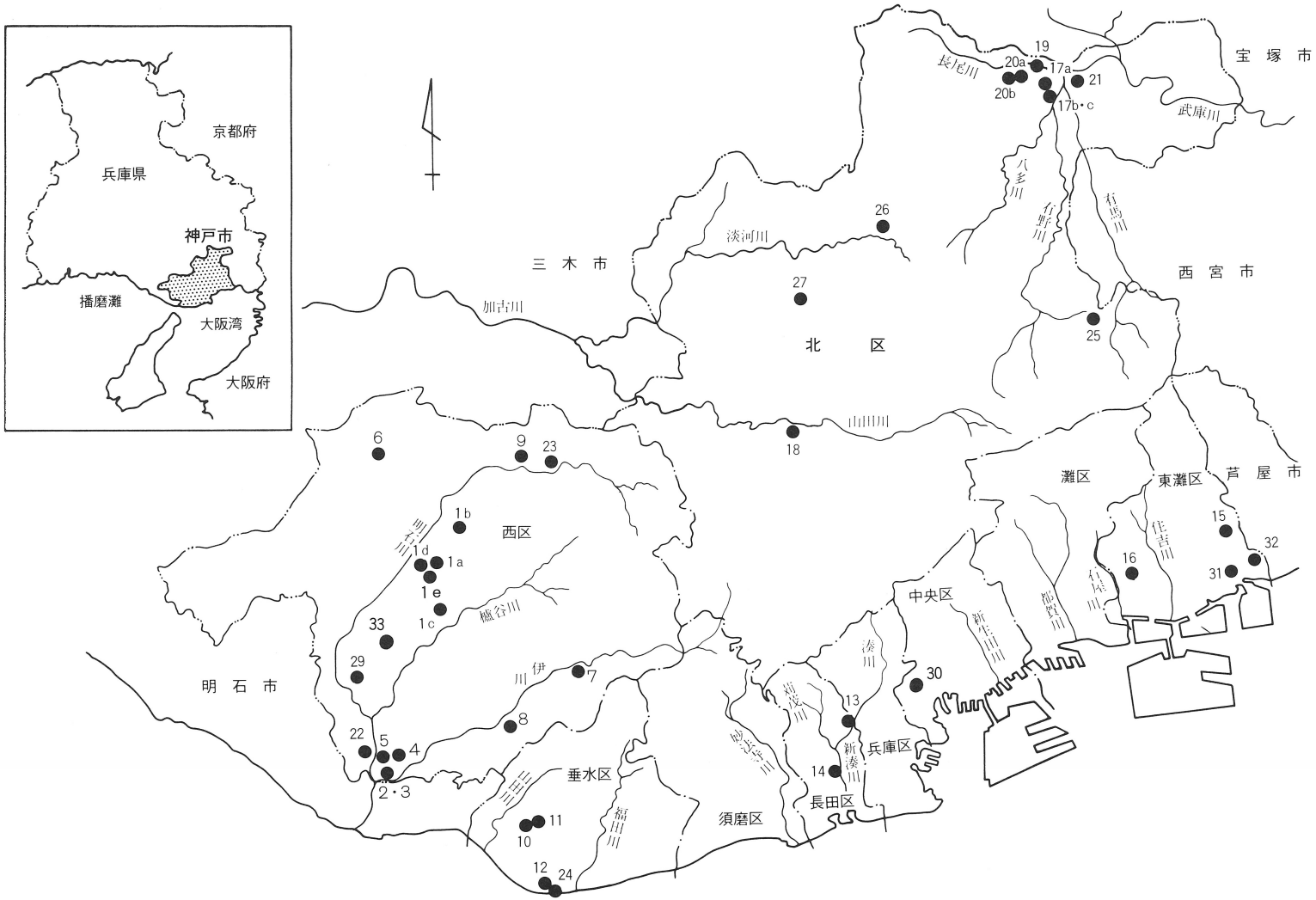
「新修神戸市史　原始・古代編」について、昨年度から市史編集室より委託を受け、資料収集、調査等を行っている。今年度も旧石器・縄文、弥生、古墳の時代別に３班に分かれ、分布調査、測量、遺物の図化等を行った。

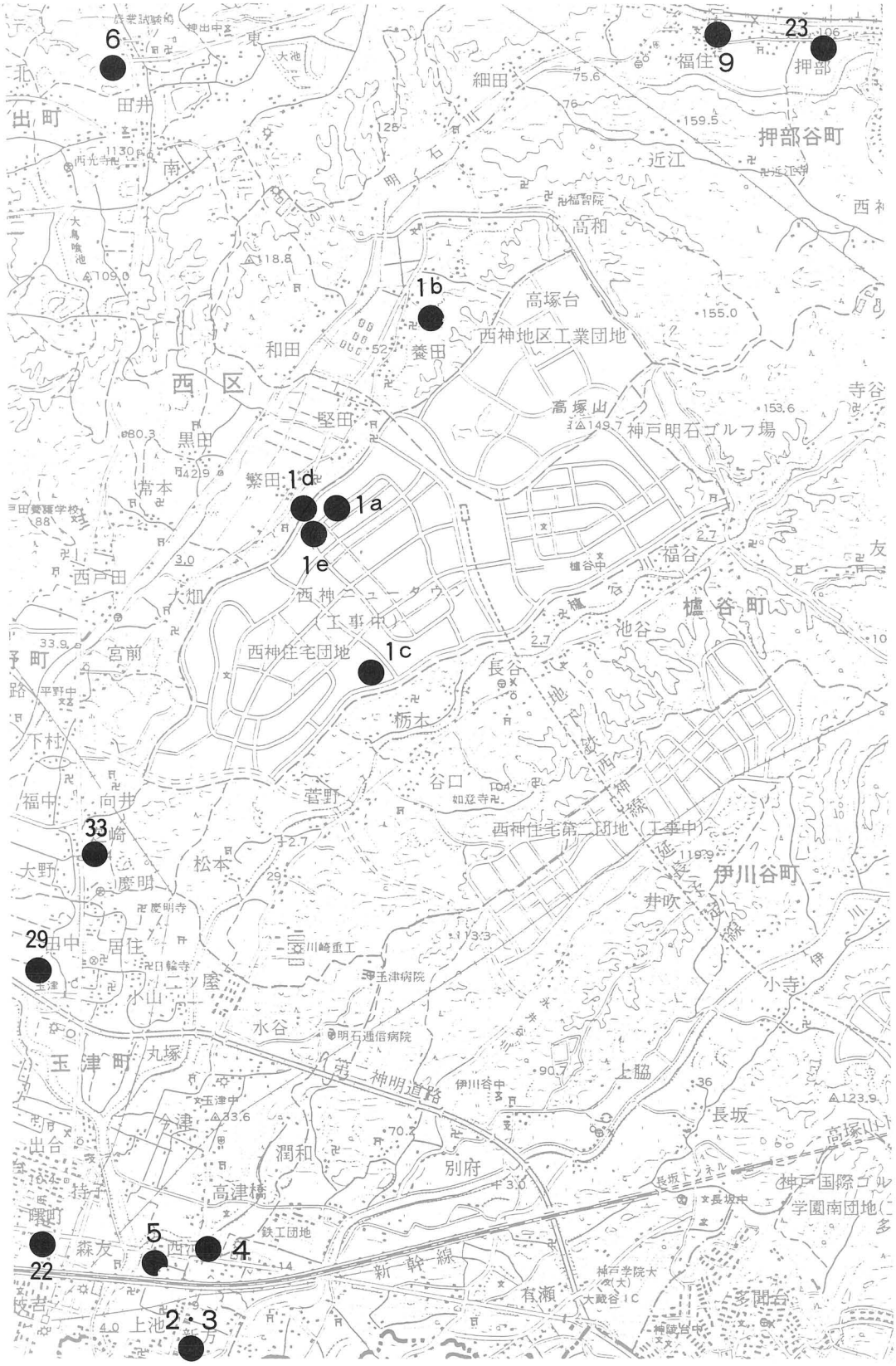
昭和59年度　埋蔵文化財発掘調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	事業名	調査主体	調査面積
1	西神ニュータウン内遺跡	西区櫨谷町、平野町、押部谷町	ニュータウン建設	神戸市健康教育公社	13,000㎡
2	新方遺跡東方地点第1次	西区玉津町新方	雨水幹線埋設工事	神戸市教育委員会	280㎡
3	新方遺跡東方地点第2次	〃	都市計画道路建設	〃	240㎡
4	新方遺跡高ナギ地点	西区玉津町高津橋字高ナギ	宅地造成	〃	1,300㎡
5	新方遺跡村中地点	西区玉津町西河原	〃	〃	200㎡
6	神出古窯址群	西区神出町	県営圃場整備	〃	3,100㎡
7	前開遺跡	西区伊川谷町前開	〃	〃	1,500㎡
8	長坂遺跡	西区伊川谷町長坂	団体営圃場整備	〃	714.5㎡
9	福住遺跡	西区押部谷町福住	〃	〃	40㎡
10	舞子古墳群東市ケ坂3号墳	垂水区舞子坂	水道配水池築造	〃	200㎡
11	舞子東石ケ谷遺跡	〃	墓園拡張	〃	2,500㎡
12	五色塚古墳	垂水区五色山三丁目		〃	1,900㎡
13	会下山二本松古墳	長田区湊川町	水道配水池築造	〃	500㎡
14	神楽遺跡	長田区神楽町	保育所建替	〃	400㎡
15	本山町東山遺跡	東灘区本山町	宅地造成	〃	3,000㎡
16	郡家遺跡	東灘区御影町	河川改修 都市計画道路	神戸市健康教育公社	4,000㎡
17	北神ニュータウン内遺跡	北区道場町、長尾町	ニュータウン建設	神戸市健康教育公社	5,000㎡
18	山田小学校内遺跡	北区山田町	小学校改築	神戸市教育委員会	800㎡
19	下宅原遺跡(大前地区)	北区長尾町	道路建設	神戸市健康教育公社	360㎡
20	宅原遺跡	〃	県営圃場整備	神戸市教育委員会	3,230㎡
21	塩田遺跡	北区道場町塩田	〃	〃	2,578.5㎡
22	枝吉遺跡	西区玉津町枝吉	事務所建設	〃	40㎡
23	押部遺跡	西区押部谷町押部	団体営圃場整備	〃	190㎡
24	五色塚古墳	垂水区五色山三丁目	宅地造成	〃	100㎡
25	落葉山城址	北区有馬町	展望台建設	〃	100㎡
26	神田遺跡	北区淡河町神田	団体営圃場整備	〃	420㎡
27	大杣遺跡	北区淡河町	老朽溜池改修	〃	36㎡
28	長尾遺跡	北区長尾町宅原	道路建設	〃	220㎡
29	玉津田中遺跡	西区玉津町田中	土地区画整理	兵庫県教育委員会	9,814㎡
30	楠・荒田遺跡	中央区楠町	病院建設	〃	135㎡
31	北青木遺跡	東灘区北青木	県営住宅建設	〃	1,214㎡
32	深江北遺跡	東灘区深江北	〃	〃	1,950㎡
33	芝崎遺跡	西区平野町芝崎	道路拡幅	〃	96㎡

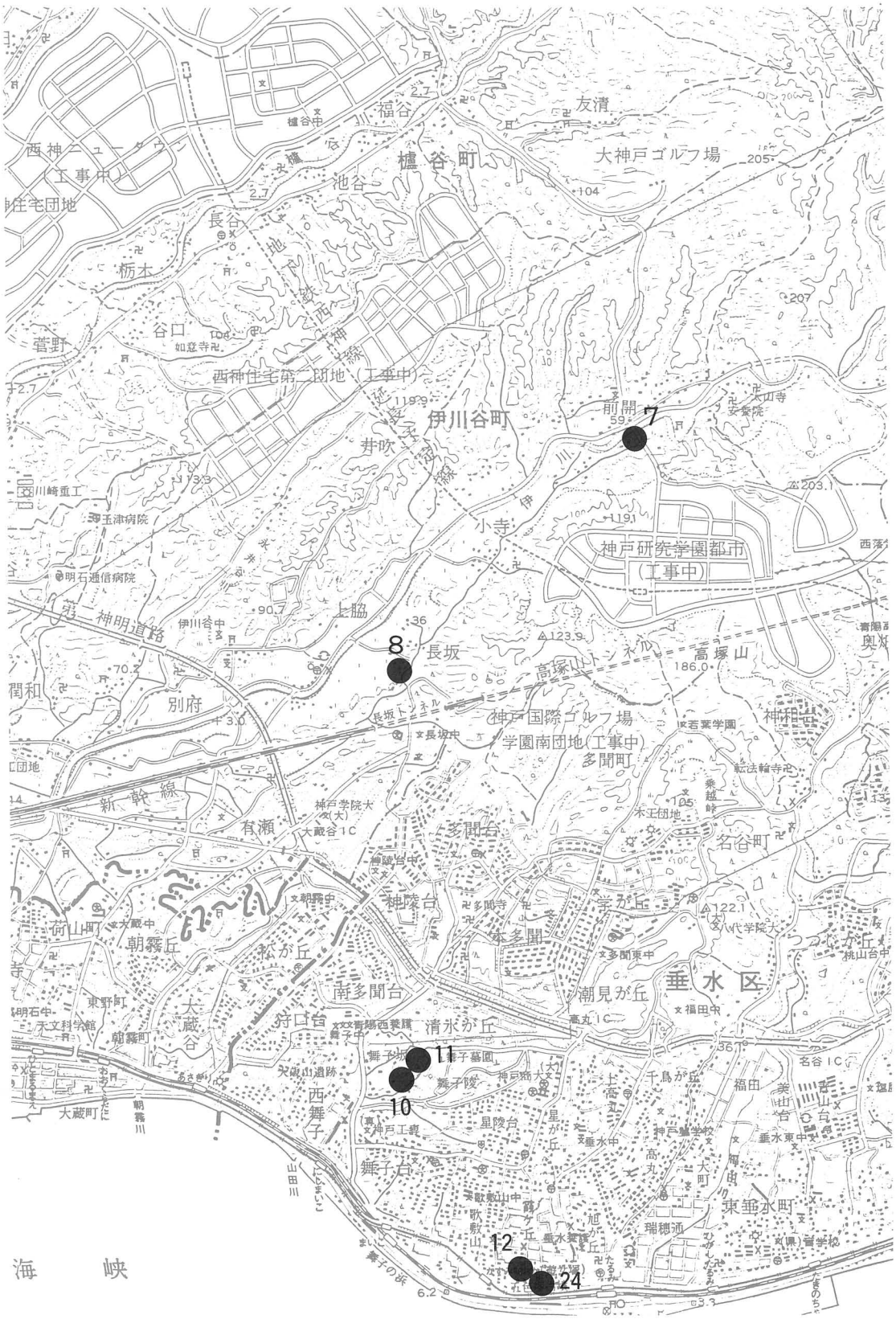
調　査　期　間	調査担当者	調　　査　　内　　容	備　　考
59. 5. 1～60. 3. 1	千種　浩 谷　正俊	No.38地点・No.65地点、弥生時代集落址 No.90地点、鎌倉時代窯跡、No.41・42地点、古墳	2/3現説
59. 8. 27～10. 5	渡辺　伸行	弥生時代中期の川、木器、土器、石器、碧玉、原石	
59. 11. 4～12. 22	〃	〃	
59. 5. 1～10. 13	丹治　康明	13～14Cの集落址（呪符出土） 弥生古墳時代の集落址	6/10 現説
59. 10. 22～11. 16	〃	弥生時代の周溝墓	
59. 6. 28～12. 27	森田　稔	粘土採掘壙、掘立柱建物 窯跡調査	
59. 11. 22～12. 28	丹治　康明	中世溝、土壙	
59. 6. 27～60. 1. 30	〃	平安時代掘立柱建物、溝 古墳時代竪穴住居址	
60. 3. 15	西岡　誠司 口野　博史 山本　雅和	中世集落址	
59. 4. 9～5. 10	口野　博史	横穴式石室（ガラス玉、金環、須恵器）	石室現地保存 5/3 現説
59. 4. 6～8. 20	渡辺　伸行 菅本　宏明	弥生後期の竪穴住居址3棟	一部現状保存 8/11 現説
60. 1. 10～3. 31	渡辺　伸行 森田　稔	周濠外側周溝、土壙（ハニワ、須恵器）	3/10 現説
59. 4. 9～60. 2. 10	黒田　恭正	前方後円墳の前方部を確認（2段葺石）	
59. 9. 20～60. 1. 12	渡辺　伸行 西岡　誠司	弥生時代中期後半～後期の溝 古墳時代中期後半～後期の掘立柱建物	
59. 6. 1～60. 1. 31	宮本　郁雄	試掘（弥生時代住居址を確認）	
59. 5. 1～60. 3. 31	西岡　巧次 池野　素子	城の前地区（5、6、7、9、11次） 弥生～古墳時代集落址	3/3 現説
59. 5. 1～60. 3. 31	丸山　潔 山本　雅和	No.4地点、弥生時代集落址 No.5・6・9地点、試掘	10/28 現説
59. 4. 2～8. 20	丹治　康明 西岡　誠司 谷　正俊	平安時代後期の掘立柱建物7、墓址2	S58年度から継続　5/27現説
59. 10. 29～12. 3	丸山　潔 山本　雅和	中世溝	
59. 5. 15～60. 2. 18	口野　博史	中世木棺墓、掘立柱建物、試掘	
59. 7. 23～60. 1. 12	黒田　恭正	弥生時代住居址、溝 中世木棺墓、掘立柱建物	
59. 8. 13～8. 31	宮本　郁雄	弥生～古墳時代遺物包含層	
60. 2. 13～2. 14	山本　雅和	中世の土壙、試掘	
59. 10. 2～10. 20	宮本　郁雄	周濠外側周溝、試掘	
59. 12. 18～12. 19	山本　雅和	試掘（遺構なし）	
59. 5. 1～5. 29	森田　稔	中世溝、土壙 近世溝、土壙	
59. 12. 3～60. 2. 22	丹治　康明	試掘（遺構・遺物なし）	
59. 7. 12～7. 26	口野　博史	試掘（中世須恵器、土師器、ピット）	
59. 4. 12～60. 3. 31	山本　三郎 加古千恵子 中川　渉	中世集落址、弥生中期集落址	
59. 8. 15～8. 31	西口　和彦 山田　清朝	平安時代溝、柱穴	
59. 6. 12～7. 16	小川　良太 山下　史朗	弥生時代前期溝	
59. 10. 15～12. 18	〃	奈良時代建物、水田、他	
60. 1. 28～3. 25	山本　三郎	中世溝	

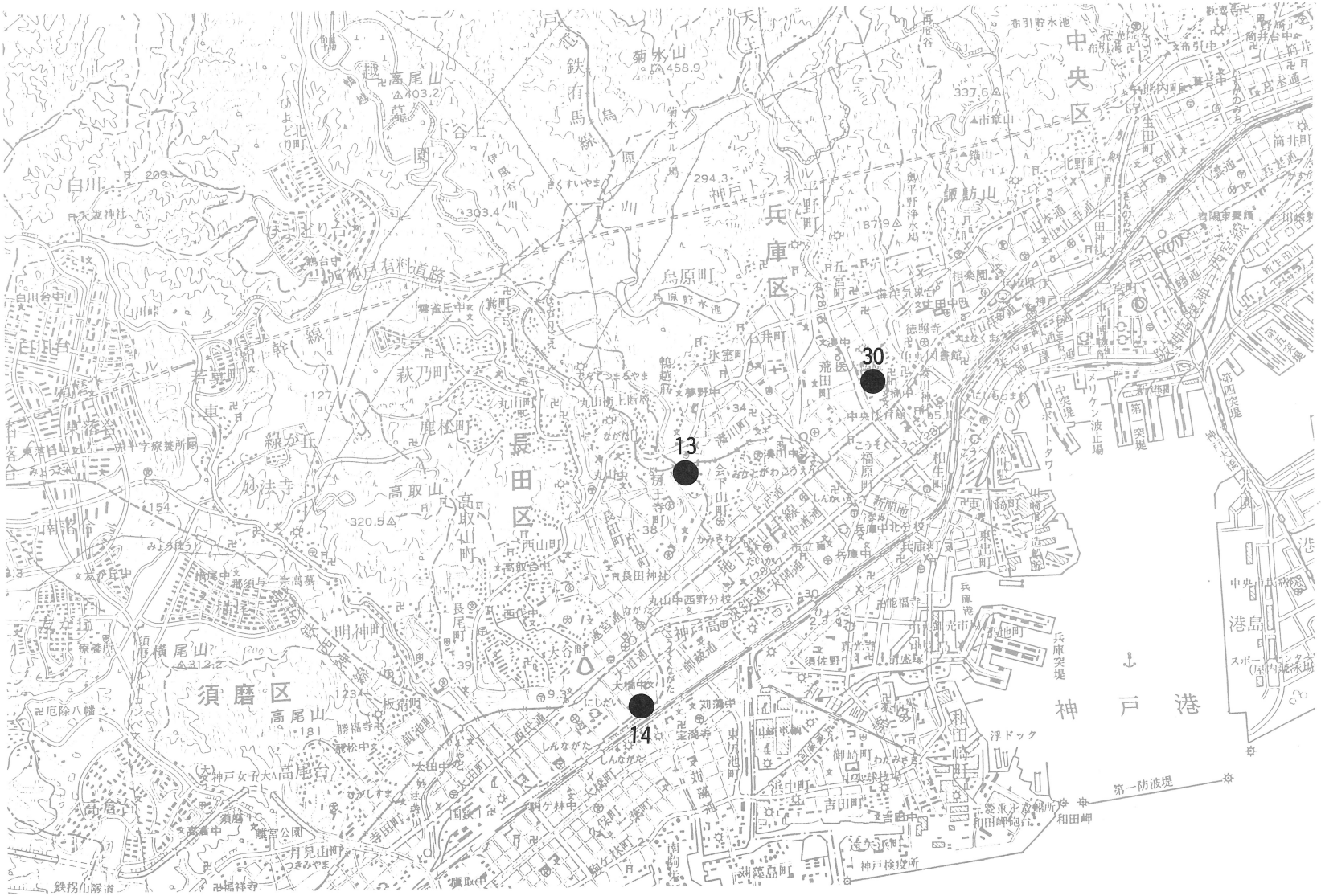
昭和59年度　神戸市埋蔵文化財調査地　位置図



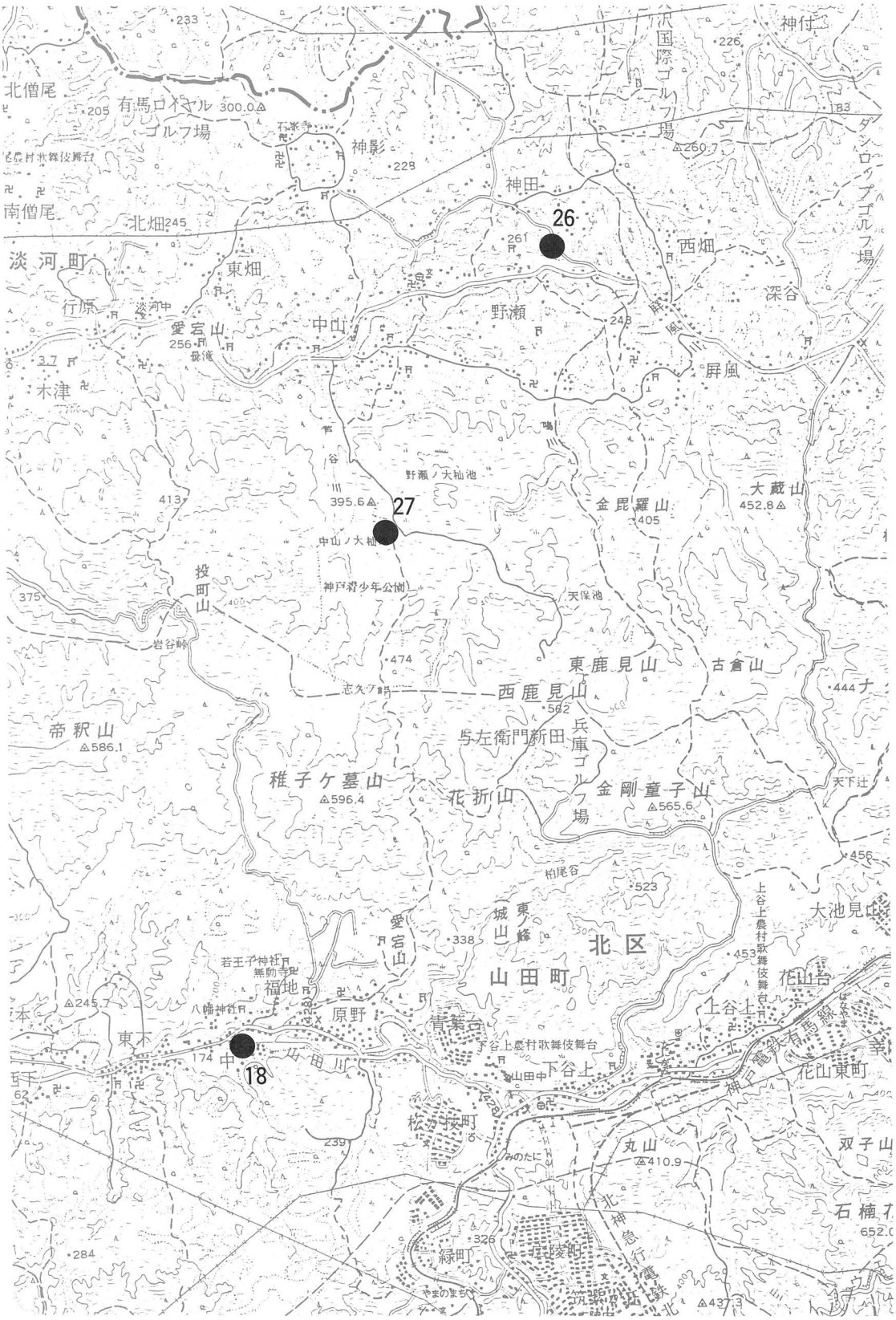


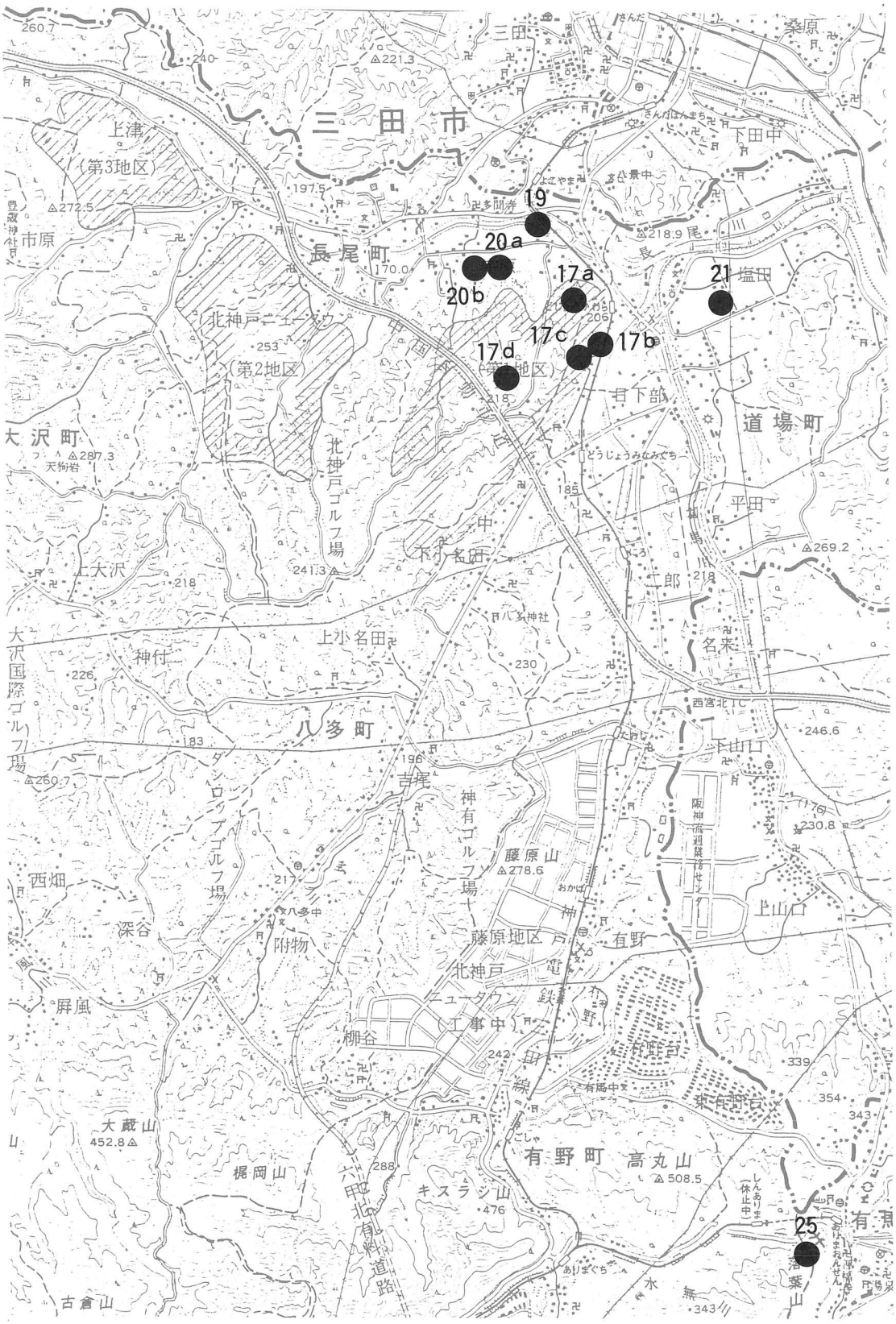
1a　西神第38地点
1b　西神第90地点
1c　西神第65地点
1d　西神第41地点
1e　西神第42地点


7
8
10
11
12
24
櫨谷町
伊川谷町
神戸研究学園都市
(工事中)
高塚山
神戸国際ゴルフ場
学園南団地(工事中)
多聞町
垂水区
海峡
新幹線
神明道路
西神住宅第二団地(工事中)
大神戸ゴルフ場


30
13
14
中央区
兵庫区
長田区
須磨区
神戸港
高尾山
菊水山
高取山
横尾山
鉄拐山
鉄有馬線
神戸有料道路
山陽電鉄
JR
地下鉄
メリケン波止場
ポートタワー
第一防波堤
和田岬
浮ドック
兵庫突堤
第四突堤
神戸検疫所
須磨海浜公園
月見山
高倉台
鈴蘭台
妙法寺
鹿松町
萩乃町
若草町
烏原町
烏原貯水池
布引貯水池
菊水ゴルフ場
神戸高
兵庫高
長田神社
大橋中
東山中
丸山中
西野分校
兵庫中
兵庫港
須佐野中
神戸女子大
鉄拐山隧道

15
16
31
32
芦屋市
東灘区
六甲山
荒地山
鷹尾山
六甲ゴルフ場
花原ゴルフ場
高山植物園
甲山町
本山北町
本山中町
本山南町
北青木
御影
住吉
摩耶埠頭
第四防波堤
第五防波堤
六甲アイランド
埋立工事中
六甲大橋
神戸製鋼
神戸フェリーセンター
東部市場
阪神高速
阪急神戸線
中埠頭
南埠頭


26
27
18
北僧尾
南僧尾
有馬ロイヤル
ゴルフ場
300.0
神影
228
神田
261
北畑
245
東畑
淡河町
行原
淡河中
愛宕山
256
中山
野瀬
243
西畑
深谷
屏風
木津
395.6
野瀬ノ大池
中山ノ大池
413
金毘羅山
405
大蔵山
452.8
投町山
375
神戸市少年公園
天保池
岩谷峠
474
東鹿見山
古倉山
444
志久ヶ峠
西鹿見山
562
帝釈山
586.1
与左衛門新田
兵庫ゴルフ場
稚子ケ墓山
596.4
花折山
金剛童子山
565.6
天下辻
456
柏尾谷
523
大池見山
城東山
338
愛宕山
北区
453
若王子神社
無動寺
福地
山田町
花山台
上谷上
八幡神社
245.7
原野
青葉台
東不
174
丸田川
下谷上農村歌舞伎舞台
山田中
下谷上
花山東町
松方台町
丸山
410.9
双子山
みのたに
石楠花
652.0
326
緑町
284
やまの生ちゃ
437.3



17a　北神第４地点
17b　北神第５地点
17c　北神第６地点
17d　北神第11地点
19　下宅原遺跡
　　大前地区
20a　宅原遺跡
　　岡地区
20b　宅原遺跡
　　蓮花寺鼻地区

Ⅱ．昭和59年度の発掘調査

1．西神（せいしん）ニュータウン内遺跡

昭和59年度の西神ニュータウン建設及び関連事業区域内での埋蔵文化財調査は、発掘調査６件、試掘調査２件、工事立会２件、分布調査２件を実施した。発掘調査を実施したのは、第38地点、第90地点、第65地点、第41地点、第42地点、第43地点の各遺跡で、試掘調査を実施したのは、第73地点と西神Ｂ地区である。このうち、第43地点、第73地点では、遺構、遺物は発見されなかった。そこで本年報では、第38地点、第90地点、第65地点、第41地点、第42地点の５遺跡について報告したい。

西神第38地点遺跡

1．調査経過　昭和45年度に実施した西神ニュータウン内第２次発掘調査で、弥生土器（第Ⅳ様式）と須恵器（６世紀中頃）が出土した。しかし顕著な遺構は検出されておらず、再調査が必要とされていた。

昭和58年度に北側斜面の試掘調査を実施した結果、遺物（弥生土器片、須恵器片）が出土したため、全面発掘調査を実施した。

立　地　調査地は、東西に伸びる尾根の南北両斜面で、最高所の標高は54ｍである。

2．検出遺構　弥生時代中期（第Ⅳ様式）の竪穴住居址３棟及び住居址に附随する土壙・ピット、古墳時代後期（６世紀中頃）の木棺直葬墓１基、鎌倉時代の土壙１基、近世土壙５基、時期不明火葬墓址１基、同じく溝３条、土壙１基を検出した。

弥生時代の住居址３棟のうち２棟（ＳＢ01、ＳＢ02）は北側斜面に存在している。

ＳＢ01　ＳＢ01は、長軸5.3ｍ、短軸2.0ｍで推定長軸6.0ｍ、短軸5.0ｍの楕円形に復元できる。周壁溝は全周せず、西側のみ検出した。床面で柱穴３か所と土壙１基を検出した。土壙内には、炭・灰が充満していた。また、壁体でも炭化材(長さ約30㎝）を検出した。

ＳＢ02　ＳＢ02は、残存規模長軸6.1ｍ、短軸3.1ｍ、推定長軸6.1ｍ、短軸4.5ｍの不整方形に復元できる。床面で柱穴４か所を検出したが、周壁溝は検出されなかった。

ＳＢ03　南斜面のＳＢ03は、残存規模長軸6.2ｍ、短軸3.8ｍを測り、推定長軸7.0ｍ、短軸5.0ｍの楕円形に復元できる。

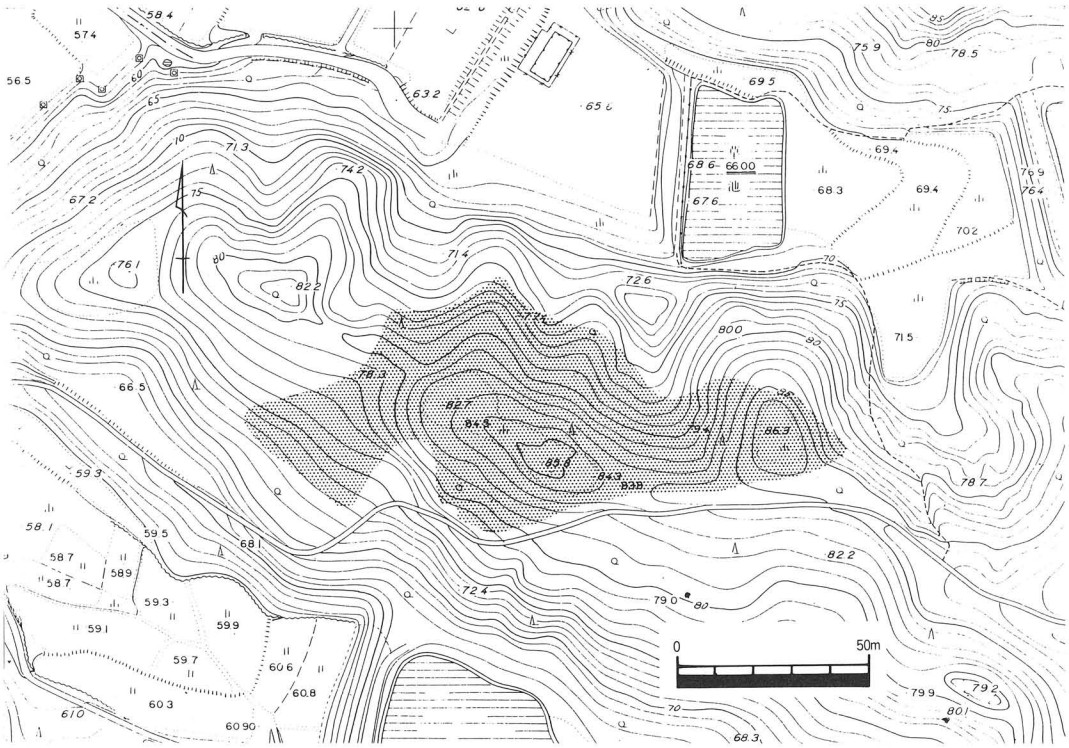


fig. 2　西神第38地点遺跡調査範囲図

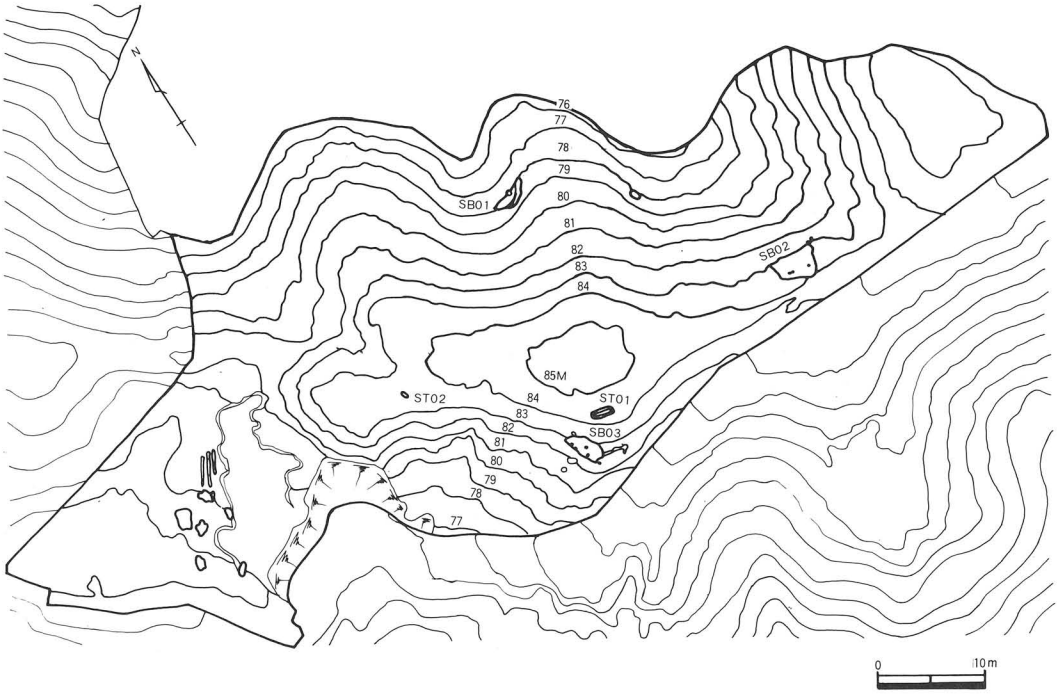


fig. 3　西神第38地点遺構平面図

fig. 4　ＳＢ01
（北から）

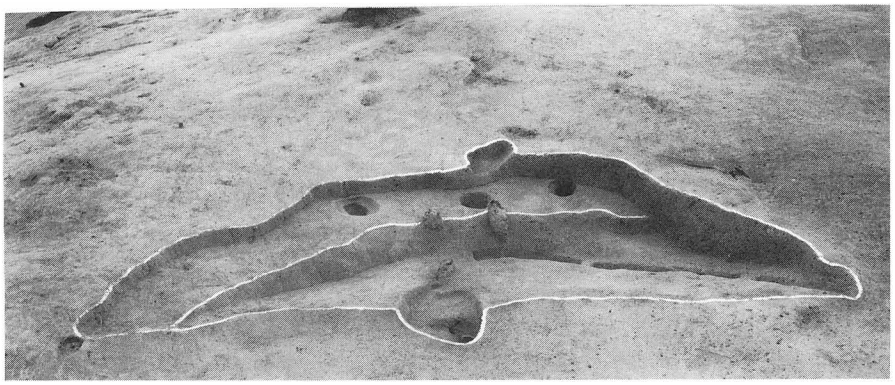


fig. 5　ＳＢ02
（北から）

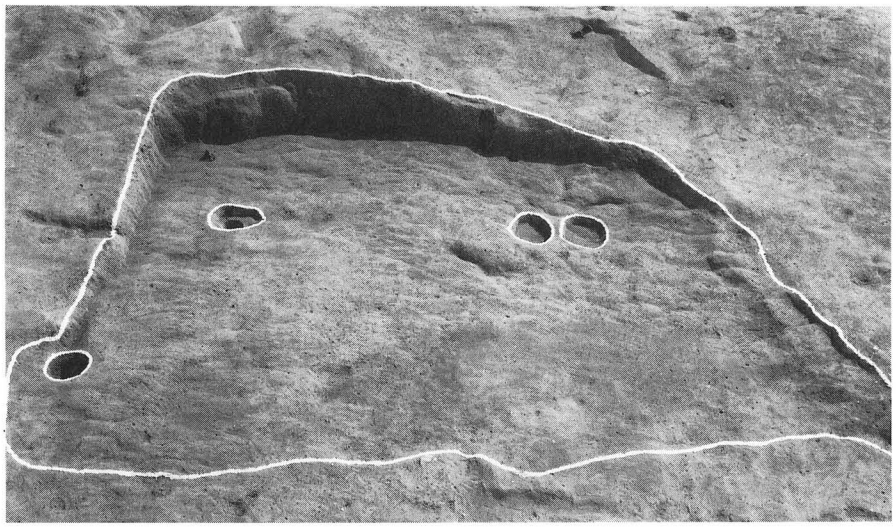
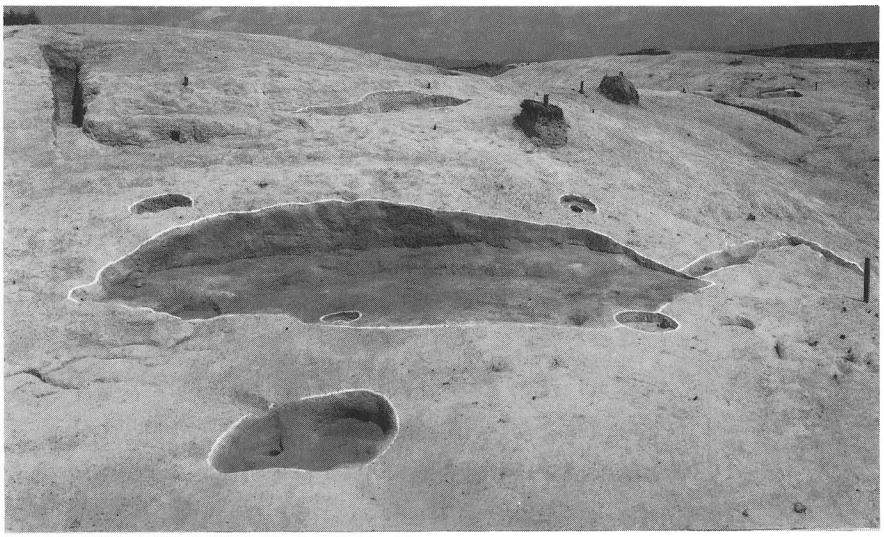


fig. 6　ＳＢ03
（西から）



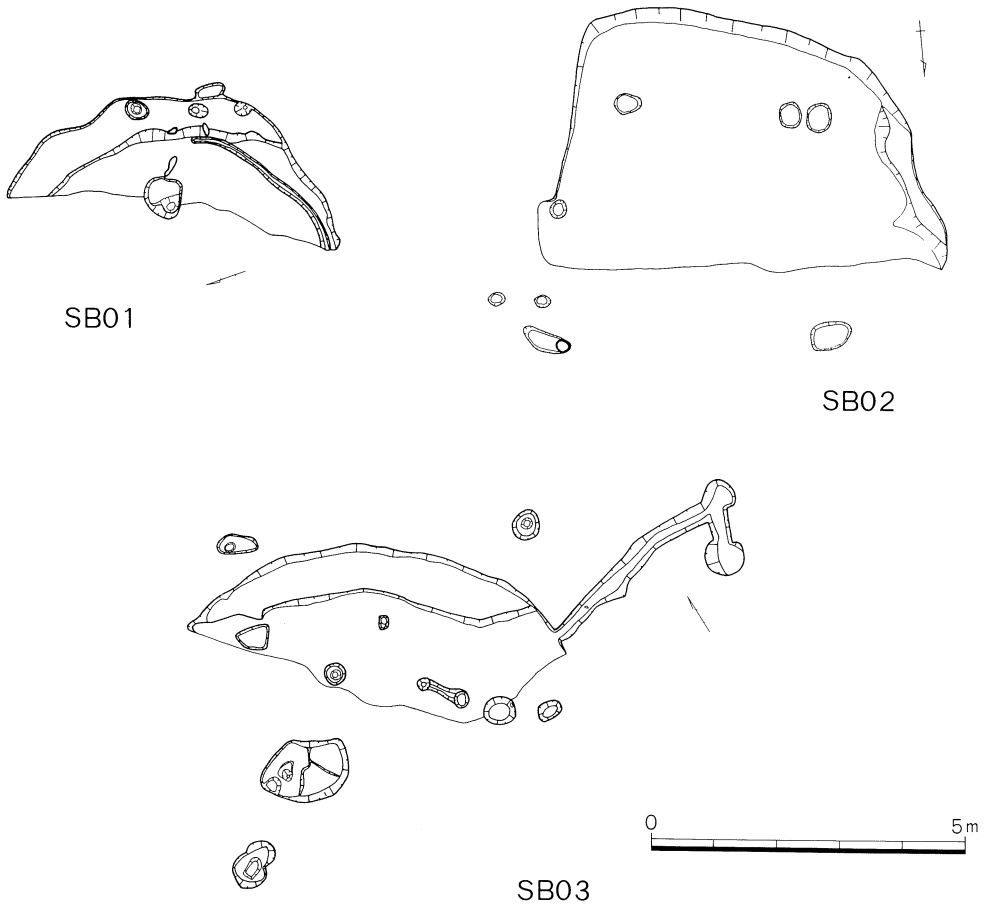


fig. 7　ＳＢ01、ＳＢ02、ＳＢ03平面図

木棺直葬墓（ＳＴ01）　古墳時代の遺構としては、木棺直葬墓１基を検出している。この埋葬施設に伴う墳丘や周溝は認められない。掘形は長辺3.15m、短辺1.2m、深さ0.3mで、棺の規模は長辺2.5m、短辺0.55mを測る。棺内からは、須恵器坏5点、短頸壺２点、高坏１点、甕１点、鉄鏃１点、刀子１点、不明鉄製品１点、銀製指輪１点が出土している。須恵器及び鉄製品はいずれも棺底面から遊離しており、棺蓋の上に供献されていたことを示している。埋葬時期は、出土遺物から６世紀中頃と推定される。

中、近世遺構　中、近世に属する遺構は、調査区南西部分の平坦面で検出された。竹林の近くであったため、平坦部東側は大きく攪乱されている。

鎌倉時代後半（13世紀後半）の土壙１基（ＳＫ03）を検出した。埋土から土師器皿３点、北宋銭の「景徳元宝」１点が出土している。東側が攪乱により削平されているので全体の形状は不明である。

近世（江戸時代）に属する土壙５基を検出した。そのうち「寛永通宝」がＳ

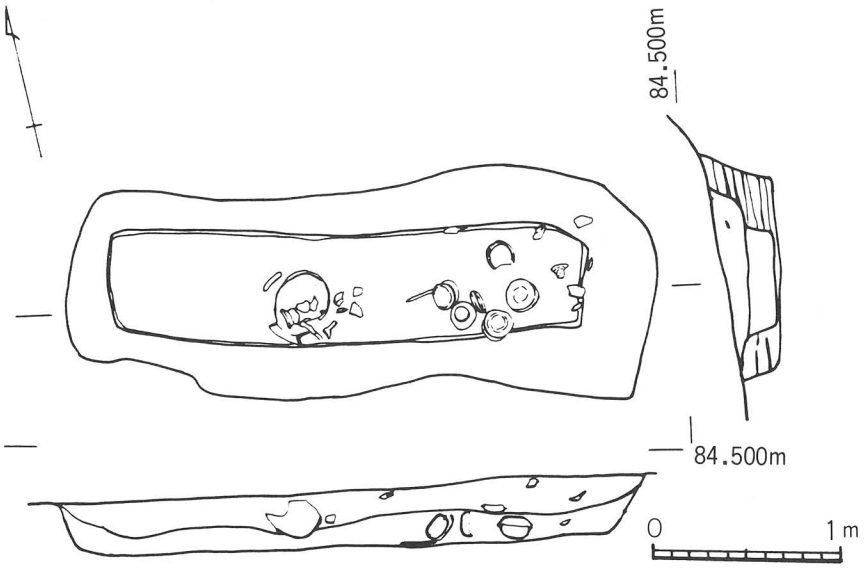


fig. 8　ＳＴ01実測図

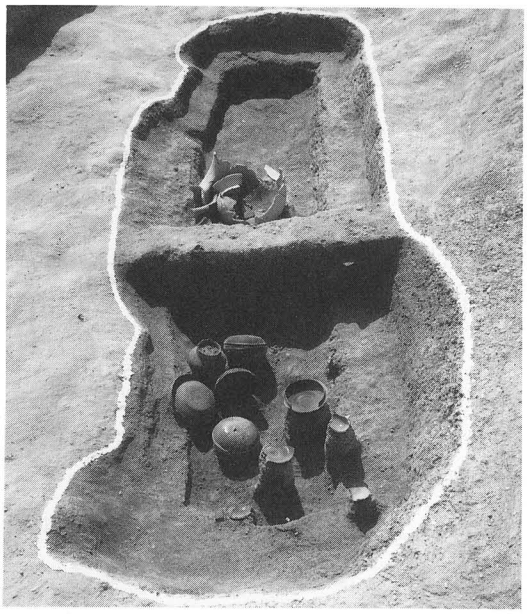


fig. 9　ＳＴ01（東から）

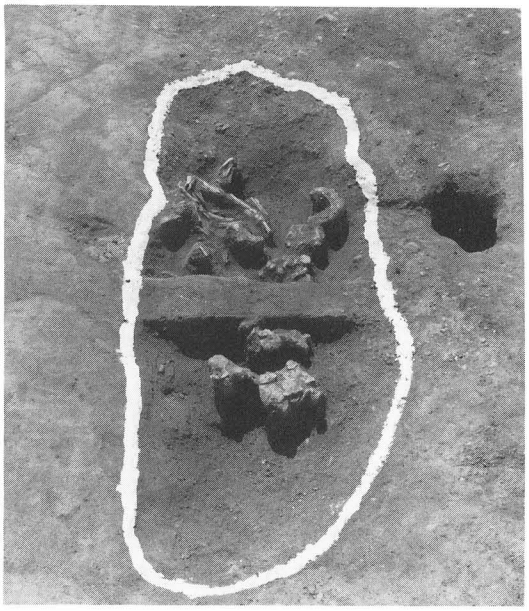


fig. 10　ＳＴ02（北から）

Ｋ05から２枚、ＳＫ06から６枚出土している。いずれの土壙も深さが５～15cmと浅く、形状も不整形である。埋土には、炭の細片が含まれている。ＳＫ04、07、08は埋土から何も出土していないが、寛永通宝が出土する土壙と同一の埋土状態であるところから、これらの土壙と同時期であると考えられる。

火葬墓址（ＳＴ02）　火葬墓址１基（1.2m×0.4m、深さ0.1m）を尾根上で検出した。埋土からは骨片多数が出土している。骨片には大きな破片は含まれておらず、出土状態も雑然としている。人骨か獣骨かは、まだ判明していない。他に遺物も出土しておらず、時期を推定することができない。

また、ＳＢ01の東側で土壙１基（ＳＫ01　1.5m×0.6m、深さ0.4m）を検出したが、まったく遺物が出土しておらず、これも時期を推定することができない。

３．出土遺物　遺物出土量は調査面積に比して少なく、28ℓのコンテナ約20箱程度である。約半数は弥生土器で、他は須恵器である。他に少量の石製品と鉄製品がある。弥生土器はほとんど包含層からの出土であるため、完全な形を保つものはない。壺の頸部は断面三角形貼付突帯、凹線紋帯、指頭圧痕文突帯の３種がみられる。ごくまれではあるが肩部に波状紋を多用しているものがある。

甕の形態は、くの字に頸部を折り曲げ口縁端部をつまみあげるものと、ゆるやかに外反させて端面を上下に少し拡張させるものとに分けられる。

その他の器種としては、鉢、脚部に凹線をめぐらせる器台、脚部に沈線、凹線をめぐらせる高坏などがある。

これらの時期は壺の装飾技法からみるかぎりでは、中期のⅢ様式新段階からⅣ様式に属している。

石製品には、石鏃、サヌカイト剝片のほか特徴的な遺物として、磨製石剣の破片が１点ＳＢ03の斜面下方から出土している。形態的には有樋式に分類される。材質は粘板岩である。幅3.8cmで樋は幅0.4cm、深さ0.1cmである。 表面には細かい研磨痕が認められる。

須恵器は、ＳＢ03周辺の南側斜面の包含層とＳＴ01から出土している。包含層出土のものは、5世紀後半から6世紀中頃に至る時期に属している。その中に手持ちヘラ削りを施した坏身１点も含まれている。これはＴＫ208併行期に属すると推定される。この時期に属する遺物として大型甕・甕が出土している。ＳＴ01出土須恵器は６世紀中頃に属している。坏のヘラ削りは不明瞭で口径に比して高さは低くなってきている。坏蓋の稜線も不明瞭で天井部のヘラ削りは径の約½程度しか認められない。坏身のたちあがりは比較的長いものと短いものがあり、型式差を想定できるが、出土状態からは、同一時期のものと考えられる。

銀製指輪　ＳＴ01棺底出土の指輪は、外径2.0cm、内径1.8cm、厚さ0.3cm、重量2.0ｇで銹の付着はほとんどなく、ごくわずかに緑青がふきだしているが表面の破裂は認められない。奈良国立文化財研究所での螢光Ｘ線分析調査の結果、純度の高い銀製品であることが判明している。この酷似例が、福岡県北九州市吉田古

墳群から２点出土している。同じく棺内から出土した鉄鏃は刃部が5.6cmの長三角形、刀子状品は、刃部長約３cmの刃片で木工用鉄器と推定される。もう１点も刀子の破片と推定できる片刃の鉄片であるが、身幅が狭い点や刃角度が鈍い点など疑点も多く、断定できない。

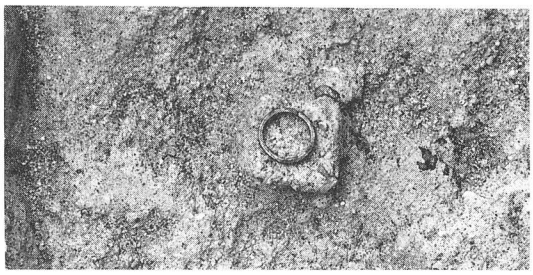


fig. 11　ＳＴ01出土銀製指輪

中近世に属する遺物は銭貨、土師皿が出土している。銭貨は「景徳元宝」１枚、「寛永通宝」８枚が出土している。土師皿は口縁端部が肥厚し、底部からのたち上がりもシャープさを欠いている。

４．まとめ

弥生時代　弥生時代の住居址を３棟検出した。西側の尾根の先端に向けて集落が広がる可能性はあるが、そのあり方は散在的である。いずれにせよ集落と呼ぶには小規模である。

土器の出土量も少なく、出土量と消費量は比例関係にあると推定できることから、この集落は恒常的な集落ではなかったことが窺える。なお、この尾根の先端には同時期（第Ⅳ様式）に属する方形台状墓２墓が発見されているが（西神第40地点)、その造墓主体とこの集落の構成員との関係を直接的に結びつける資料は得られなかった。しかし台状墓の立地する尾根の背後にも同時期の住居址が存在することは興味深い事実である。

古墳時代　古墳時代の遺物が南斜面を中心に包含層から出土しているが、これらはほとんどが須恵器であり、土師器は出土していない。西神ニュータウン内の同時期の古墳においても同様の傾向が認められ、かつ集落では土師器の比率がもう少し上昇することを考えれば､この尾根の上にかつて古墳が存在したか、あるいはＳＴ01に伴う儀礼行為が行われたことを示している。しかし先述したようにＳＴ01に先行する須恵器が各器種出土していることは、ＳＴ01に先行する埋葬施設が後世の削平や流失によって崩壊した結果、供献されていた須恵器が付近に散乱したものと推定される。

鎌倉時代　古墳時代を経て鎌倉時代になると南西部平坦面に土壙が築かれ、尾根上にも少量の須恵器が出土しているが、遺構に伴うものはない。さらに近世にも銭貨を伴う土壙が穿たれているが用途は不明である。

以上のように第38地点遺跡では３時期の生活痕跡を知ることができた。

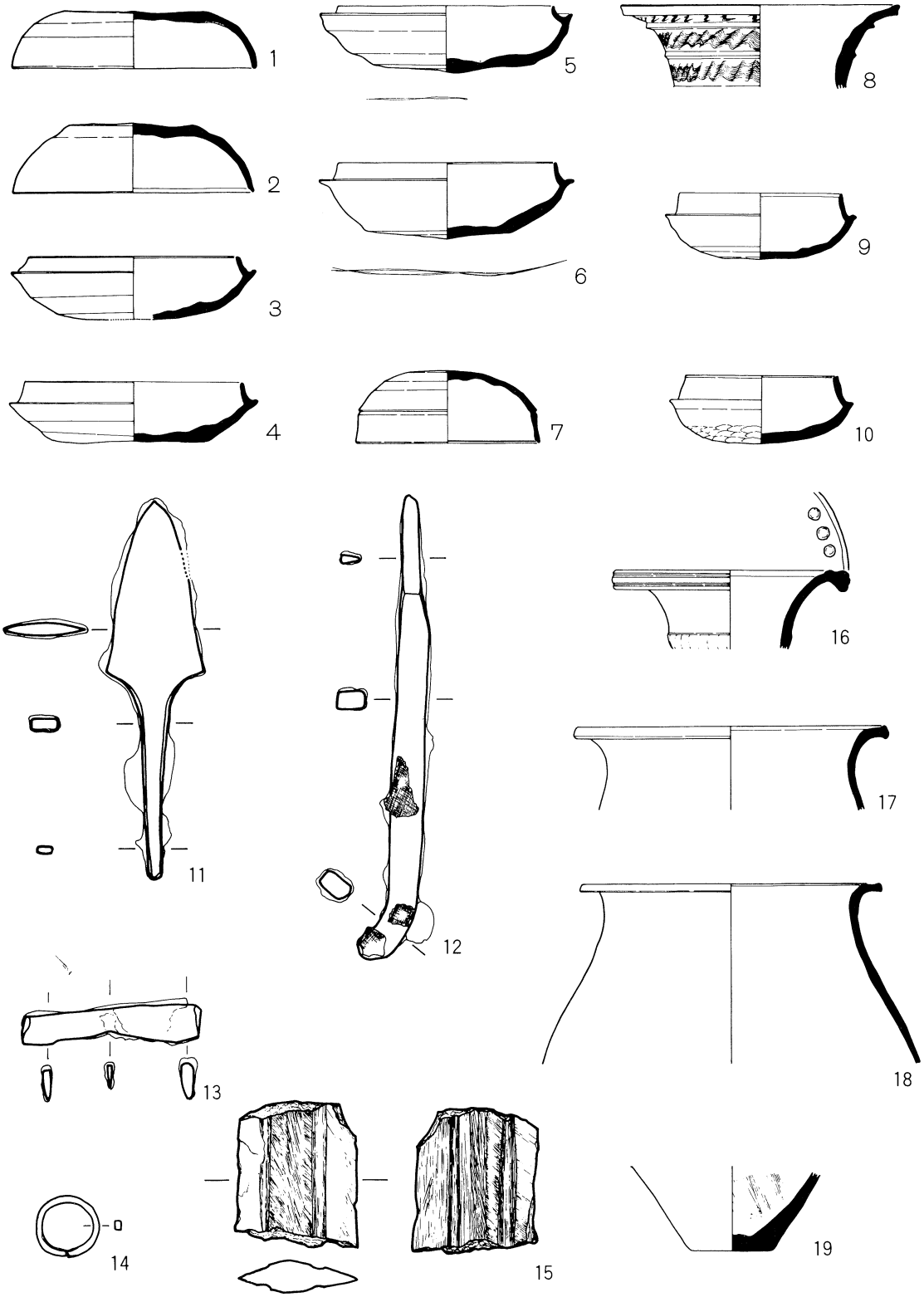


fig. 12　出土遺物実測図　（1～6・11～14 ST01出土、7～10・15～19 包含層出土、1～10 須恵器、11～13 鉄器
14 銀製指輪、15 石剣、16～19 弥生土器　縮尺：11～15 $\frac{1}{2}$、他は $\frac{1}{4}$）

西神第90地点遺跡

1．調査経過　養田地区連絡道路建設工事に伴い、発見された遺跡である。従前より付近に窯址があることが知られていたが、正確な地点は不明であった。

伐採に伴う重機の集木作業の際に遺物が採集されたため、発掘調査を実施することになった。発掘調査終了後、設計変更を行い、三方をコンクリート擁壁で囲い、マサ土で埋め戻しを行って現状保存することになった。

2．検出遺構　窯体は標高70mに立地しており、主軸をほぼ南北に向けている。

窯体の規模は、全長5.0m、幅1.1mを測る。中央部分が削平を受けており、煙出し付近1.0m、焚口付近1.6mを確認した。灰原もすでに削平を受けており、ほとんど残存していなかった。窯体の角度は煙出し付近で19度13分、焚口付近で17度30分を測る。煙出し付近は窯の平面形にほぼ並行して幅0.5m、深さ0.2～0.4mの溝が窯体の外側にめぐっている。この溝は焚口付近では認められない。

削平断面で観察するかぎり、窯体の床面は1面だけで貼り直しは認められない。床面は細かく亀裂が走り、小さなブロックに分かれている。

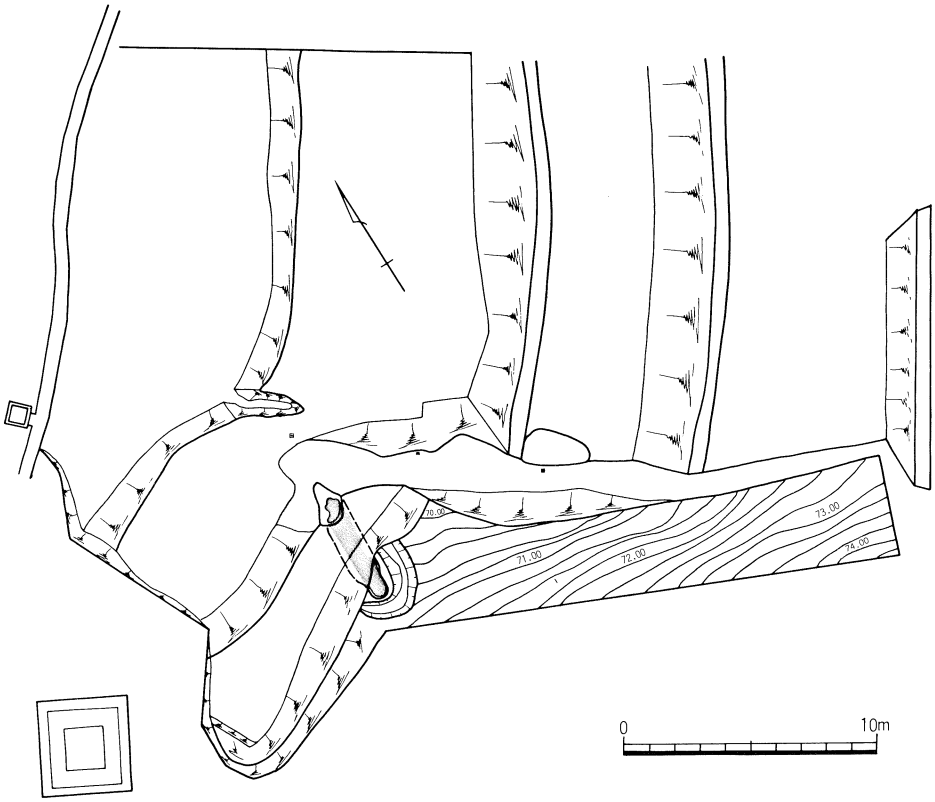


fig. 13　第90地点遺跡地形図

fig. 14　窯体検出状況（北から）

fig. 15　窯体完掘後

fig. 16　窯体煙出し付近（北から）

fig. 17　窯体焚口付近（北から）

3．出土遺物　灰原が削平されているので遺物の量は少ない。窯体内から小片が数点出土しているほか、周囲の耕土や客土内から出土している。器種としては、須恵器埦、鉢、甕、瓦が出土している。

埦は、口径約15.0cm、底径6.0cm、器高5.5cmで胴部中央に１条の沈線をめぐらし、口縁端部は丸くおさめている。底部外面は糸切り痕を残し凹んでいる。

鉢は、口径31.5cmで、外面口縁直下に強いナデを加え、口縁部を外反させている。甕の外面にはタタキ目を施している。タタキ目は２条／cmと荒い原体を用いている。

これらの遺物の特徴から、この窯は神出古窯址群釜ノロ５号窯址とほぼ同時期か、若しくは少し下がる時期と推定できる。

なお窯址周辺の客土中には弥生土器片（中期後半）も含まれており、かつて弥生時代の遺構が存在していたことを窺わせるが、後世の水田開発により削平、消滅したものと思われる。

４．まとめ

西神ニュータウン内には、この他に88地点と土瓶谷古窯址でも鎌倉時代の窯址が発見されているが、90地点が古相を示している。これら西神ニュータウン内に築かれた窯址は、明石川をはさんで対岸の印南台地に広がる神出古窯址群に対応するものと推定される。その関係は現時点では不明であるが、大きな差異としては、神出古窯址群では、数基の窯址が単位を成して展開しているのに対して、西神ニュータウン内の窯址はいずれも単独で存在する点があげられる。

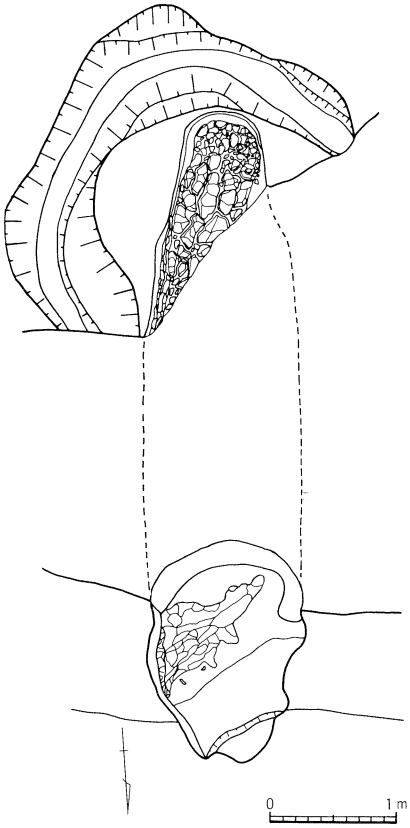


fig. 18　窯体平面図

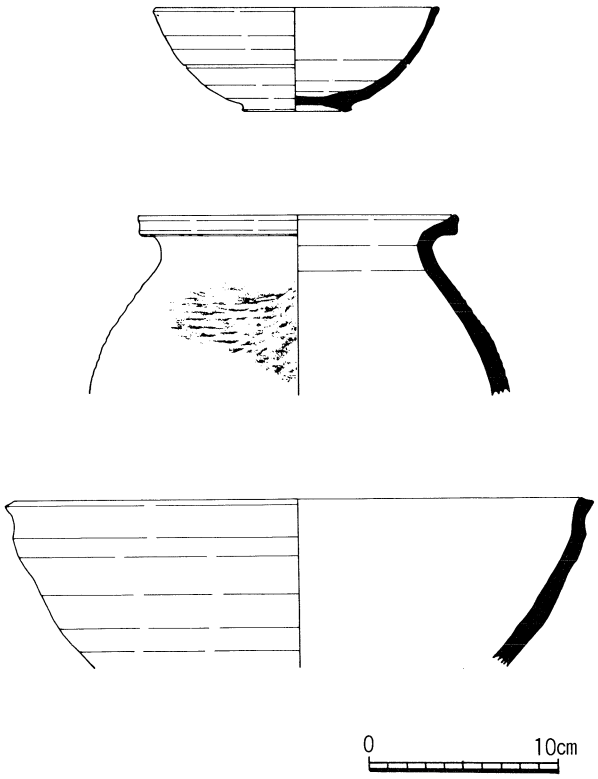


fig. 19　出土須恵器実測図

西神第65地点遺跡

1．調査経過　昭和49年度における試掘調査によって尾根上に弥生時代の竪穴住居址１棟、焼土壙などを検出し、弥生時代の集落が存在していることを確認した。この調査の結果をもとに、保存区域が決定された。昭和58年度に保存区域以外にトレンチを設定し、試掘調査を実施した。その結果Ａ～Ｆ地区の全域に弥生時代の遺物・遺構が存在していることが確認できた。昭和59年度は、西神７号線及び補助幹線に相当するＡ、Ｂ、Ｃ、Ｅ地　区に対して発掘調査を実施した。

2．立　地　標高102ｍを最高所とする丘陵上に立地し、標高約80ｍより高所に集落址が広がっている。櫨谷川流域に属しているが、流域との間にもう一連の丘陵が南北に伸びているために、殆ど流域の平野部を望むことができない。

平野部がもっとも良く見えるのは、櫨谷川流域と明石平野が接する二ツ屋・菅野付近である。さらに明石川河口付近約1.5㎞の海岸線を丘陵頂部から望むことができる。眺望範囲のなかに明石川本流と櫨谷川・伊川の分岐点が含まれている。同時期の丘陵上の集落址である西神50～52点遺跡、青谷遺跡に対する眺望は極めて良好である。

3．検出遺構　弥生時代中期後半の竪穴住居址６棟、地山整形遺構６か所、通路状遺構１条、溝状遺構１条、土壙１基、ピット群、湧水土壙１基、焼土面１か所並びに平安時代の焼土壙１基、時期不明土壙１基を検出した。

Ａ地区　数片の弥生土器が出土しているが、他の地区に比べるとはるかに遺物量は少ない。住居址は存在せず、通路状のわずかな平坦面と、湧水土壙１基、地山斜面を少しえぐり火を焚いた部分１か所が認められた。

湧水土壙は長軸1.2ｍ、短軸1.0ｍ、深さ0.6ｍの楕円形を呈している。構造上は、素掘りの穴で湧水の量も少なく、水が溜る程度である。

Ｂ地区　弥生時代の住居址４棟、地山整形遺構６か所、通路状遺構１条、ピット群を検出した。ＳＢ06のみ尾根上に立地しており、他のＳＢ03、04、05は斜面に築かれている。ＳＢ04、05は、ほぼ同一標高上にある。

ＳＢ03　標高87ｍに立地し、検出した住居址の中でもっとも高い所にある。平面形は、長軸6.5ｍ、短軸3.7ｍの半円形を呈する。周壁溝が１条めぐるが、全周はしない。周壁溝内の床面は、長軸4.15ｍ、短軸2.5ｍを測る。周壁溝内には柱穴が４か所検出でき、その内３か所が主柱に関係すると推定できる。この３か所の主柱に囲まれ土壙が１基存在する。直径1.1ｍの不整円形で、深さは約0.3ｍ。火を受けた痕跡はない。

南側の周壁溝が途切れた部分に、溝の外側に柱穴が１か所あり、入口に関するものと推定できる。

壁体は地山ではなく、平面形よりも約0.5ｍ大きく地山を掘削し、 壁体を盛

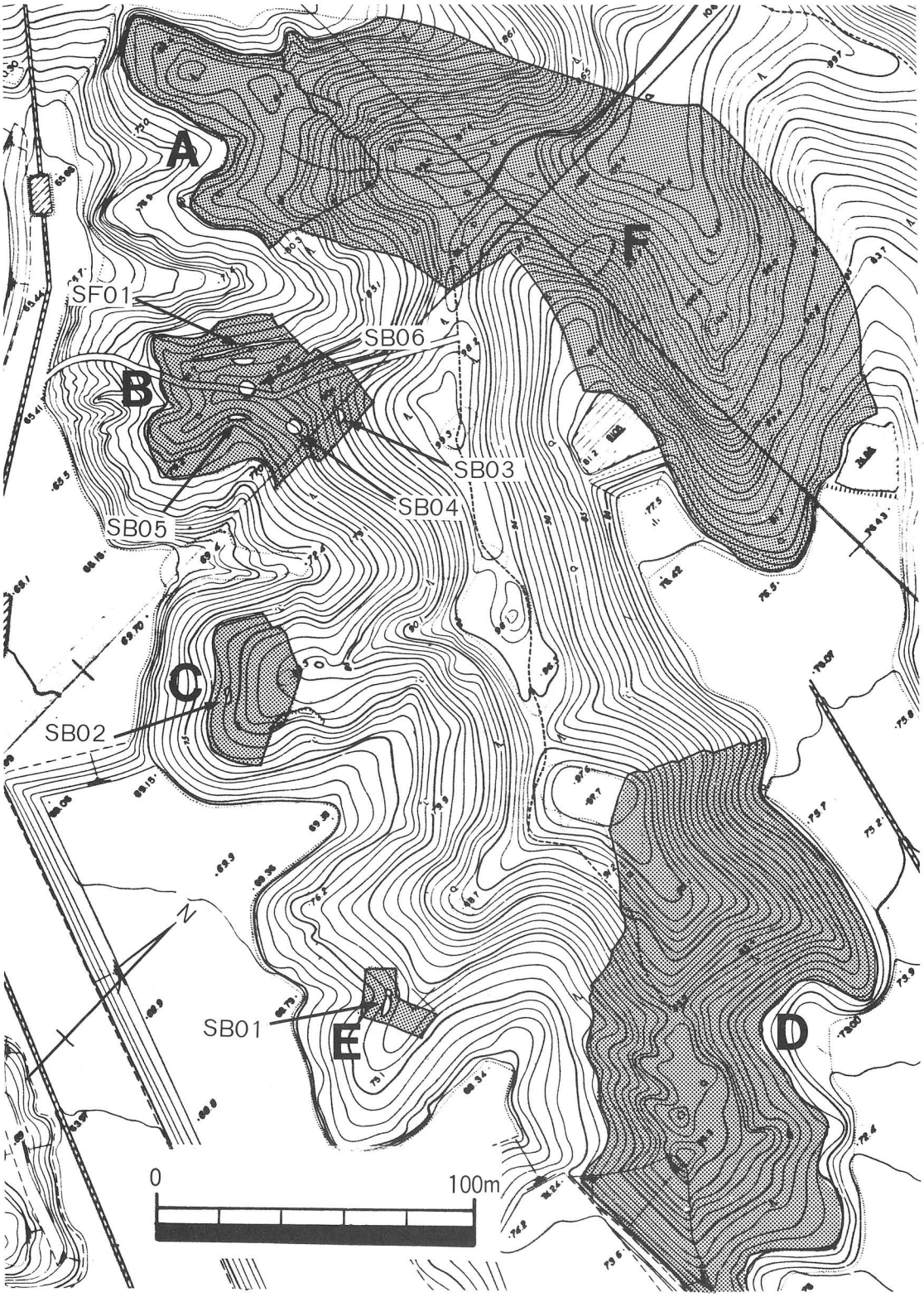


fig. 20　西神第65地点遺跡調査区平面図

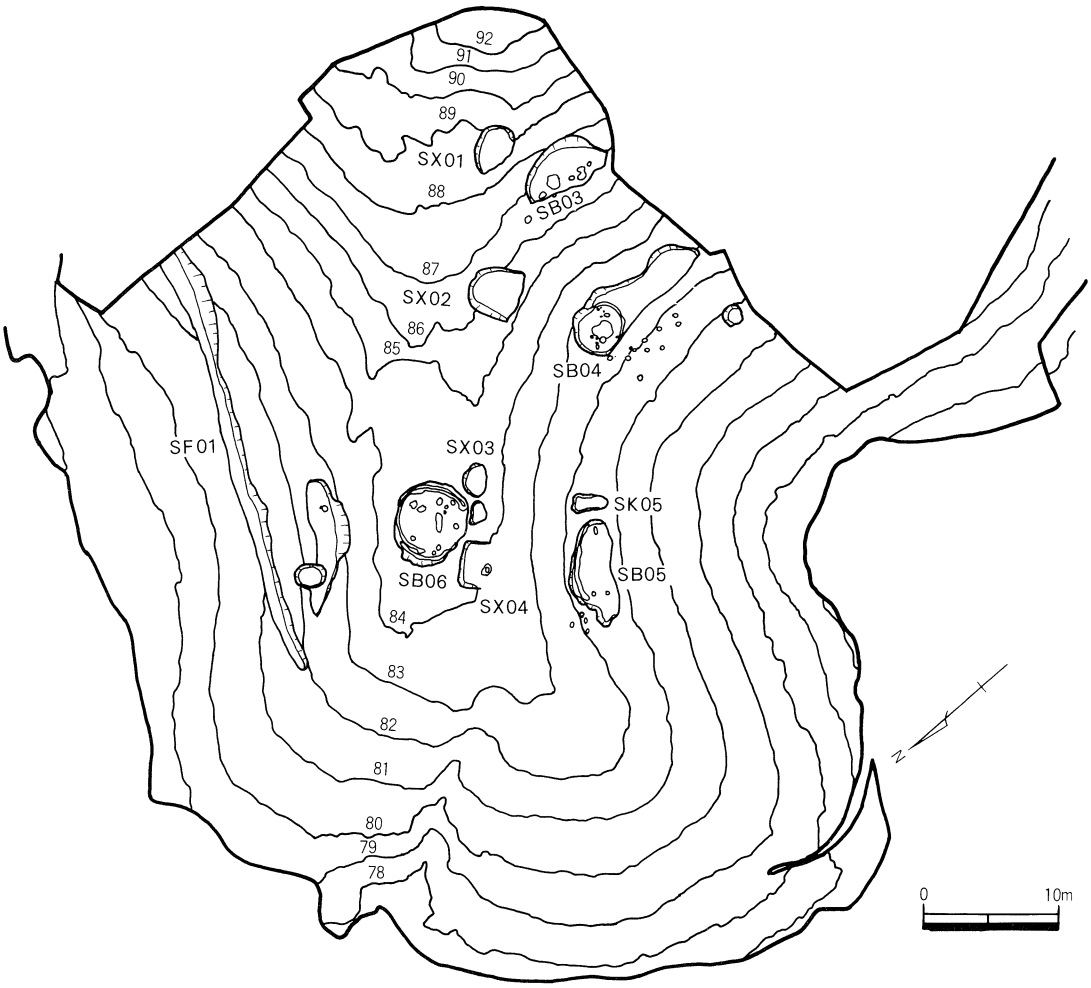


fig. 21　B地区遺構平面図

土によって形成している。残存床面のうち約$\frac{2}{3}$は盛土によってなされている。

中央土壙の南側でサヌカイト剝片とチップが密集状態で出土している。埋土からも多量のサヌカイトが出土している。

ＳＸ01　ＳＢ03は斜面上方に地山整形遺構（ＳＸ01）を伴っている。平坦面は 3.0m×2.5mの不定形で、土器、サヌカイト剝片、チップが出土している。

ＳＢ04　ＳＢ03の斜面下方にあり、流土を切り込んで構築されている。斜面下方側の壁体は流失しているが、周壁溝は全周しており、全体の形状を知ることができる。平面形は、長軸3.8m、短軸3.6mの楕円形を呈している。中央部に 1.4m×1.2m、深さ約0.15mの不整形土壙が穿たれ、その土壙をはさんで２つの柱穴（柱痕径0.1～0.15m）が設けられている。この他に大小5か所の柱穴が床面

に穿たれ、さらに周壁溝と切り合う位置に３か所の径0.1m程度の小ピットが穿たれている。

中央土壙を中心に放射線状に床面から壁体にかけて炭化材を検出した。この炭化材に近接して各所にカヤ状の植物遺体が炭化状態で広がっている。

さらにほぼ床面に接して５群の土器群が出土しており、ほぼ原位置を保っていると推測できる。このような炭化材の有様や土器群の出土状態から、この住居址は、火災によって倒壊し、放棄されたものと推定できる。

なお、この住居址の南側に同一レベルで約6.0m×1.5mの平坦面をつくろうとした地山整形痕が認められる。これは、通路として機能していたと考えられる。

ＳＸ02　ＳＢ04は斜面上方に地山整形遺構（ＳＸ02）を伴っている。床面は1.2×1.1mの不定形で床面から土器、サヌカイト剥片、チップ片が出土している。

ＳＢ05　尾根の南側斜面に位置している。残存規模は、長軸5.7m、短軸3.0mの楕円形を呈している。西側に約1.5mの張り出し部をもつ。床面の残存規模は 長軸5.15m、短軸3.5m程度と考えられる。幅約0.25m、深さ約5cmの周壁溝が北側から東側にめぐっている。壁体は盛土によって築いており、周壁溝部分は溝底よりさらに約0.1m深く地山を掘りこんでいる。床面で柱穴1か所を検出したが、他は認められなかった。床面で土器４群を検出した。

ＳＢ06　唯一、尾根上平坦面で検出した住居址である。南西部を除く部分で周壁溝が２重になっており、何らかの理由によって拡張が行われたと考えられる。長軸6.1m、短軸5.25mの楕円形を呈し、長軸は尾根方向に並行している。

床面規模は拡張前が長軸4.8m、短軸4.4m、拡張後長軸4.9m、短軸4.8mとなっている。周壁溝は２条とも幅0.2m、深さ0.1～0.15mで断面形はきついＵ字形となっている。床面ほぼ中央には、灰層と小片の炭化材を埋土とする土壙１基が穿たれている。この土壙の壁体の肩部は、焼成により一部赤色を呈している。床面で８か所の柱穴を検出した。柱の配置は５角形で、さらに中央土壙の東西２か所にやや小さい柱穴がある。５か所のうち２か所の柱穴は建替えが認められている。柱穴掘形は、不整楕円形になっており、柱痕はいずれも径約15cmで、掘形の底とほぼ一致している。床面が３か所で焼け締っており、床面直上で火を焚いた痕跡とみられる。

床面のほぼ全域からサヌカイト製の石器、石器未製品、剥片、チップが出土している。特にチップは約３kg出土しており、石器製作がこの住居址内で行われていたことを証している。特にチップが集中するのは周壁溝内側であり、石器製作時に飛び散ったチップが屋根や土留板に当たり床面に落ちたものと推定できる。拡張後の周壁溝の埋土にもチップが集中的に含まれている。

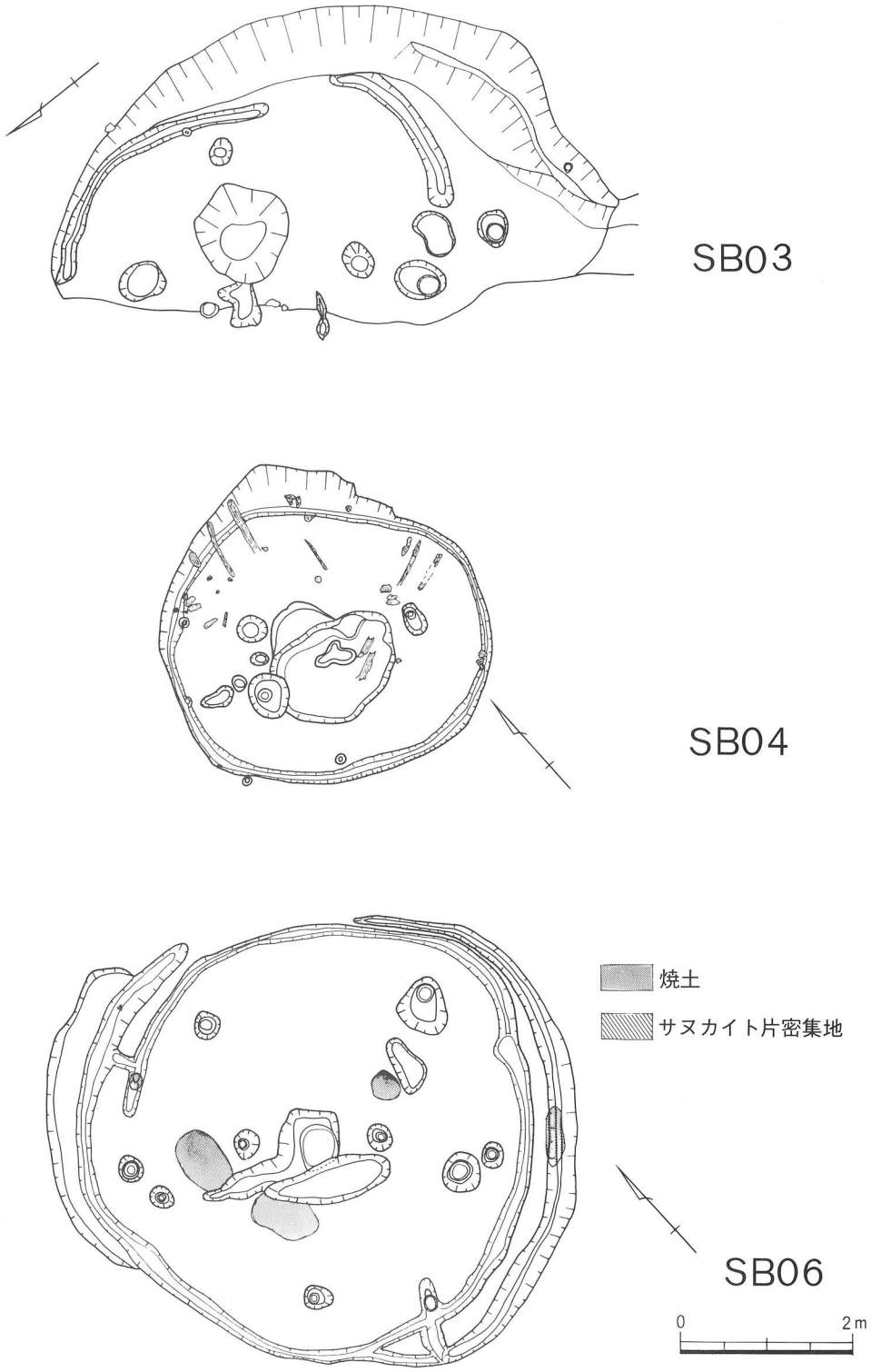


fig. 22　B地区住居址平面図

fig. 23　A地区（左）、B地区（右）遠景

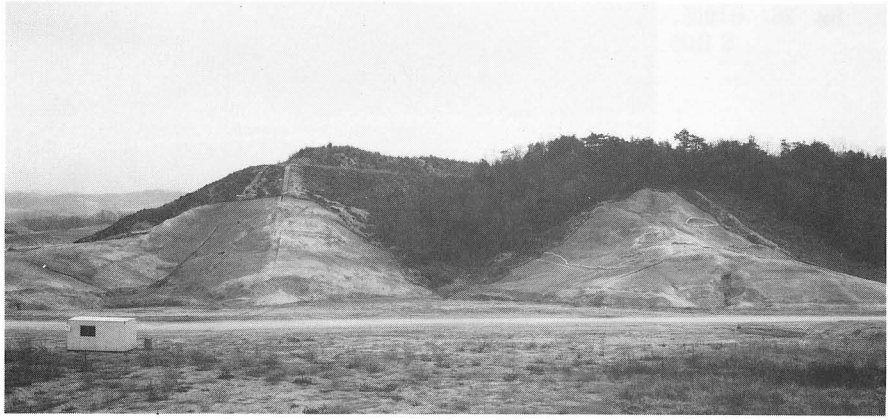


fig. 24　B地区、SB03

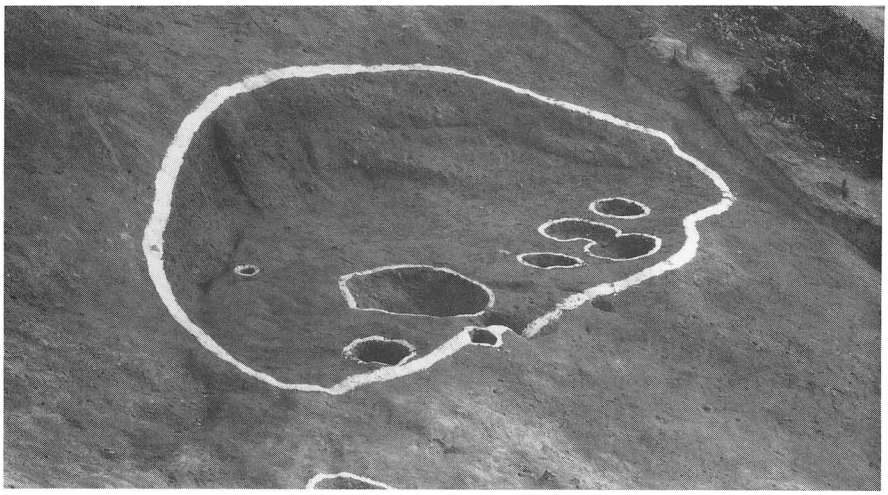


fig. 25　B地区、SB04

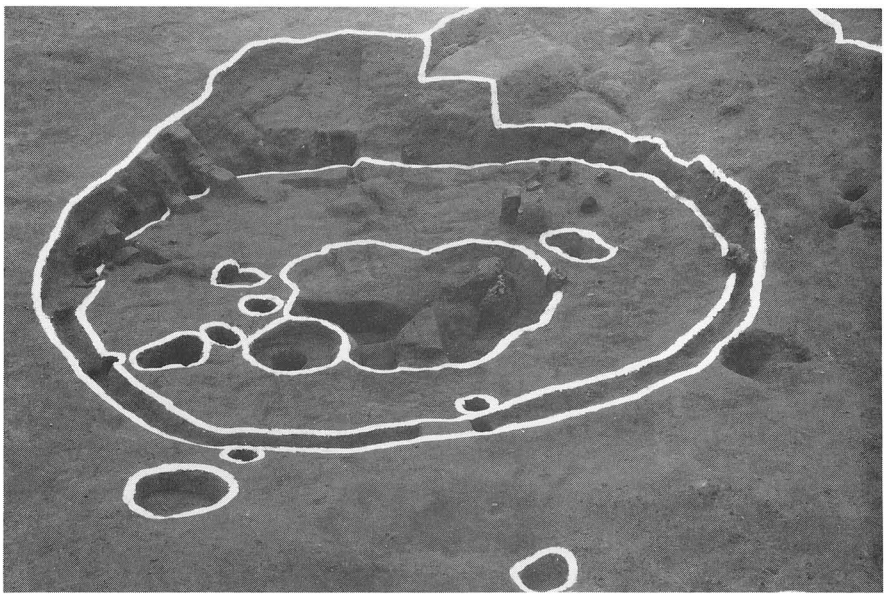


fig. 26　B地区、
S B05

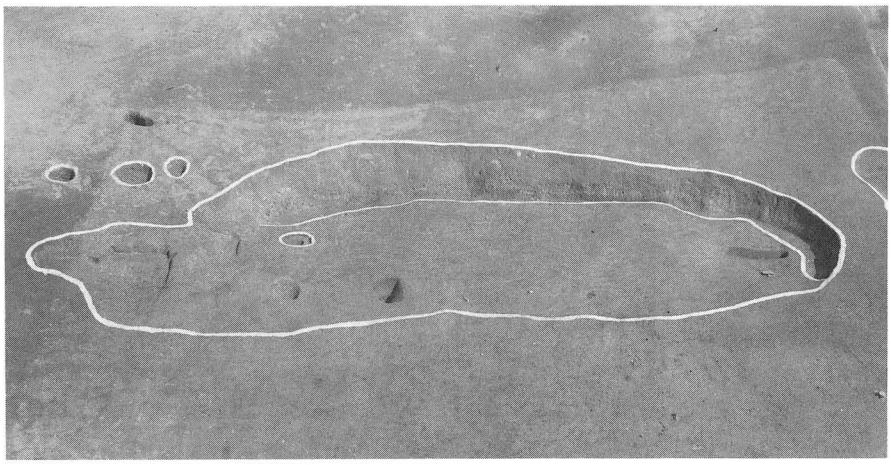
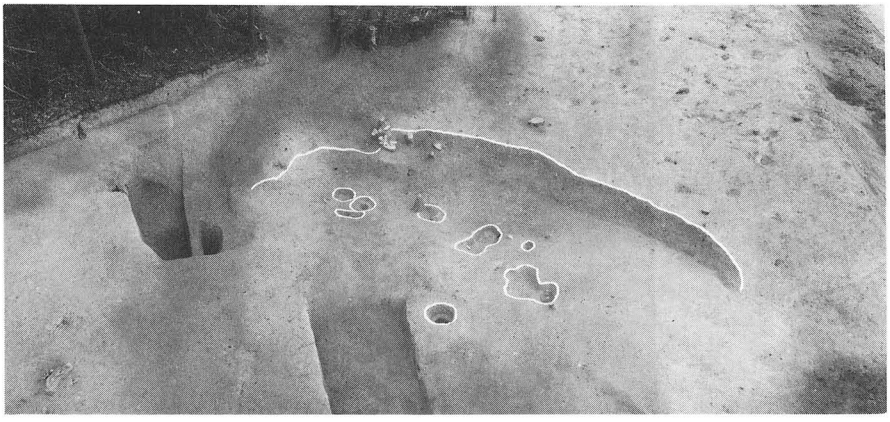


fig. 27　B地区、
S B06

fig. 28　E地区、
S B01



これは、拡張後に周壁溝を穿ち土留板を置いた後、埋め戻す際に床面のチップが混じったものと推定される。

住居址の埋土中からは土器片は殆ど出土していない。

ＳＸ03、04　ＳＢ06の東南と西南に地山整形遺構（ＳＸ03、04）を検出した。ＳＸ03は、2.45ｍ×1.7ｍの楕円形プランで、床面規模は2.5ｍ×0.85ｍである。サヌカイト剥片、チップが若干出土している。ＳＸ04は、東西3.95ｍ、南北2.2ｍで南側が流失している可能性があり、南北方向については、もう少し大きくなる可能性がある。北辺と東・西辺の一部にわたって周壁溝がめぐっている。周壁溝は幅約0.2ｍ、深さ5～10cmである。ＳＸ03と同様にサヌカイト剥片、チップが若干出土している。

ＳＸ03とＳＸ04の間に不整形土壙１基があるが、ＳＸ03、04よりは多くのサヌカイトが出土したものの、土器は出土しておらず用途は不明である。

fig. 29　Ｂ地区、ＳＦ01

ＳＦ01　尾根の北側斜面で東西約30ｍにわたる通路状遺構１条を検出した。西側に向かってゆるやかな傾斜で上っていく。この通路状遺構は斜面を削って平坦面をつくりだすもので、一種の地山整形遺構として位置づけられる。

東側の未調査区域に伸びており、現地表面でも段状を呈している。これを追うとＡ・Ｂ地区間の谷筋につき当たる。おそらく、この沢をつたって尾根に上っていくものと思われる。一方、Ａ地区においても平坦部が認められるので、

このＳＦ01が続く可能性がある。この平坦部は湧水土壙の付近まで検出できた。

ＳＫ05　長軸2.8m、短軸1.2mを測る土壙である。底面は南に向かって傾斜し、ほぼ全面に熱を受け赤くなっている。奈良時代の短頸壺が出土している。

Ｃ地区　住居址１棟と溝状遺構１条を検出した。ＳＢ02は、残存規模長軸５ｍ、短軸

ＳＢ02　２ｍを測る。平面形は隅丸方形を呈するが、床面の約½が流失しているため断定できない。柱穴を３か所で検出したが、明瞭な配置になっていない。このＳＢ02の北側に長さ5.0m、幅2.0mの溝状遺構がある。これは雨水が住居内に入るのを防ぐ施設と推定できる。ＳＢ02の埋土は炭化物細片と灰が充満しており、床面の一部が焼けている。焼失家屋と推定できるが、大きな炭化材がないことから、焼失後にかなり整理されていることが推測できる。周壁溝は東辺の北半分で検出した。幅約0.2m、深さ0.1mである。

ＳＢ02周辺、特に斜面下方で一括遺物が出土しているが、尾根の他の地点では殆ど遺物が出土していない。

Ｅ地区　北側斜面でＳＢ01を検出した。南側斜面では遺物も殆ど出土していない。

ＳＢ01　ＳＢ01は、遺物包含層を切り込んで築造されている。壁体、床面ともに盛土によって作られている。大きく掘形を掘った後に床、壁相当部分に土を盛っている。住居址の東端は土壙によって削平されている。

住居址の平面形は長軸6.45m、短軸2.45mの楕円形を呈する。床面は長軸6.45m、短軸1.95mを測り、床面の約½は流失している。西端から約2.0mにわたって幅約0.1m、深さ約0.1mの周壁溝を確認した。床面で柱穴を３か所検出したが全体の柱の配置は不明である。床面及び流失土から多数のサヌカイト剥片、チップが出土している。

４．出土遺物　出土遺物の大半は弥生土器である。他にサヌカイト、須恵器が出土している。総量は28ℓのコンテナで約30箱分である。

弥生土器の殆どは住居址埋土、住居址斜面下方から出土している。この出土傾向はかなり明瞭であり、住居址のない斜面では殆ど遺物は出土しない。

火災住居址であるＳＢ02、04では比較的床面に近いところで土器が出土しているが、他の住居址では殆ど床面では遺物が出土せず、住居址を放棄する際に搬出していることが窺える。

弥生土器は、壺、甕、鉢、高坏、器台、小型土器の各器種が出土している。壺の頸部の装飾には凹線紋、櫛描直線紋、櫛原体による圧痕絞突帯、口縁端には凹線紋、波状紋、円形浮紋、棒状浮紋が施されている。胴部にも直線紋や波状紋を施すものがあるが例は少ない。まったく装飾を施されていない個体はなく、無紋化されていても、口縁端面に凹線紋が施されている。豊かな装飾をもつ一群と無紋化した一群は、同一時期とは考えられず、第Ⅲ様式新段階から

第Ⅳ様式にかけての時間差を示していると考えられる。今後遺構単位での検討が必要であろう。

甕は口頸部の形態によって３つに分けられる。

ａ．内面に稜をもち「く」の字に屈曲するもの。

ｂ．内面に稜をもたずに「く」の字に屈曲するもの。

ｃ．短い口縁部で端部を極端に肥厚させるもの。

の３形態である。ａ、ｂには容量において大、中、小のものがある。いずれも内外面は、ハケ調整を行っている。

外面にタタキの痕跡をもつものがあるが、殆どが後のハケ調整によって消されている。タタキ目は５条／cm程度のものである。内面のヘラ削りは、認められないが、強いナデによって掻きとっているものもある。

鉢は口縁直下に３～４条の凹線をめぐらせるものが圧倒的に多いが、無紋のものも若干認められる。口縁部は、端面を水平とし、まれにこの端面に凹線紋を２条程度めぐらせるものもある。

高坏、器台については、出土数も少なく、完形に復元できるものもない。高坏の坏部は浅く、口縁部の形態は鉢と同様である。器台の脚部は、多条の凹線紋で飾ってある。

小型土器はＳＢ04からのみ出土している。壺３点、鉢４点、高坏１点があるが、甕形のものはない。いずれも手づくねで作られており、焼成、色調は他の土器とは異なっている。用途は不明であり、甕形土器を欠如する点は他の遺跡の出土傾向と一致する。

石器は、サヌカイト製石鏃56点、石錘４点、刃器８点、砂岩製砥石８点、同敲石２点、同投弾３点、粘板岩製石斧３点、同砥石２点が出土している。この他にサヌカイトの剝片、チップが約５kg出土している。

石鏃は、平基式３点、凸基無茎式11点、凸基有茎式27点、凹基式５点、不明６点、未製品４点に分類できる。凸基無茎式と凸基有茎式には、刃部が直線的に伸びる三角形のものと、刃部が内湾する形態のものがある。

砥石には荒砥、仕上げ砥があるが、荒砥は砂岩製で使用面は平坦になり、研磨痕は顕著ではない。仕上げ砥は粘板岩製で使用面は曲面をなし、鋭い線状痕が残されている。いずれも鉄器製作に関与するものと推定される。

石斧としたものは、いずれも小破片であり、全容を知り難いが、柱状片刃石斧に属するものと考えられる。石鏃56点に対して石斧３点という比率は、この集落における石斧の鉄器化を窺わせる。

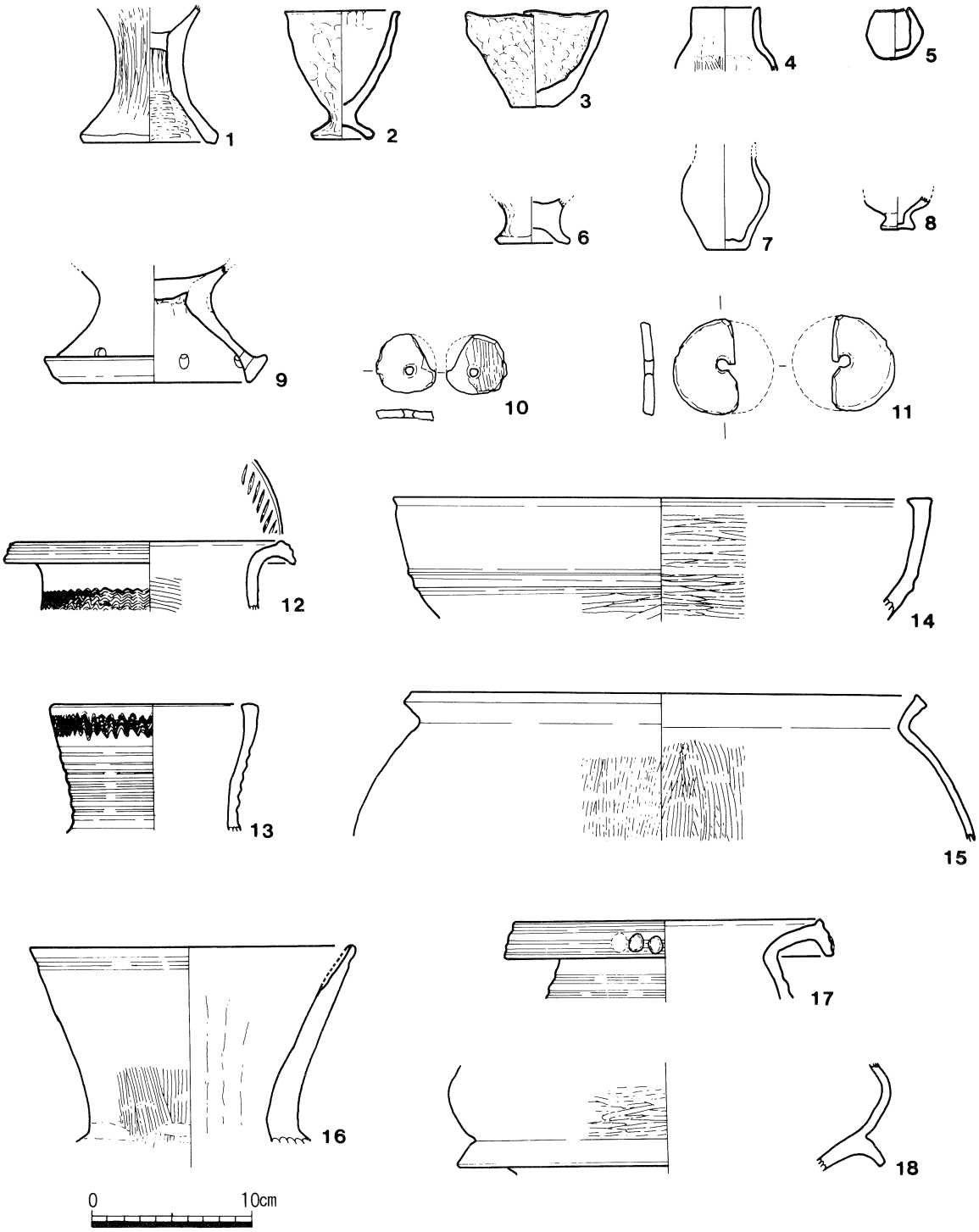


fig. 30　B地区出土遺物実測図　(1～11 SB04、12～14 SB03、15 SB05、16～18 SK03)

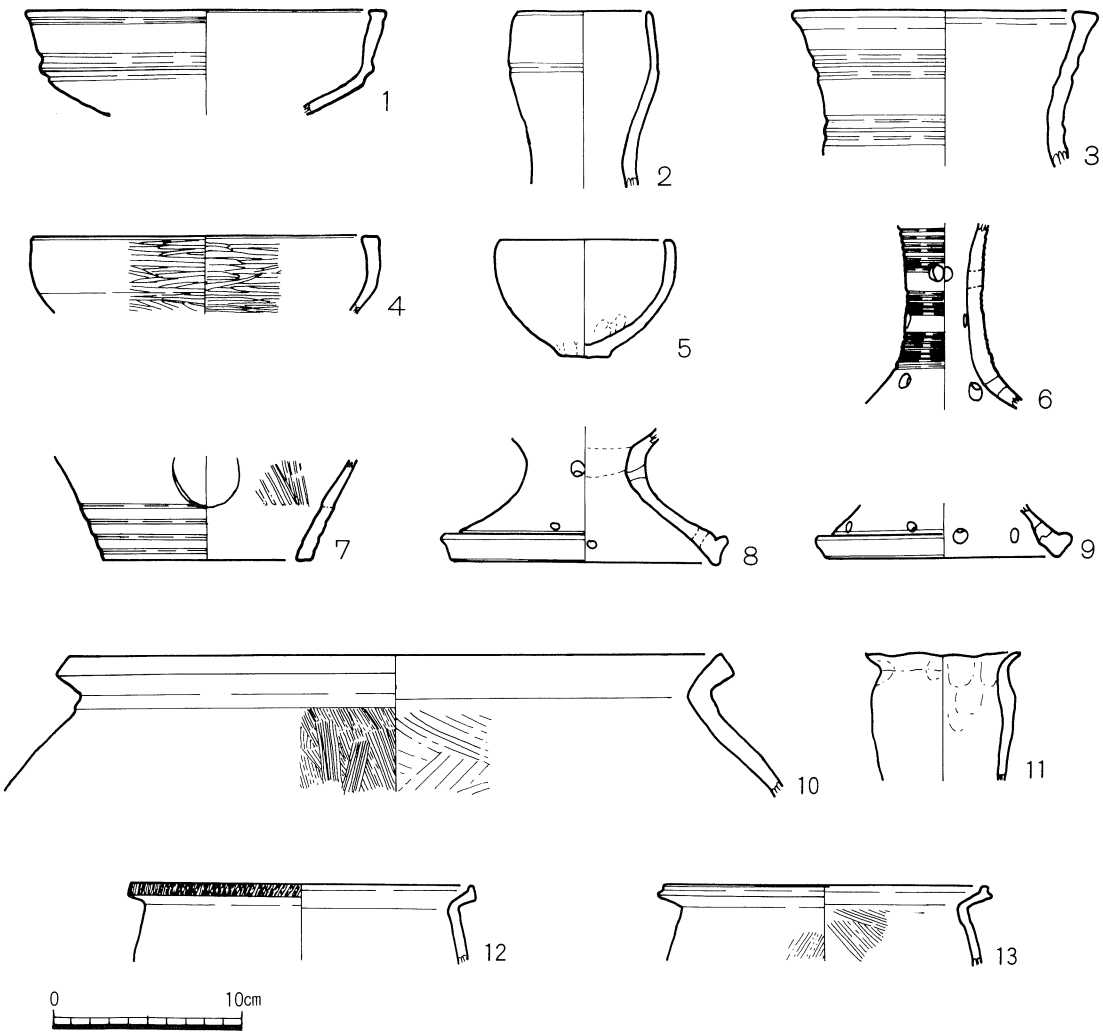


fig. 31　包含層出土遺物実測図　(1～9 B地区、10 C地区、11～13 E地区)

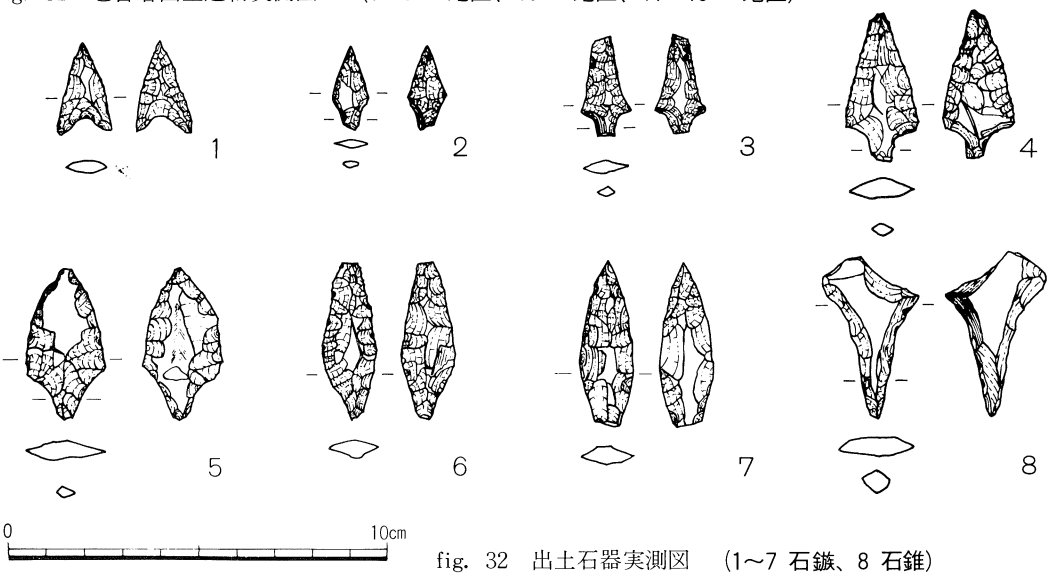


fig. 32　出土石器実測図　(1～7 石鏃、8 石錐)

西神第41地点遺跡

1．調査経過　昭和45年度に行われた分布調査により発見された古墳で、昭和55年度に発掘

第1次調査　調査を行い、埋葬施設1基と土壙3基、溝3条を検出した。この古墳は、外周道路予定地内に位置していたが、当時は路線が確定しておらず、保存される可能性もあり、調査を完了しなかった。

第2次調査　第1次調査後、路線が確定し、当古墳が工事範囲内に入ったため、本年度は主体部完掘及び墳丘規模確認の断ち割り調査、墳丘周辺未調査区域の全面調査を行った。

2．調査概要　掘形内の断ち割りを行ったところ、側面及び床面に灰色細砂が約5cmほど堆

主体部　積しており、南側壁面の灰色細砂を除去中に鉄鏃が3本出土した。これらは出土状況からみて、掘形肩部から落ちこんだのではなく、棺を埋める際に棺と掘形との間に置いたものであり、原位置を保っていると思われる。

なお、鉄鏃3本には矢柄を着装した痕跡が認められた。

墳丘断ち割り調査　墳丘を断ち割り、盛土の状態及び埋葬施設の関連を追求した。

この古墳は、まず地山を整形し、周濠を穿ち、墳頂部分で約 0.8mの盛土を行っている。この盛土と地山面との間に厚さ2～5cmの炭混りの灰層がほぼ全面に広がっている。これは、盛土を行う前に、旧地表面で火が焚かれたことを示している。

盛土作業の完了後に東西8.4m、南北2.9m、深さ1.4mの墓壙を掘削し、その内に東西5.7m、南北1.0m、深さ0.3mの棺を埋置し、その上に直径約5cm～10cmの礫を厚さ 0.2mに墓壙全面に敷きつめ、 さらにその上から土で覆っている。

fig. 33
西神第41地点、第42地点遺跡位置図

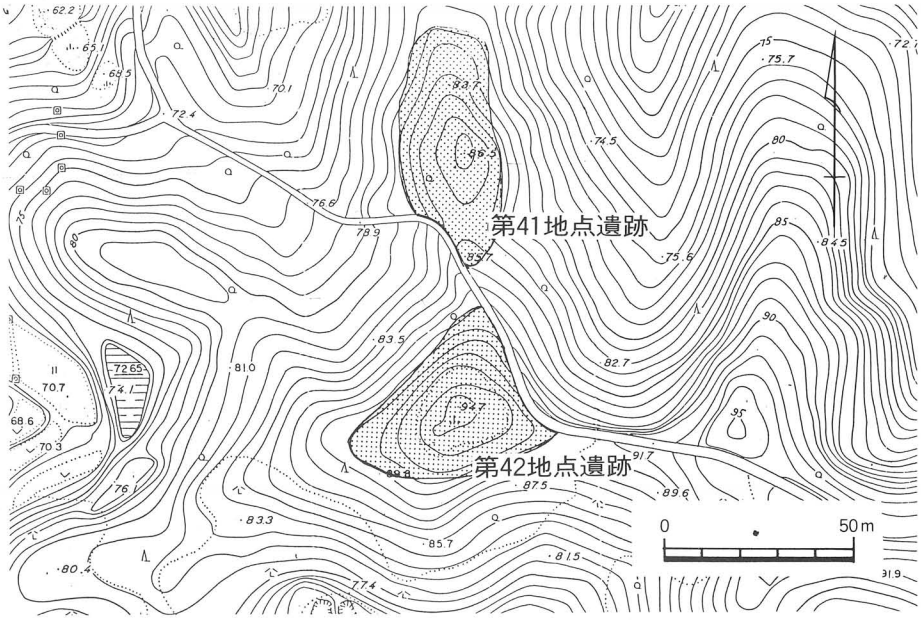
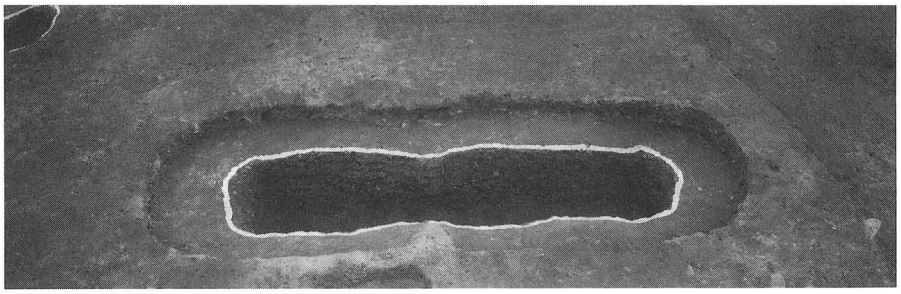


fig. 34
第41地点遠景
（南から）

fig. 35
埋葬施設



このような築造工程が明らかになったが、西神ニュータウン内の他の古墳と比べ特徴的な点として

1．棺上を礫で覆う。

2．墳頂から2.0mの深さに棺を埋置する。

などの点が挙げられる。

fig. 36　鉄鏃出土状況

墳丘周辺の調査　古墳北側の東向斜面の流土中から6世紀初頭の須恵器、土師器の破片に混じってU字形鋤先が出土した。これは刃部の長さ約16cm、幅約5cm、厚さ約0.5cmで着柄部が一部欠損している他は、ほぼ完形品である。また鉄刀の小破片が付近から出土している。

3．まとめ

今回の調査によって、棺を納めた掘形の上に礫を積み上げるというきわめて特異な築造方法が明らかとなったが、主体部内からは鉄鏃が3本しか出土しておらず、はっきりした年代は不明確であった。

また墳形は、前回の調査では、やや丸みを帯びた方墳と考えられているが、周溝の状況を見ると、L字状に画されておらず、方墳と断定するのは困難であろう。

さて、この古墳で注目されるべき遺物は、U字形鋤先である。これは、遺構からの出土品ではないが、6世紀初頭頃の土器と混じって発見されており、古墳時代後期のものである可能性が強い。

神戸市内では、東灘区の郡家遺跡出土例に次ぐもので貴重なものであろう。

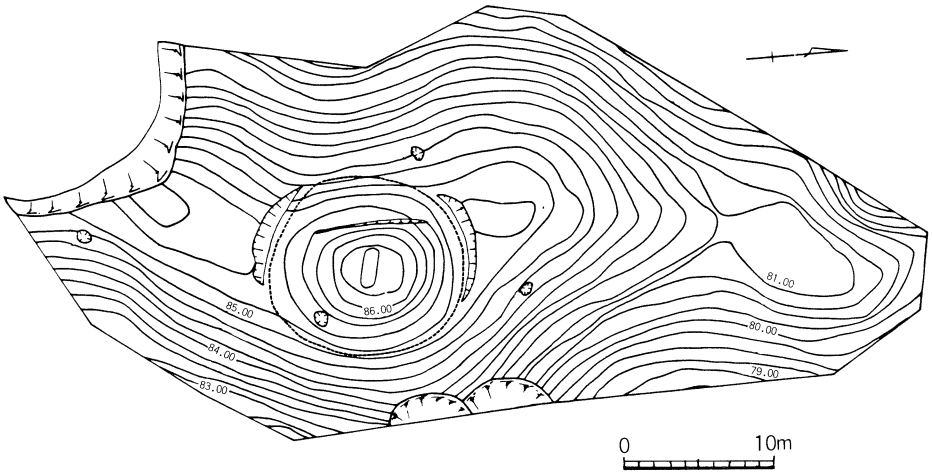


fig. 37　第41地点地形測量図

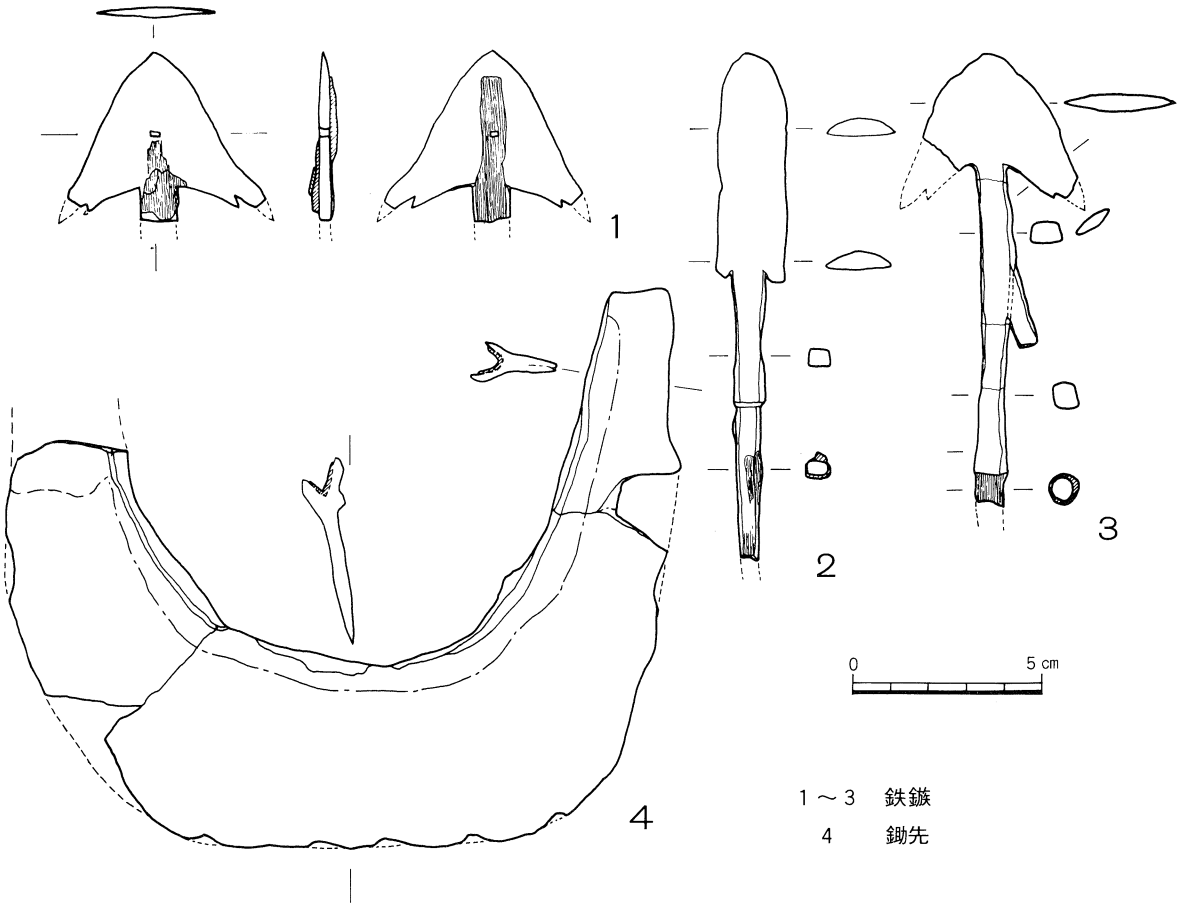


fig. 38　出土遺物実測図

西神第42地点遺跡

1．調査経過　西神第42地点遺跡は、繁田集落東側の東西にのびる尾根上の標高約94m付近に位置し、明石川中流域を一望できる見晴らしのよい地点にある。

第1次調査　昭和45年の分布調査によって発見され、昭和47、48年に確認調査が行われた。その結果、箱式木棺を主体部とし、周溝を巡らす5世紀末の古墳を確認した。さらに墳丘北東部の斜面で弥生時代中期後半の土器棺を検出した。

第2次調査　第1次調査では、墳形などに不明確な点があり、また、周辺に弥生時代の遺構が存在する可能性があるため、尾根平坦部の全面調査及び斜面のトレンチ調査を行った。

調査の結果、斜面では若干の土器が出土したのみで遺構は認められなかったが、尾根上の平坦面において弥生時代の木棺墓2基、土壙墓1基、古墳時代の土壙3基、須恵器の甕を埋納した土壙2基を検出した。また墳丘の盛土を除去した地山面で弥生時代の土器棺が出土した。

2．調査概要　2次にわたる調査によって判明したことは、以下のとおりである。

弥生時代の遺構、遺物　尾根頂部からやや下がった平坦面において、木棺墓2基、土壙墓1基を検出した。

ＳＴ04：掘形の長さ2.3m、幅1.4m、深さ0.3m
　　棺の長さ1.6m、幅0.5m

ＳＴ05：掘形の長さ1.9m、幅0.8m、深さ0.4m
　　棺の長さ1.6m、幅0.4m

ＳＴ06：掘形の長さ2.5m、幅1.0m、深さ0.4m

これらの埋葬施設のうち、ＳＴ06の埋土から弥生土器の小破片が1点出土した。

また1次調査で、墳丘北東部の地山斜面で弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式）の土器棺（ＳＴ02）を発見しているが、今回の調査でも古墳の盛土を除去した地山面で、さらに1基の土器棺（ＳＴ03）を検出した。

ＳＴ03は、尾根頂部から約1m下がった西側斜面に地山を切りこむ形で埋置されていた。棺には甕形土器を使用し、口縁部を南東にして倒れこむ形で検出された。この土器は、口縁部の大半が欠失しており、底部は焼成後に穿孔されている。蓋に使用されたと思われる高坏形土器の脚部が下方に転落していた。

時期は、弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式）に属する。また墳丘埋め戻し土から弥生時代のものと考えられる青色と淡緑色のガラス製小玉（直径約3.5mm）が各1個出土した。

さらに遺構に伴うものではないが、墳丘盛土の中から弥生時代前期の甕形土器片が出土した。これは、口縁端部に刻み目を施し、頸部直下にヘラ描沈線絞

fig. 39　第42地点地形測量図

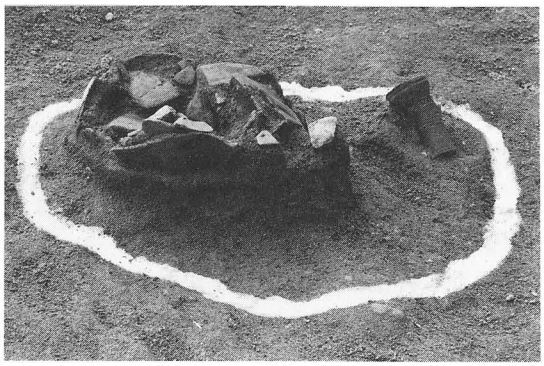


fig. 40　弥生時代土器棺（ＳＴ03）

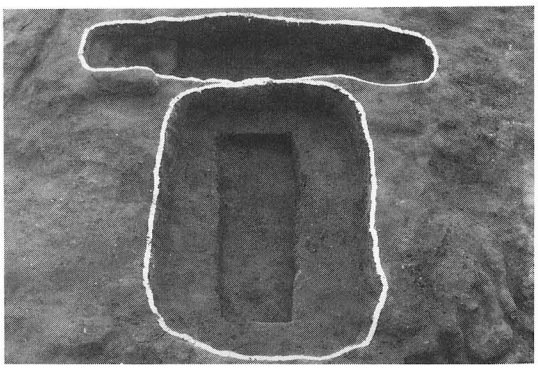


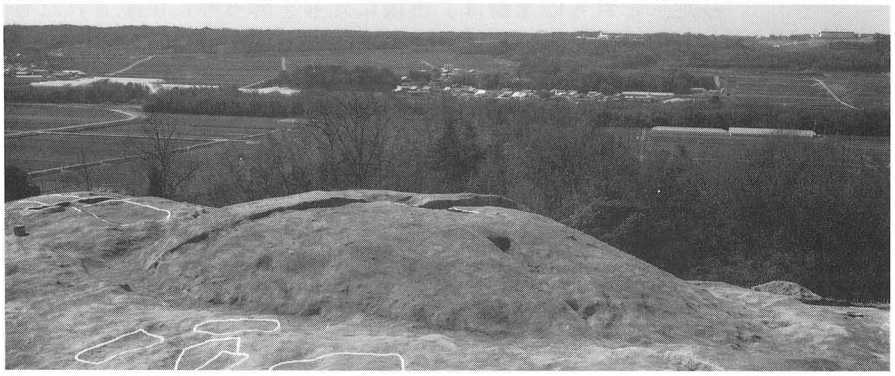
fig. 41　弥生時代木棺墓（ＳＴ04）

を三条施す。胎土には砂粒を多く含む。

明石川中流域の弥生時代前期の遺物は、平野町西戸田、常本で発見されているが、西神ニュータウン内遺跡では初例で、これまでに調査されてきた地点の遺物中で、最古の時期に属するものであり、注目される。

古墳時代の遺構、遺物　第１次調査では、周溝の状態から方墳の可能性があると報告したが、今回の調査では周溝がＬ字形に曲っているのは、南側１か所だけであり、他の個所では確認が不可能であった。特に東のコーナーの屈曲が明確でないことから方墳とする証拠に乏しい。また仮に方墳とすれば北側斜面の傾斜が急角度であり、その部分に盛土をして整形すると北側斜面のみ稜線の長い不自然な台形となる。

fig. 42
第42地点全景



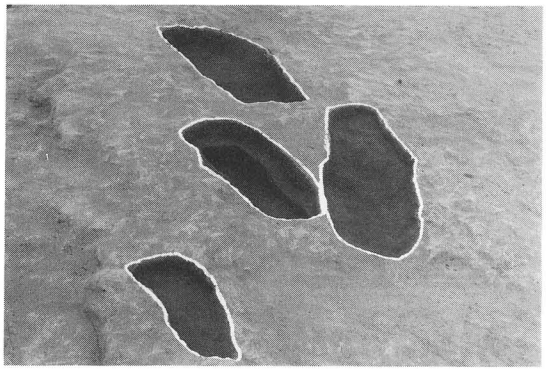


fig. 43　弥生時代木棺墓と古墳時代土壙

fig. 44　墳丘北側須恵器甕出土状況（ＳＫ04、05）

以上からこの古墳は、方墳ではなく直径８ｍの円墳の可能性が強い。

埋葬施設は、１次調査で確認されていたように１基のみであるが、盛土の流失が激しく、僅かに掘形の底部が残存するのみであった。棺の南東部分が攪乱を受けているため正確な長さは不明であるが残存長２ｍ、幅0.7ｍ、深さ約0.2ｍであった。なお掘形内からは遺物は発見できなかった。

ＳＫ01～05　周溝外側の平坦面において土壙３基（ＳＫ01～03)、須恵器甕を埋納する土壙２基（ＳＫ04、05）を検出した。

ＳＫ01：　弥生時代の木棺墓ＳＴ04を切って作られた南北に細長い土壙で、肩がほぼ垂直に落ちる。長さ2.6ｍ、幅0.7ｍ、深さ0.3ｍである。

ＳＫ02：　弥生時代の木棺墓ＳＴ05を切って作られた土壙で舟底状を呈する。長さ2.9ｍ、幅0.8ｍ、深さ0.3ｍである。

ＳＫ03：　不整楕円形の土壙で長さ1.4ｍ、幅0.6ｍ、深さ0.2ｍである。

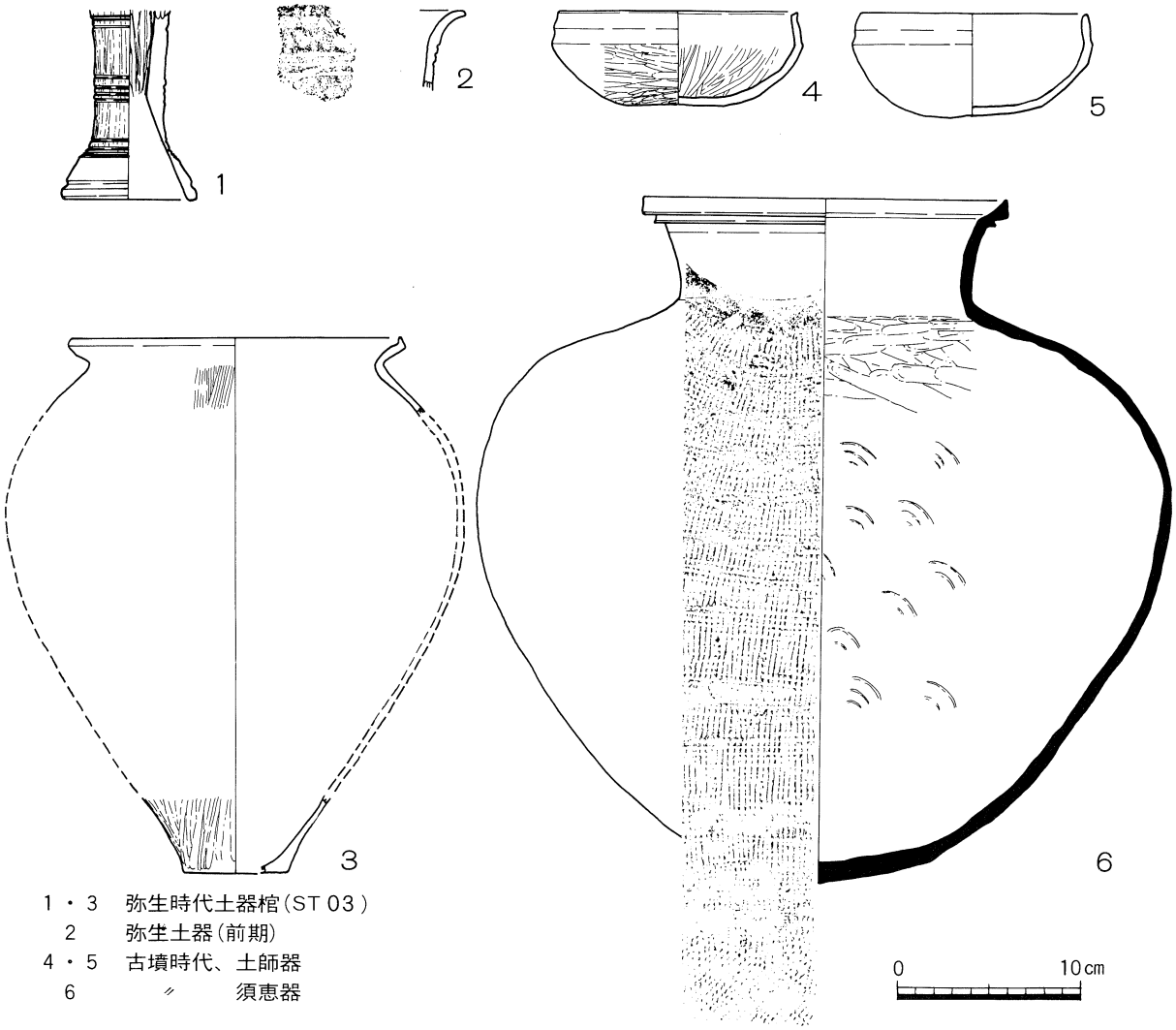
ＳＫ04：　墳丘北東部のテラス状になった平坦面に位置する。土壙内から完
05　形の須恵器の甕が２個体出土した。

甕は細かく割れ、内側に落ちこんだり周囲に散乱していたが、出土状況から見て、胴部の半ばまでを埋めこんで据えている様であ

った。これらの土器は、古墳に死者を葬る際に供献されたものであり、古代の葬送儀礼の一端を知ることができ、興味深い。

周溝内の遺物　1次調査において検出した周溝内から多数の須恵器（有蓋高坏、坏蓋、坏身、甕）、土師器（坏、高坏）が出土している。これらの周溝内の須恵器及びＳＫ04、05の甕の年代は5世紀末頃（ＴＫ23型式併行）のものである。

土師器の坏は須恵器の坏身を意識して製作したものであり、神戸市内では他に例を見ないものであり、注目される。



1・3　弥生時代土器棺（ST 03）
2　弥生土器（前期）
4・5　古墳時代、土師器
6　〃　須恵器

fig. 45　出土遺物実測図

2．新方遺跡（東方地点）—第1次調査—

1．はじめに　新方遺跡は、神戸市西区玉津町新方、西河原、高津橋から同伊川谷町潤和にかけての東西1.5km、南北1kmの範囲に存在する弥生時代から鎌倉時代に至る複合遺跡である。

新方遺跡は、昭和45年に発見され、その後、丁の坪地点（昭和55年、57年）、大日地点（昭和57年）の調査が実施され、弥生時代の円形周溝墓や木棺墓、竪穴式住居址、古墳時代の玉造工房址や鎌倉時代の掘立柱建物などが発見されている。今回調査を実施した東方地点は、大日地点の南約500mに位置する。

2．調査経過　新方遺跡東方地点は、神戸市西区玉津町新方に所在する。神戸市下水道局の玉津11号、上池6号雨水幹線築造事業に先立ち、昭和59年7月に試掘調査を実施したところ、地表下 1.5mの黒色粘土層から弥生土器が出土した。そのため雨水幹線工事区域内の240㎡（幅3m×長さ80m）について遺構の有無や遺跡の種類を明らかにするため、発掘調査を実施した。

3．調査概要

基本層序　調査地周辺は、沖積地であるが、かなり広範囲に粘土層が堆積するところから推測すれば、遺跡地は伊川の後背湿地であったと思われる。

基本層序は、地表から1 耕作土　2 床土　3 酸化した灰色粘質土　4 青灰色粘質土　5 黒色粘質土　6 青緑色粘質土　7 淡黒色粘質土の順で地表下から3m下まで掘り下げた。

弥生時代の遺物は、4、5 層から出土し、遺構は、6 層を抉るようにして形成されている。7 層は後背湿地によくみられる泥炭層に近似する層である。

検出遺構　今回の調査で検出された遺構は、弥生時代中期の河道である（検出長は3m）。中期初頭（Ⅱ様式）の時期には河幅はトレンチ北側で15m、南側で18m、深さ1.4mあり、中期中葉（Ⅲ様式）の時期には、河道は西へ流路を移動し、河幅は10m、深さ0.5mとやや幅を狭めている。河道は北から南へ蛇行して流れていたと思われ、今回の調査では、その蛇行部が検出された。

河道は、その初期（弥生時代前期新段階）には、13mの河幅（底部幅）を有したが、その後、東から次第に埋まり、中期初頭の時期には、2筋の流路をもつ河道に変わっている。各流路の幅は、6～8m、深さ0.8m～1.0mである。

4．出土遺物　今回の調査では、河道内から弥生土器、石器、木器、自然遺物など、多種類の遺物が出土している。

弥生土器　前期新段階（Ⅰ様式）、中期初頭（Ⅱ様式）と中期中葉（Ⅲ様式古段階）の土器が出土しているが、Ⅱ様式の土器が圧倒的に多い。

fig. 46　新方遺跡調査地点位置図　(1. 東方地点　2. 高ナギ地点　3. 村中地点　4. 丁の坪地点　5. 大日地点)

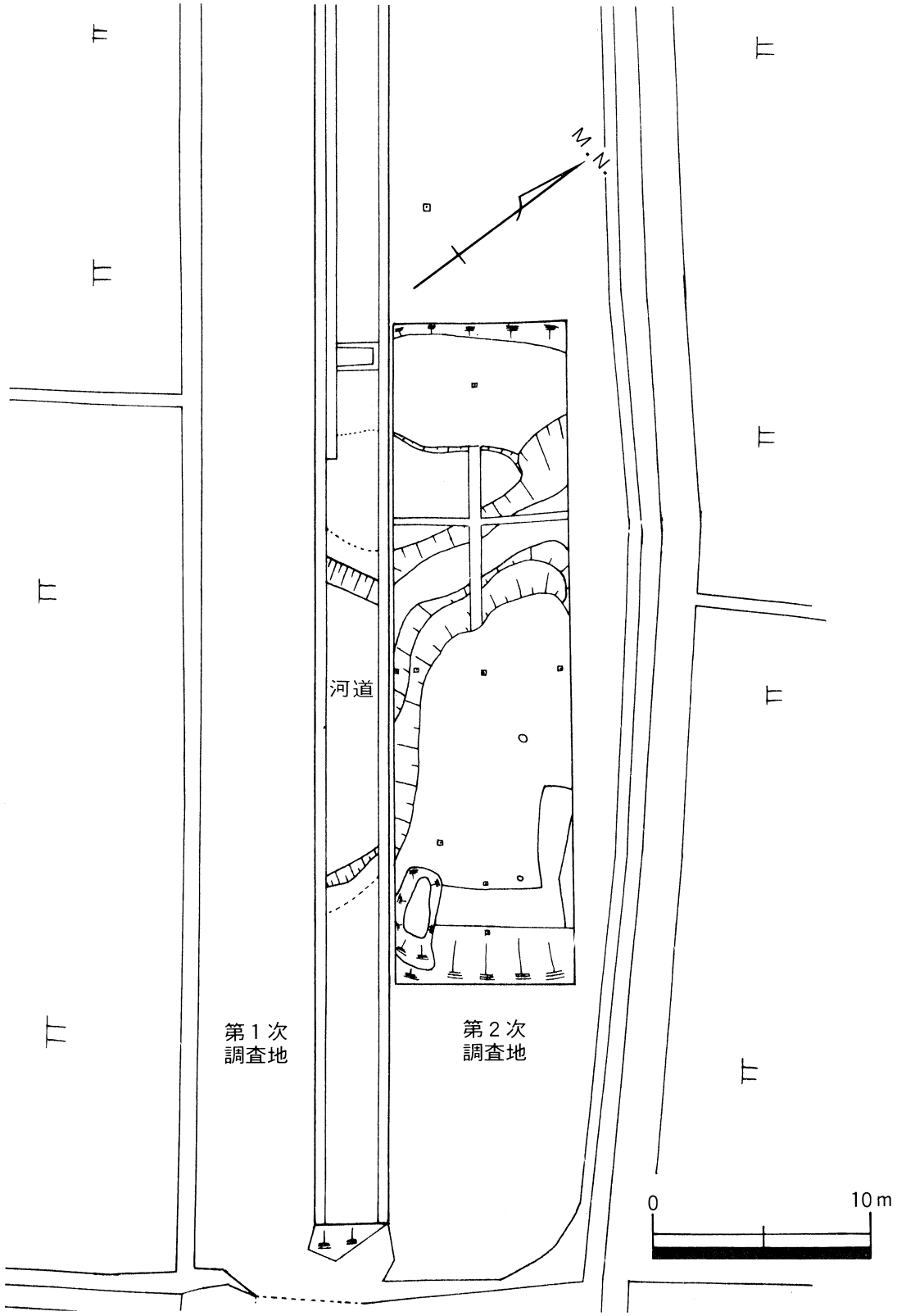


fig. 47　１次調査、２次調査遺構平面図

fig. 48　河道
（東から）

fig. 49
河道内遺物出土状況

fig. 50
河道内甕（左）
と糸巻状木製品（右）

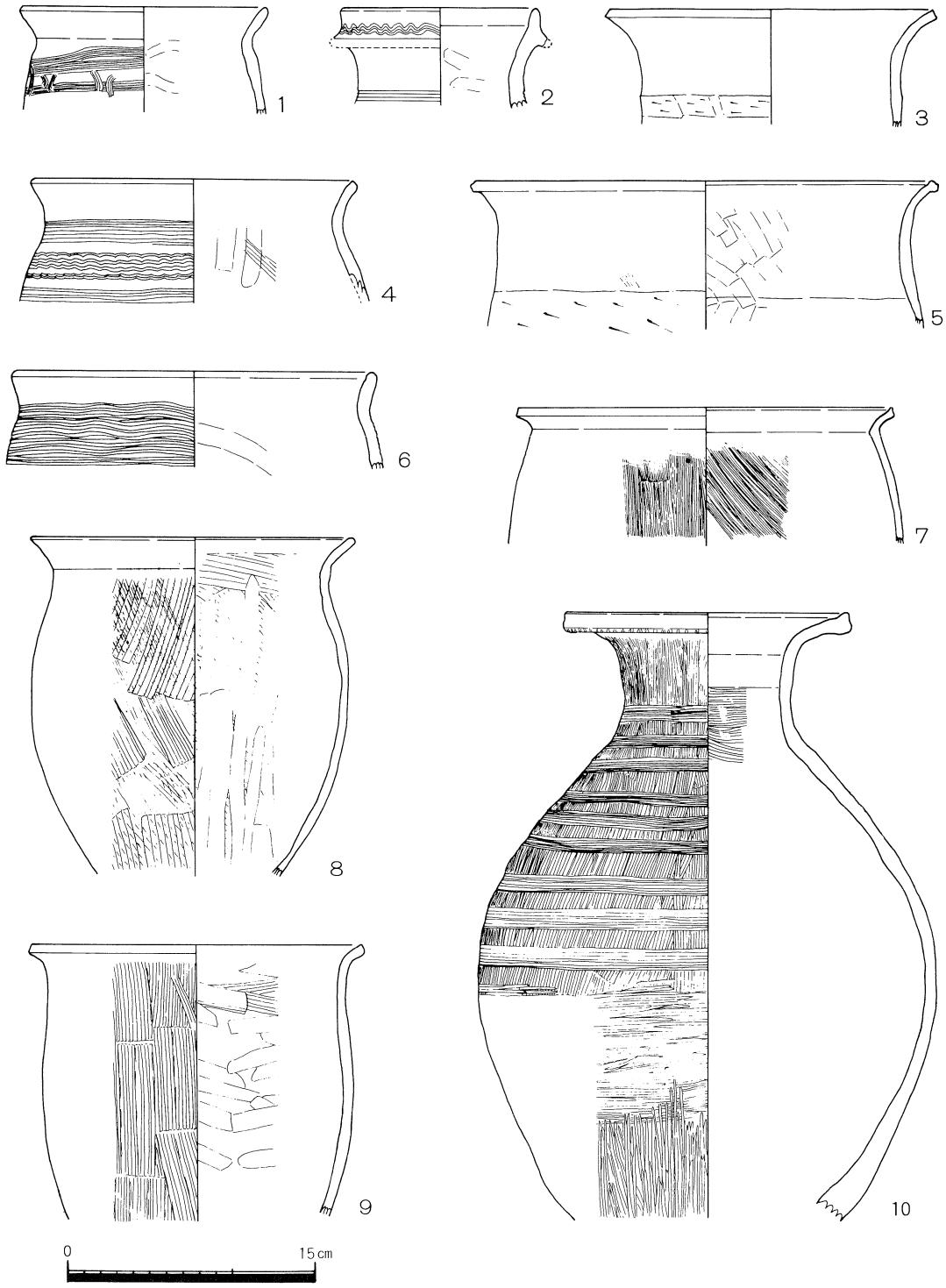


fig. 51　河道内出土弥生土器実測図

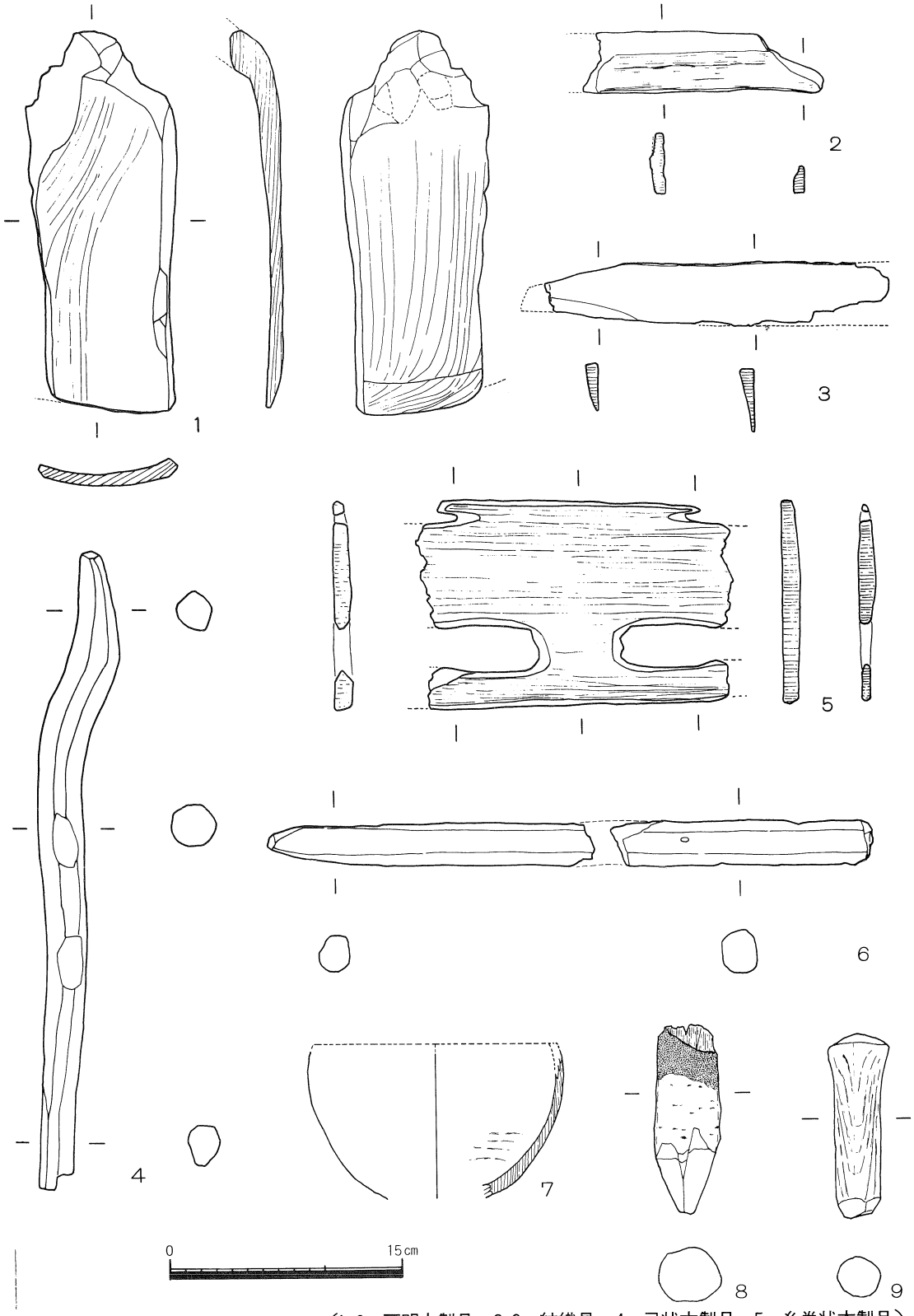


fig. 52　河道内出土木製品実測図　(1.6. 不明木製品、2.3. 紡織具、4. 弓状木製品、5. 糸巻状木製品 7. 椀、8. 杭、9. 柄)

器種別にみるとⅠ様式の土器としては壺、Ⅱ様式の土器には甕、壺、鉢、甑があり、Ⅲ様式の土器には甕、壺、器台がみられる。Ⅱ様式の壺には広口壺、無頸壺がある。

広口壺は外面ハケ調整後、頸部から体部上半にかけて櫛描直線文、波状文を施している。底部にモミ痕が存在する土器が1点出土している。Ⅱ様式の甕には、胎土に結晶片岩を含むため、和歌山県地方で製作されたと考えられる紀伊型甕や頸部から体部上半にかけて櫛描直線文、波状文を施す播磨型甕、内面のハケ目をなで消す摂津型甕、内外面に粗いハケ目を施す大和型甕がみられる。口縁の破片から個体数を比較すると摂津型32点、播磨型7点、紀伊型5点、大和型1点となり、摂津地方の影響が強い。Ⅱ様式の壺と甕の比率は、1：5である。

石　器　磨製石斧、叩き石、擦石、砥石、水晶、碧玉の石核、軽石、サヌカイト、結晶片岩の破片などがみられる。磨製石斧は残存長6.5cm、径4.8cmで中程から折損している。先端には敲打痕がある。石材は斑れい岩である。叩き石は2点出土している。1点は、径14cmで一方の側縁と上面に敲打痕がみられる。石材は閃緑岩である。

擦石は長さ13cm、厚さ7cmの断面三角形状を呈し、刃部と考えられる側縁に使用痕がみられる。石材は安山岩である。砥石は3点出土している。いずれも折損品である。石材は凝灰質砂岩、花崗質砂岩、和泉砂岩である。水晶の石核1点、碧玉の石核3点が出土している。いずれも玉の原材で大きさは4～5cmある。玉の製品、未製品は新方遺跡丁の坪地点の弥生時代竪穴住居址内からも出土しているが、今回の河道内出土資料から中期初頭に新方遺跡で玉造生産が行われていたことが明確になった。

木　器　河道内からは多数の木製品、流木が出土した。いずれも中期初頭（Ⅱ様式）に属する。容器には椀があり、武器と考えられるものに弓、剣形木製品がある。また農具には鋤、紡織具には糸巻状木製品、経糸巻具があり、その他、杭、柄などもみられる。これらの木製品や流木は目下整理中であり、材質の鑑定を受けていないので、樹種などは不明である。

自然遺物　河道内の黒色粘土層からは、木製品にまじって自然遺物が出土した。種類の判明した植物遺体には、サクラ、カシ、モモ、バラ、ウリ、ムクロジ、オナモミ、ヒョウタンなどがある。また、コガネムシ若しくは、ハムシと思われる昆虫の羽根が出土しており、これらの自然遺物が河道内に堆積した季節は、夏から秋にかけてのことと推考される。この他、種類不明の種子や植物の葉などがあり、今後、鑑定を受ける予定である。

5．まとめ

今回の調査では、弥生時代中期初頭の河道が発見された。河道は、中期初頭

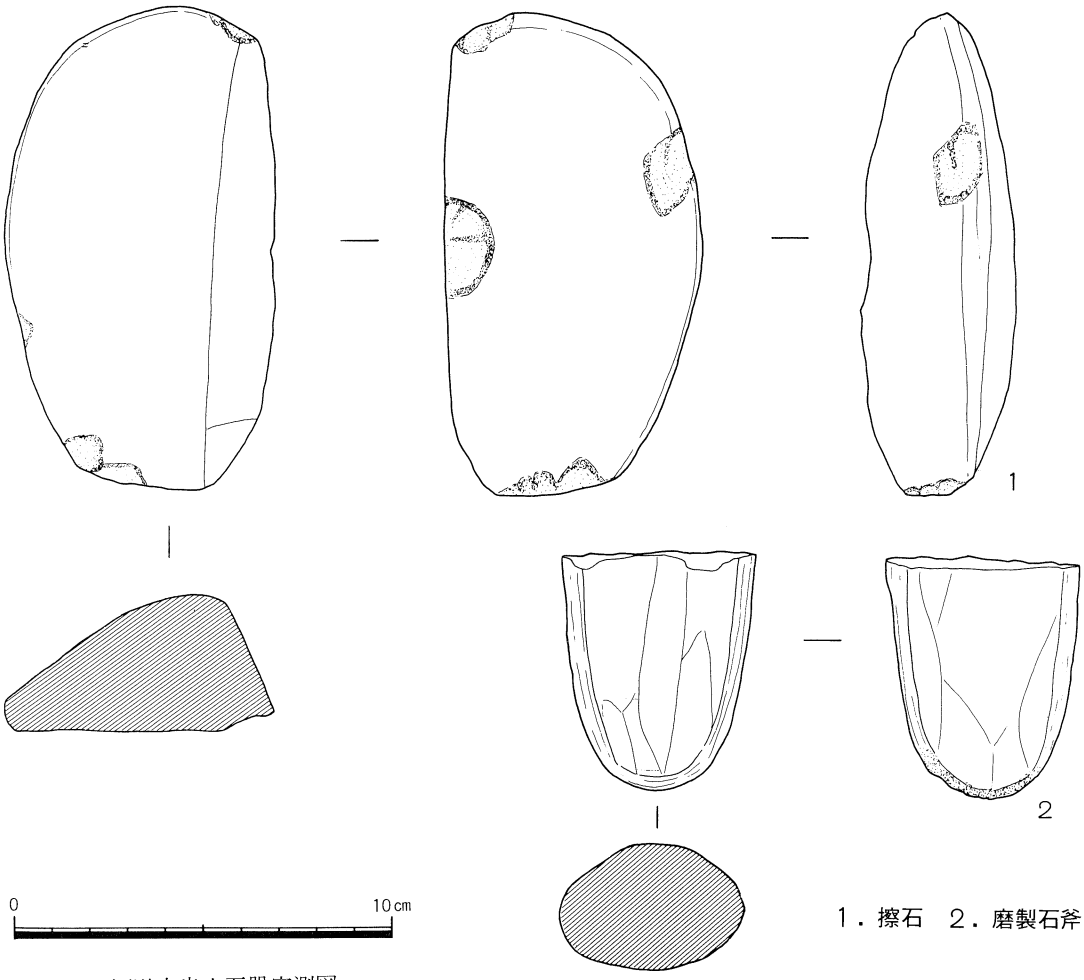


fig. 53　河道内出土石器実測図

（Ⅱ様式）から中期中葉（Ⅲ様式）にかけて存在し、中期後葉には、河道は他に流路を変えている。河道内からは、多数の遺物が出土した。特にⅡ様式の遺物は磨耗、損傷を余り受けておらず河道に近接して集落が存在したことを物語っている。一方、Ⅲ様式の遺物は、かなり磨耗しており、遠くから流されてきたことを示している。今回の調査地内からは、住居址は検出されなかったが、付近に中期初頭の時期の集落の存在が予想される。

特に碧玉、水晶など、玉の原料の出土は、すでに中期初頭の段階で玉造りが行われていたことを物語っており、本遺跡を特徴づけている。時期的にみても近畿地方の弥生時代玉造遺跡の中では、滋賀県の烏丸崎遺跡（弥生前期）の次に位置づけられる。

河道内から出土した遺物から推測される新方遺跡は、稲作のほか、ウリ、ヒョウタン、モモなどを栽培し、集落内で木器製作、石器製作を行うほか、玉造りまで行っており、安定した農耕集落としての姿を示している。

3．新方遺跡（東方地点）－第２次調査－

1．調査経過　新方遺跡東方地点は、大日地点の南 500m、神戸市西区玉津町新方に所在する。神戸市下水道局の玉津１号、上池６号雨水幹線築造事業に伴い、今年度８月末～９月に実施した第１次調査では、幅18mの弥生時代の河道が発見されており、神戸市都市計画局が実施する都市計画道路玉津鳥羽線街路築造事業地内にも第１次調査で発見された河道の存在が予想されたため、８×30mのトレンチを設定して調査した。

2．調査概要　層序は、地表から１耕作土 ２床土 ３灰褐色粘質土 ４青緑色粘質土で、５青緑色粘質土上面でトレンチ内を斜めに横断する河道が検出された。河道上面の標高は7.5mで、地表からの深さは1.2mである。

河道は、第1次調査同様、弥生時代中期初頭（Ⅱ様式）から、中期中葉（Ⅲ様式）にかけて存在し、中期初頭には、河幅は5m、深さ1.2m、中期中葉には、河幅は８m、深さ0.5mとなる。中期初頭の河道は、北から南への一定の河幅（５m）で流れているのに対し、中期中葉の河道は、中期初頭の河道と一部重なりながら河幅を拡げ、その上層を北東から南西へ流れている。中期中葉の河道内堆積土は、暗灰褐色粘質土及び暗灰褐色砂質土であるが、中期初頭のそれは黒色粘質土及び黒色細砂質土であり、相違がみられる。

3．出土遺物　今回の調査では、中期初頭の河道内から弥生土器、石器、木器、自然遺物が出土し、中期中葉の河道内からは、弥生土器が出土している。

(1)　中期初頭（Ⅱ様式）

弥生土器　広口壺、長頸壺、高坏、甕などの器種がみられる。第１次調査同様、壺に比べ甕の量が多い。

広口壺は、口縁端部に刻みを入れ、体部は、櫛描直線文、波状文で飾る。

長頸壺は、体部に８帯の櫛描直線文を施し、口縁部を抉り取っている。

甕には、紀伊型の甕、播磨型の甕、摂津型の甕が存在するが、摂津型の甕が圧倒的に多い。

石　器　打製石槍、擦石、叩き石、結晶片岩、粘板岩、サヌカイトの剝片、並びに旧石器が出土している。

打製石槍は、残存長5cm、幅2.5cmで基部に桜の皮を巻いている。復元長は推定で15cm、石材はサヌカイトである。基部に皮を巻いた類例は、河内平野ではしばしば見られるが、神戸市内では初めての発見である。

擦石は、径10～11cm、厚さ８cmで、中程から折損している。一方の平坦面には擦痕がみられる。石材は、閃緑岩である。叩き石は、径５cmの円礫でかな

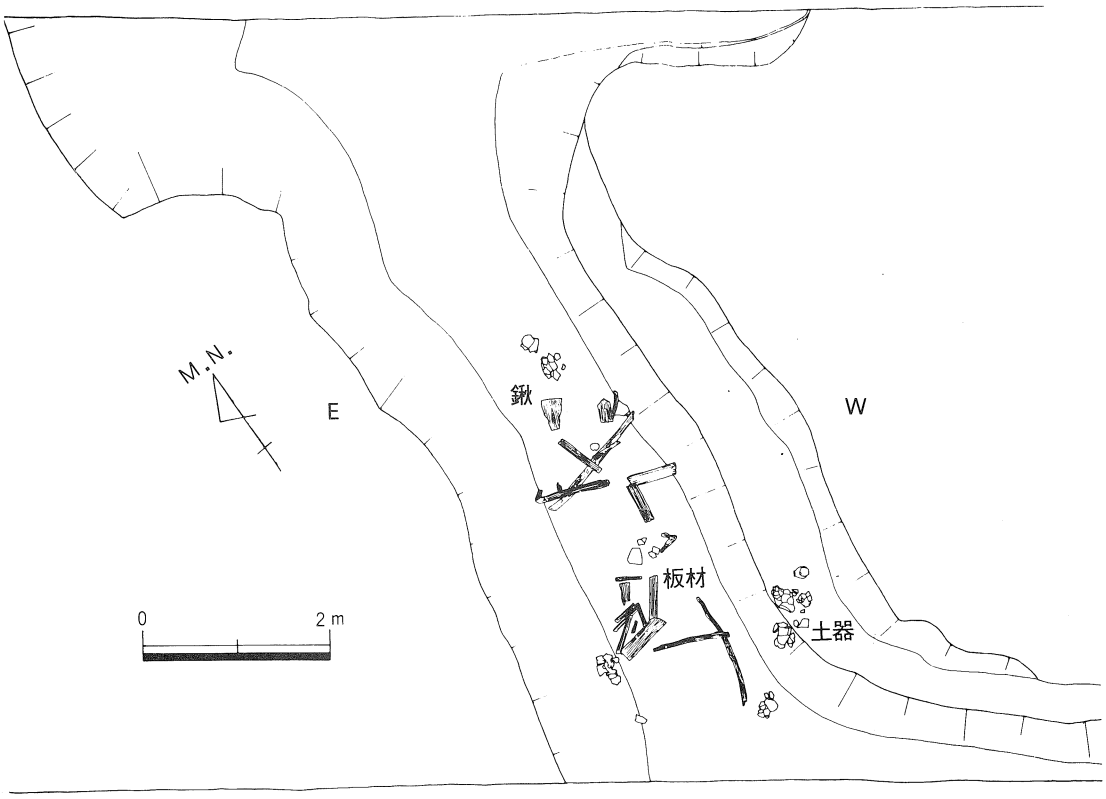
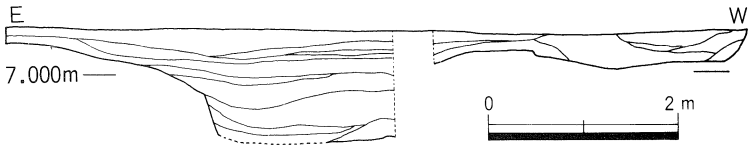


fig. 54　河道内遺物出土状況実測図

fig. 55　河道内ＥＷ
土層堆積状況実測図



り風化が進んでいる。石材は花崗岩である。

旧石器は、翼状剝片の石核で、打面縁調整を施している。長さは 7.5cm、石材はサヌカイトである。河道内の黒色粘質土から出土している。

木　器　第１次調査同様、河道内から多数の木製品や流木が出土した。農具は完形の広鍬が出土している。全長35.8cm、頭部幅13.5cm、刃縁幅22cm、着柄角度は70度である。頭部の下に抉りが入り、刃部は撥形に広がりながら、中程で屈折して、刃縁部に至る。大阪府池上遺跡出土品の分類による、広鍬のⅢ型式、Ⅳ型式両方の要素を備えもつタイプの広鍬である。[註)]

容器には杓子と高台付鉢がある。杓子は柄の部分が欠損している。また、紡織具には、経糸巻具と考えられる木製品が出土している。残存長15cm、幅4cm、断面は三角形を呈し、その両面に太さ 0.5mmの糸の圧痕が観察できる。建築部

fig. 56　河道全景
（西から）

fig. 57　河道内柱、
板材出土状況
（南から）

fig. 58　河道内
弥生土器出土状況

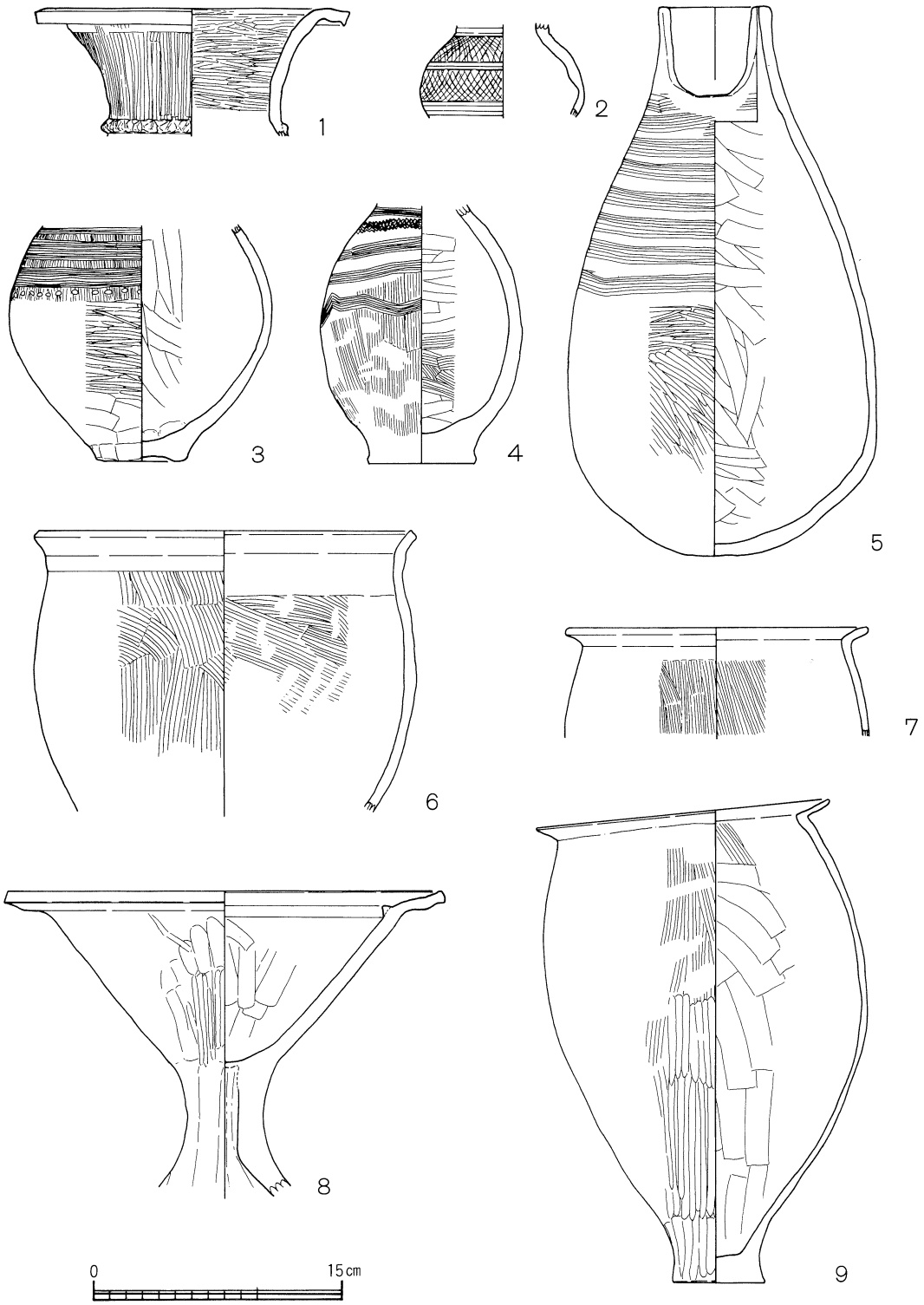


fig. 59　弥生土器実測図

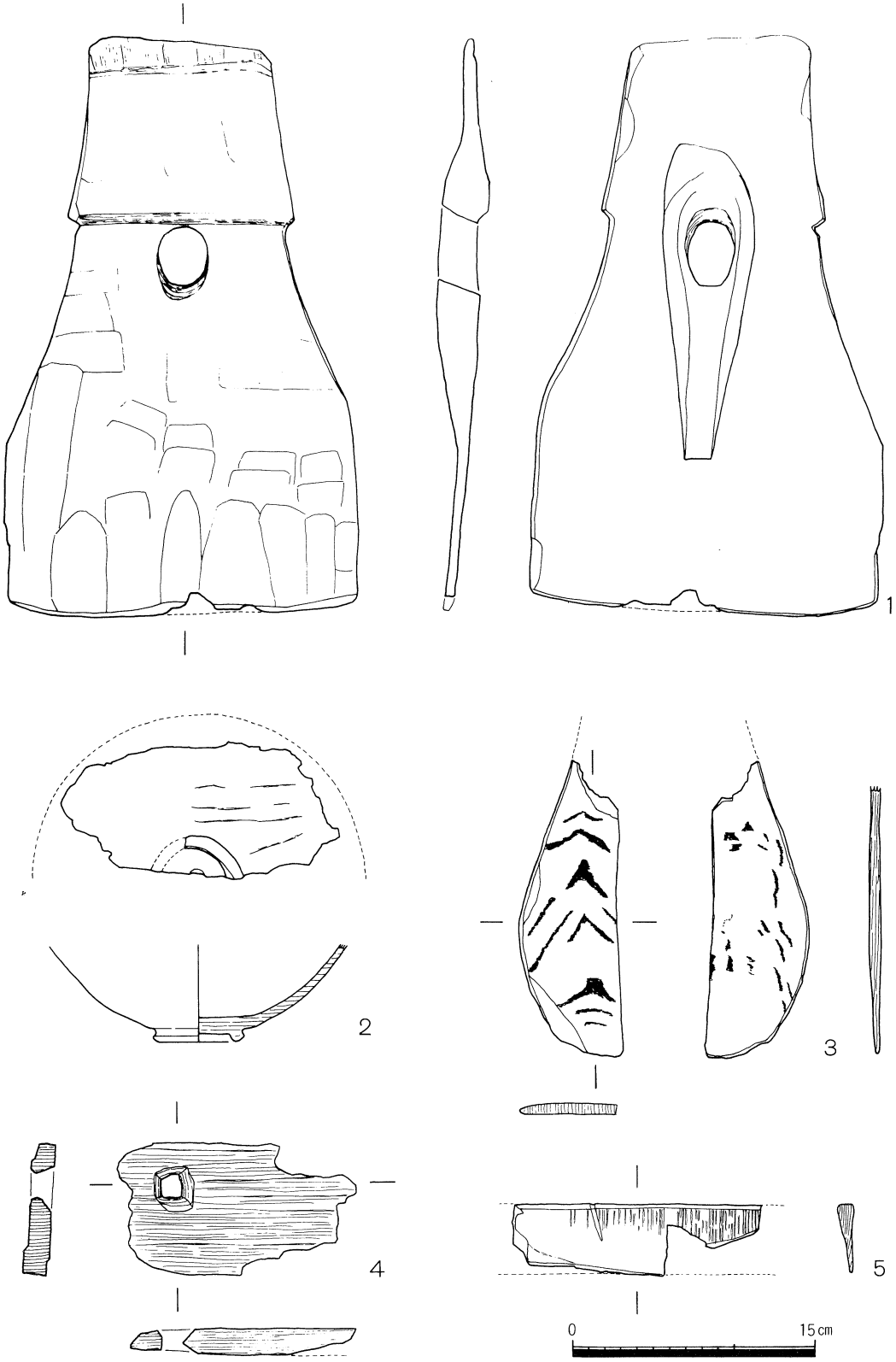


fig. 60　木製品実測図　（1．広鍬、2．椀、3.4．不明木製品、5．紡織具〈？〉）

材には、柱や板材が出土している。焼けて炭化したものが見受けられる。

この他、用途不明の木製品が2点出土している。1点は圏線で画された中に2帯の鋸歯文を施す円形の木製品で、残存長3㎝である。円形の環体の内側に仏具の法輪のような突起を有するもので、突起にもそれぞれ鋸歯文が彫られている。円形とすれば復原径12㎝で、突起の数は16個である。片側の面が炭化している。他の1点は、なすび形をした残存長18.5㎝、厚さ0.7㎝の板材である。

fig. 61
広鍬出土状況

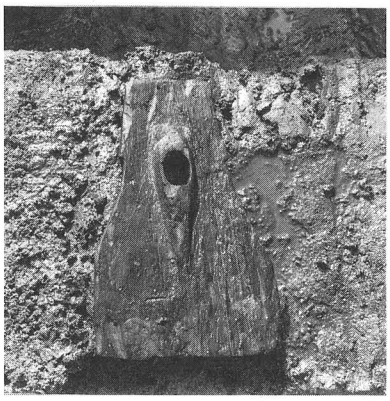
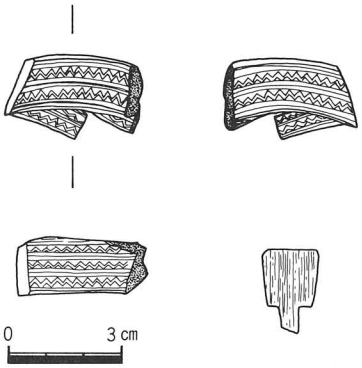


fig. 62
鋸歯文帯
環状木製品



自然遺物　第1次調査同様、河道内の黒色粘質土内から自然遺物が出土しているが、量は少ない。種類が判明したものには、モモ、オオモミ、イチョウ、シイの葉、コガネムシもしくはハムシと考えられる昆虫の羽根がある。

(2)　中期中葉（Ⅲ様式）

弥生土器　広口壺、長頸壺、高坏、ミニチュア鉢、甕、甑、製塩土器などが出土している。磨耗しているものが多い。

広口壺は、口縁内面から端部が水平に開くものと、端部が上、下に拡張し、円形浮文や刻み目を施すもの、さらに口縁を下方に垂下させ、そこに棒状浮文、円形浮文を施すものがみられる。

口縁を垂下させるタイプは、口縁内面に突帯を施している。広口壺の頸部は指頭圧痕文突帯、断面三角形の突帯を施し、頸部から体部は櫛描直線文、波状文、扇形文、列点文で飾る。1点簾状文がみられるが、胎土からみて在地の土器と考えられる。

高坏は内面に断面三角形の突帯をもち、口縁が水平に張りだす。脚部は中空で坏部と脚部の接合は円盤充塡法による。

ミニチュア鉢は径4㎝、高さ7㎝の小形の鉢である。甕は口縁端部が「く」の字に折れ曲がるものと端部を下方に拡張するものとがみられる。

製塩土器は脚台部が出土している。外面は火熱を受けて赤変し、ススが付着している。

註）『池上遺跡、木器編』・財団法人大阪文化財センター　1978。

5．まとめ　今回の第２次調査においても、河道内から豊富な遺物が出土した。完形の広鍬をはじめ、祭祀具と考えられる円形の木製品のほか、皮巻の石槍、イチョウの葉、製塩土器等、枚挙にいとまがない。これらの遺物は生活の場としての川に流されたり、捨てられたりしたものである。恐らく時間とともに流れを変えた川の湿地に次々と捨てられていったと推測される。特にⅡ様式の遺物はあまり磨耗、損傷しておらず、川の近傍に集落のあった可能性が高い。河道内には川と人間とのつながりを示す貴重な資料がまだまだ埋もれていると思われる。川を通して弥生時代中期に新方遺跡を残した人々の生活を明らかにしていきたいと考える。

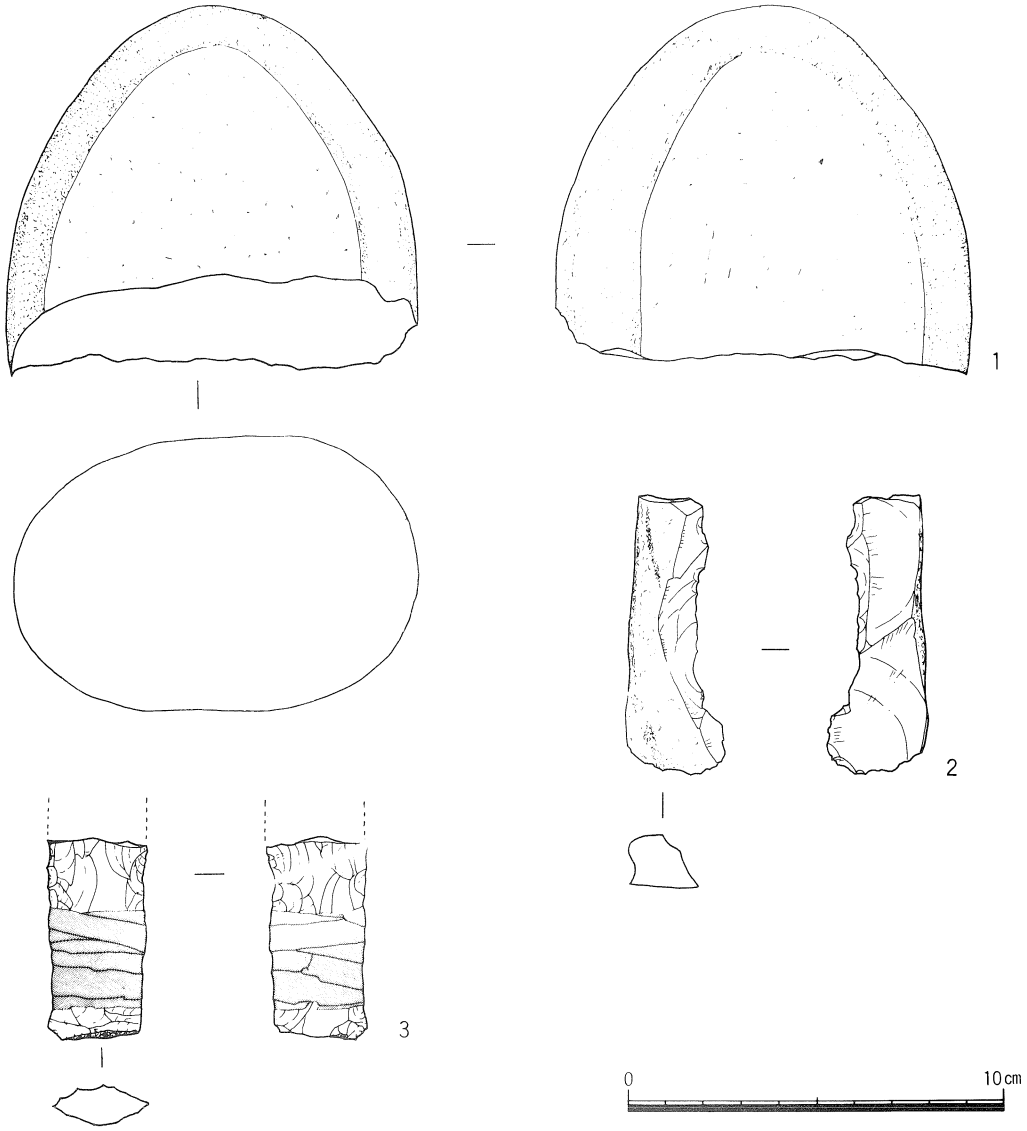


fig. 63　石器実測図

1．叩き石　2．旧石器　3．打製石槍

4．新方遺跡（高ナギ地点）

1．はじめに　新方遺跡は、山陽新幹線敷設に伴う分布調査によって、その存在が確認された遺跡である。昭和45年度、工事に先立ち実施された発掘調査では、弥生時代中期初頭から鎌倉時代の遺物が多量に出土し、注目された。

その後、国庫補助金を得ての範囲確認調査や民間企業の小規模開発に伴う発掘調査が実施されてきた。

これらの調査を通じて当遺跡からは、弥生時代中期～鎌倉時代に至る各種の遺構・遺物が複数の層位に分かれ、多数出土している。

また、遺構・遺物の分布範囲も東西２㎞、南北1.5㎞の極めて広い範囲において検出されており、当遺跡が明石川流域において最も大きくかつ重要な遺跡であることが判明している。

2．調査経過　今回の調査は、当該地において宅地工事が計画されたため、試掘調査を実施したところ、地表下、約1.2m付近において弥生時代中期の遺物包含層が発見された。この成果をもとに包含層が広がる工事予定地内の西半部（東西約32m、南北約42m)、面積約1,400㎡の範囲の調査を実施することとした。

調査は、遺物包含層までの盛土・堆積土（地表下約1.2m）を重機により排除したのち、遺物包含層の精査・遺構検出作業等を人力により行うこととしたが、重機掘削中、地表下約0.6m付近に鎌倉時代の遺物包含層を検出したため、掘削は約0.5m付近までにとどめ、同時代の遺構検出作業を実施した。調査が進むにつれて、同時期の遺構面は、調査地の東方部にもさらに広がっていることが判明し、これ以下にも古墳時代・弥生時代各１枚の遺構面があり、一部でその深さが地表下２ｍを超えることも確認した。

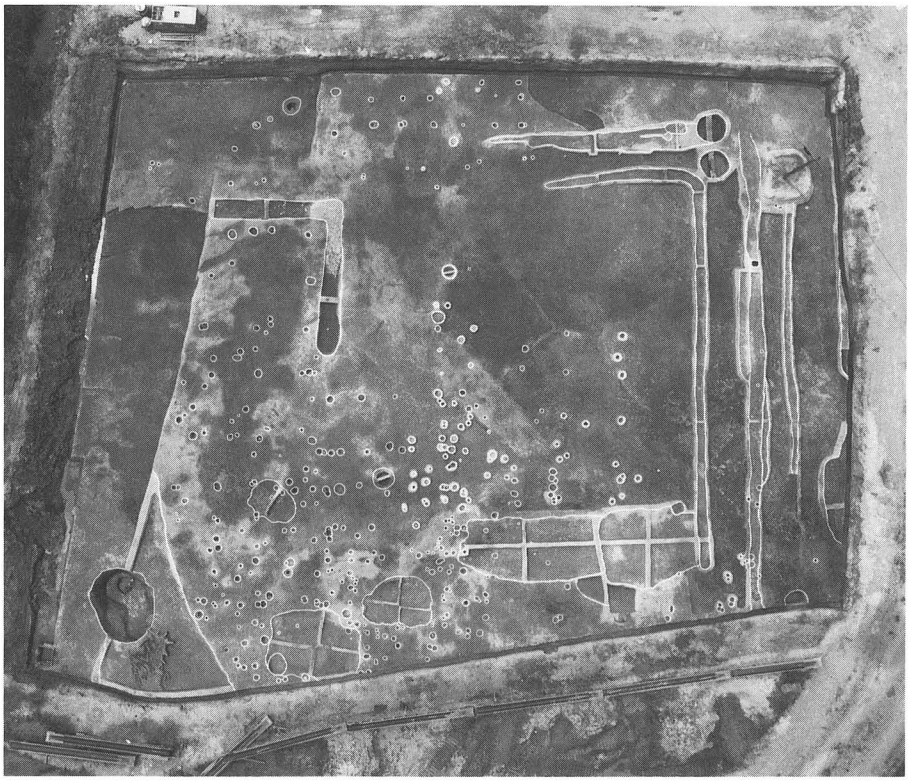
このような状況から、関係機関との協議の結果、発掘調査は遺跡の破損が今後、予想される道路部分（約700㎡）での最小限にとどめ、遺跡の保存を計ることとした。

3．調査概要

第Ⅰ遺構面　平安時代末から鎌倉時代の遺構を検出した遺構面である。遺構は標高9.10m内外に水平に堆積した灰色細砂を穿って造られている。遺構面直上には灰色粘土質細砂層が0.1～0.2mの厚さで堆積しており、須恵器・土師器などが少量検出された。

遺構の分布は調査区の南東部を中心として、東方あるいは北方へ向かって減少する傾向が認められた。当遺構面においては、井戸３基・溝４条・掘立柱建物３棟のほか多数の土壙・柱穴を検出した。

fig. 64
第Ⅰ遺構面全景



ＳＢ01　調査区の中央付近で検出した東西４間（9.3m）×南北３間（8.4m）の掘立柱建物である。柱穴掘形は直径0.25m、深さ0.3m程度の平面円形プランのもので、掘形中央付近には直径0.15m程の柱痕跡が検出された。

ＳＢ02　Ｌ字形に屈曲する溝（ＳＤ01）に囲まれた掘立柱建物で、南半部が攪乱を受けているため全形は知ることはできないが、東西３間（7.9m）×南北２間（5.6m）以上の建物である。円形あるいは楕円形のプランからなる径0.3m、深さ0.4m内外の掘形を持つもので、柱穴の一つからは漆器椀が出土した。

ＳＢ03　調査区の西端にあり、調査区外へ延びているため全形は不明であるが、南北５間（8.6m）の建物である。掘形は全て円形で径0.25m、深さ0.3m内外のものである。

ＳＤ01　ＳＢ02を囲むＬ字形の溝で幅1.2m、深さ約0.6mを測る。屈曲部付近（４m内外）には径0.1m内外の河原石が埋設されていた。遺物は溝底に接して土師器、須恵器鉢、曲物、漆器椀等の破片や木片などを検出した。

ＳＤ02、03、04　調査区の北端部を東西に平行して検出された溝で、ＳＤ03、ＳＤ04は西端付近でＬ字形に屈曲する。上部は削平されており、深さはどれも 0.1m程度と残存状況は悪い。幅も約 0.5m内外のもので、溝の側縁には径５cm内外の杭・杭痕を数多く検出した。

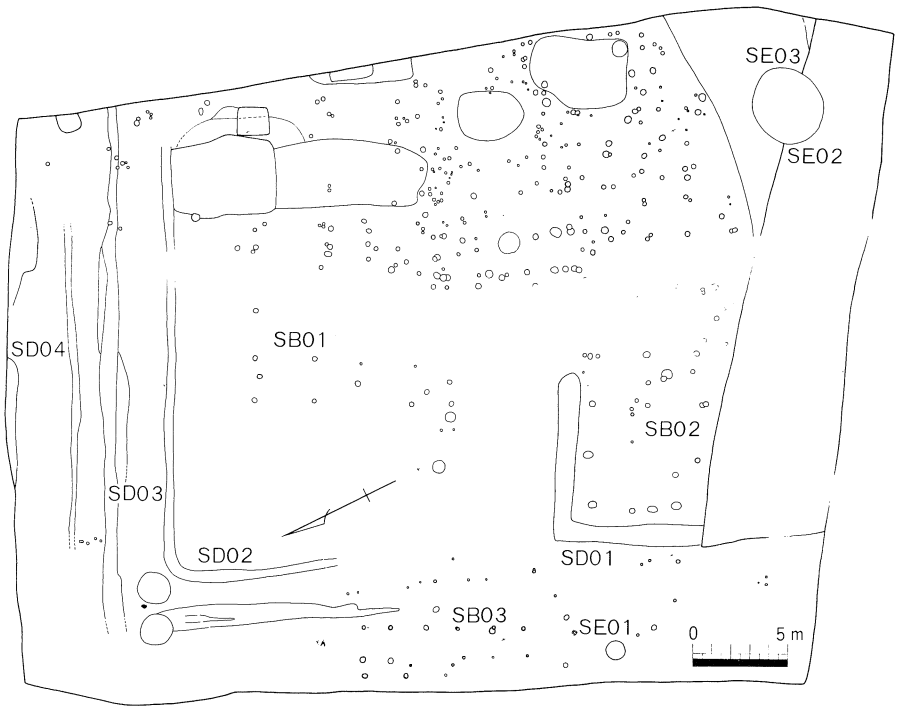


fig. 65　第Ⅰ遺構面平面図

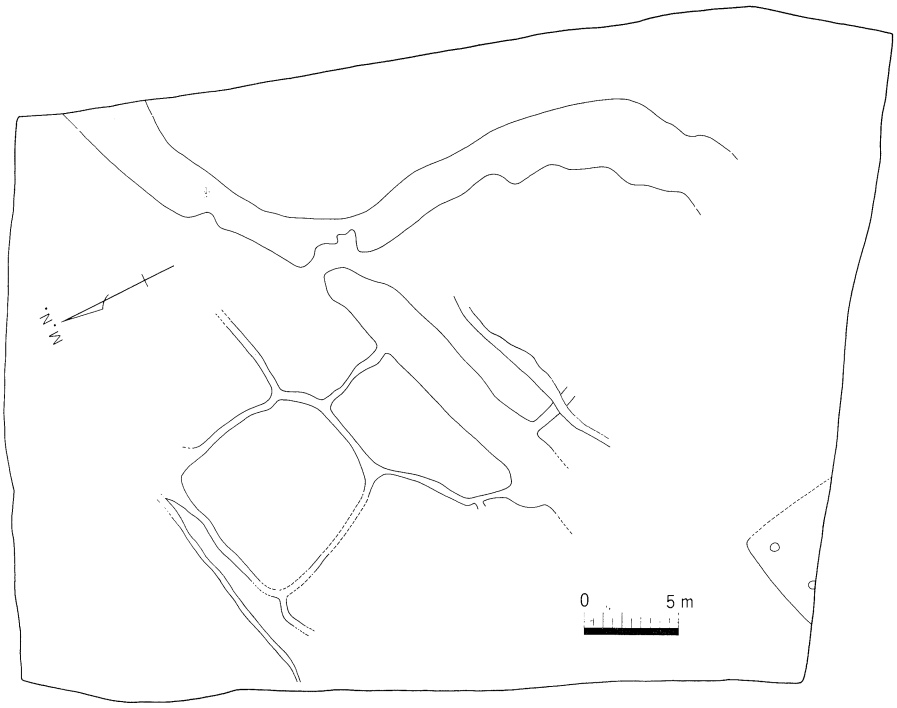


fig. 66　第Ⅱ遺構面平面図

ＳＥ01　直径1m、深さ0.5m程の円形の掘形を穿って、底部に直径0.35m、深さ0.3mの曲物を据えつけた小型の井戸である。井戸内からは須恵器甕・捏鉢・漆器椀・木片の他、貝殻、もみ殻等を検出した。

fig. 67　ＳＥ01

ＳＥ02　ＳＥ03を切って作られた井戸で、直径3.5m、深さ1.6mの円形の掘形を穿ち、径0.9m程に板材を立てて枠を組んだものと考えられる。井戸の平面形は六角以上の多角形をしていたと考えられるが、枠材の大部分が使用後、抜き取られており、正確な形状は不明である。

ＳＥ03　ＳＥ03はＳＥ02同様板材が抜き取られていたが、その痕跡より一片 0.9mの平面四角形の井戸であったことが知られる。井戸底には径0.35m、深さ0.4mの曲物を据えつけ、周囲には拳大の石によって丁寧に石を組んでいる。

fig. 68　ＳＥ02、03

ＳＥ02、03の２つの井戸からは、枠材を主として木片や竹管、貝殻などの自然遺物が多量に出土した。この中には呪符として用いたと考えられる２枚の木札が出土している。両方とも片面には墨書による文字・記号が残っていた。

その他の遺構　この他に多数の土壙・柱穴を検出したが、その性格あるいは建物の復元は現在検討中であるので、特にその特徴の二・三をここで記述する。

まず、土壙は一定の大きさのまとまりはないが、短辺２～３ｍ、長辺４ｍ以上の大型のもので深さは0.5mまでと浅く、埋土中には少量の須恵器・土師器などの土器片を含む。一部のものには、「ホゾ穴」をもった角柱など、建築材と考えられる木組を底部で検出している。全ての土壙は柱穴群を切って造られていることから、時期的には柱穴群に後続する時期のものといえる。

柱穴群は大きく掘形の規模より３つに分かつことが可能である。第１類は、掘方径0.3mを超える大型のもので、深さ0.4～0.6mと深く穿たれたもので、そ

の数は最も少ない。第２類は径0.2m内外のもので最も多いもの。 第３類は径0.1m以下で、杭痕と呼べる様な形状を持つものである。

第１・２類中には拳大～人頭大の石を掘形内で組んだものも10数基あった。

第Ⅱ遺構面　第Ⅰ遺構面検出作業中、下層の暗灰褐色砂質粘土層の帯状に隆起する部分を検出した。第Ⅰ遺構面での精査終了後、灰色細砂層を排除するにしたがって、幅2.5m、高さ0.2mの畦状の高まりを調査区の中央部付近にて検出した。この畦は調査区の中央を東西に長さ32mにわたって検出した他、一部に不連続な部分を持ち、この付近より南に延びる同様の高まりを検出した。また、この畦の北側では幅0.5m、高さ0.1mの小畦によって網状に区画された水田址を検出したが、南半部では氾濫により、かなり地表が洗われたらしく層位面が凹凸をなしていた。堆積土中にも小礫が混入しており、この際に小畦などは削平されたらしく検出できなかった。弥生時代後期～古墳時代の土器片が僅かに出土した程度で、遺物の出土が少なく時期の限定は困難である。

第Ⅲ遺構面　第Ⅲ遺構面は、暗青灰色砂質粘土層を基盤層として遺構を検出したもので、明確な包含層は認められなかった。検出された遺構は住居址２棟・溝１条で時期的には、弥生時代後期から古墳時代前期のものである。

ＳＢ04　調査区の南西隅で検出した竪穴住居址で、南半部は調査区外に延びる。平面プランは方形で４本柱のものと考えられ、柱穴の位置などから一辺 5.6mのものと思われる。遺物は埋土中より少量出土しており、それにより４世紀頃のものと思われる。

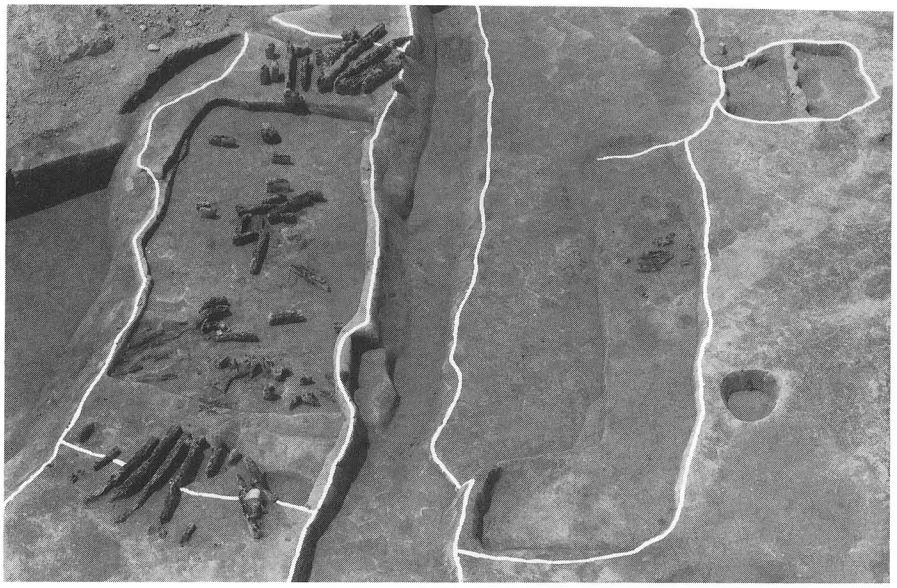
ＳＢ05　Ｎトレンチの中央付近で検出した方形プランの竪穴住居址で、後世の河道や溝などによって切られ、遺存状況は悪い。規模は一辺５ｍ程度と考えられ、ベッド状遺構を検出した。４本柱のものと考えられる。当住居址は焼失住居で、建築材が炭化して遺存していた。出土した遺物は少量であるが弥生時代後期のものと思われる。

ＳＤ05　Ｓトレンチで検出した北から南に流れる幅２ｍ、深さ１ｍのＶ字溝である。溝中の埋土は暗灰色粘土・青灰色砂質粘土などが堆積しており、緩やかに埋没したことがわかる。埋土中には遺物は少ないが、溝の西南部直上で土器が一括投棄されていた。これらの土器から溝の廃棄は庄内式併行期と考えられる。

第Ⅳ遺構面　青灰色粘土層を基盤層として遺構を検出したもので、直上に堆積する暗青灰色粘土層からは弥生時代中期の土器が多量に出土した。この遺構面で検出した遺構は竪穴住居址３棟・溝・土壙等である。

ＳＢ06　Ｎトレンチで検出した直径７ｍ、深さ0.3mの円形プランの竪穴住居址で、内部に周壁溝が巡り、中央部に径1.2m、深さ0.5mの土壙が附設されている。柱穴は17個を検出した。建て替えが行われたものと考えられ、一部切り合いが認

fig. 69　ＳＢ05
（東から）



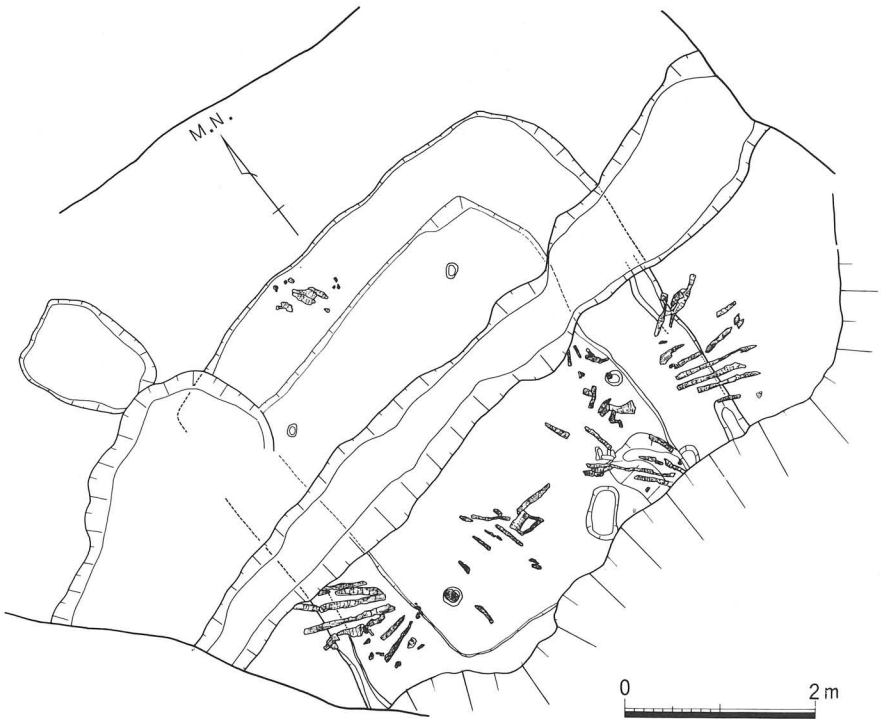


fig. 70　第Ⅲ遺構面ＳＢ05平面図

fig. 71　ＳＢ06
（北東から）

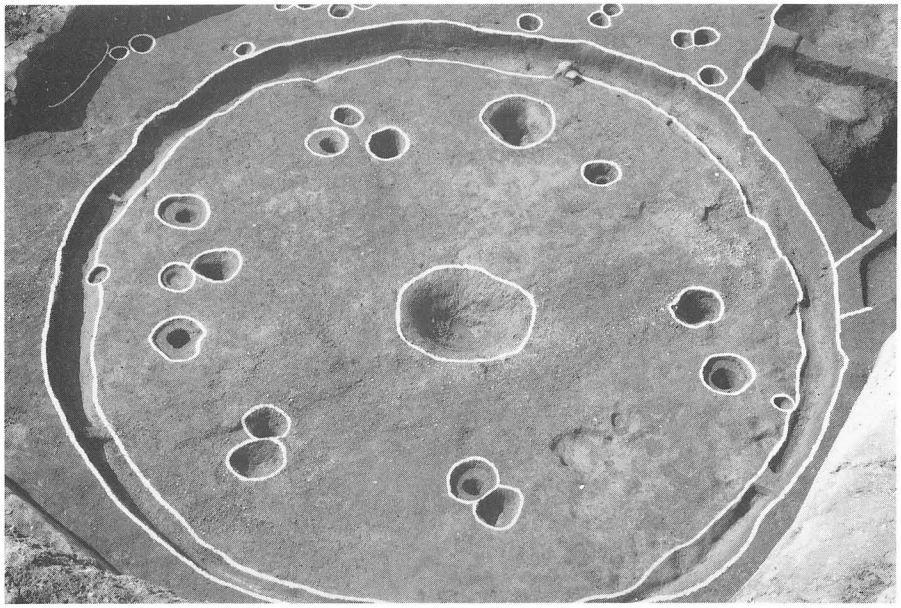


fig. 72　ＳＢ07
（北から）

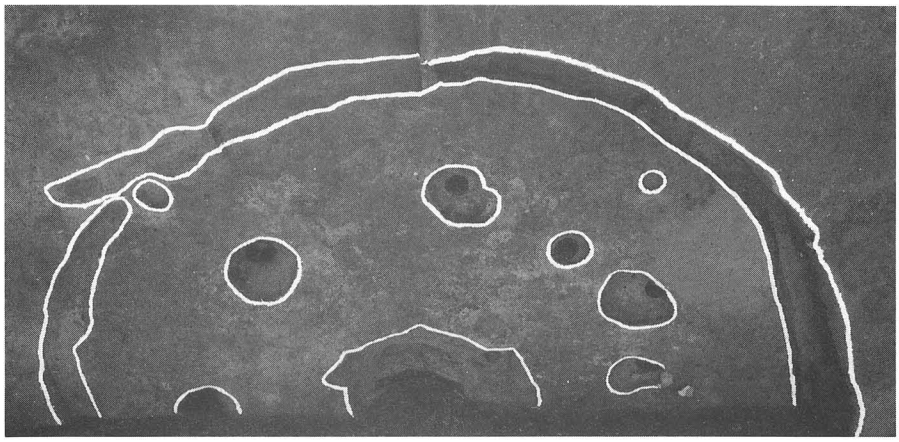
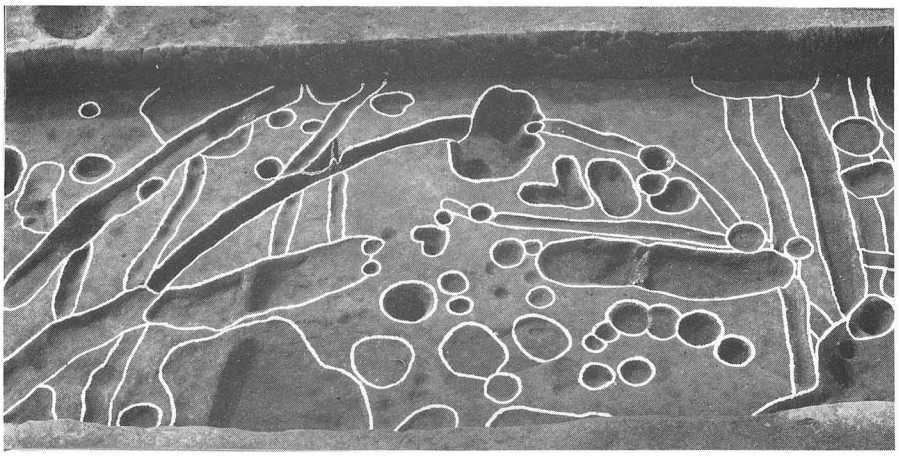


fig. 73　ＳＢ08
（東から）



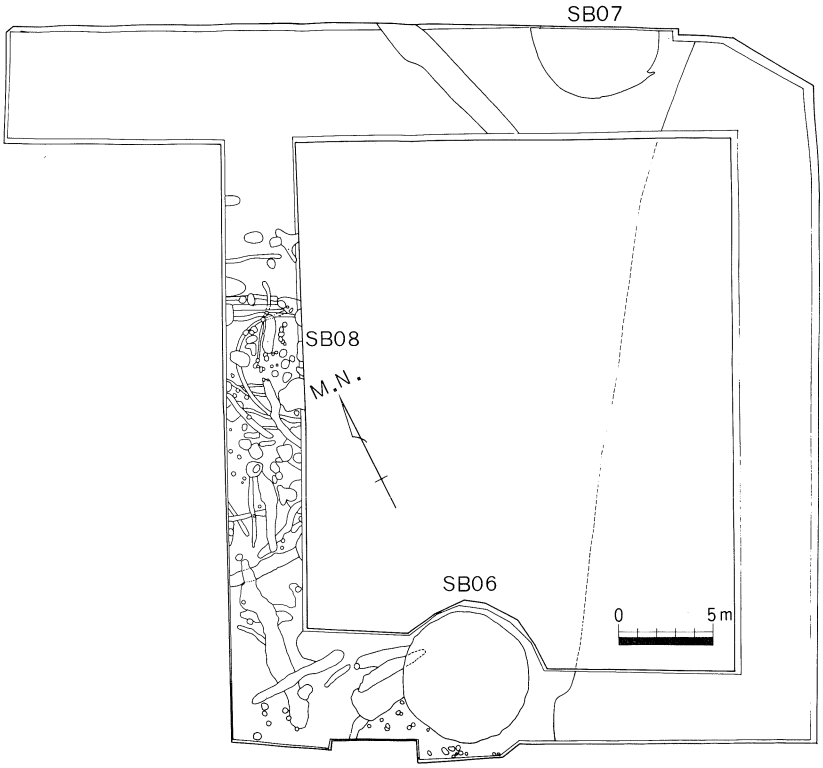


fig. 74　第Ⅳ遺構面平面図

められた。本来は６本柱の建物と考えられる。床面には黄褐色粘土を用いて厚さ５cm内外に貼床の痕跡を検出した。

ＳＢ07　Ｓトレンチ東端で検出した直径6.8mの円形竪穴住居址で、北半部は地区外にある。周壁溝があり、その一部が排水の為、外部へ延びている。また中央付近には径1.6m、深さ0.4mの土壙が附設されており、その内部には炭と砂が互層をなして堆積していた。

ＳＢ08　Ｗトレンチで検出した直径６ｍの住居址であるが、他の遺構との切り合いが激しく、周壁溝がわずかに残る程度で、柱の本数、中央土壙などは不明である。

その他　このほかＷトレンチを中心に柱穴・溝などが数多く切り合って遺存していたが、建物等には復元できなかった。また、そのほとんどの遺構は畿内第Ⅳ様式併行の時期のもので、一部には第Ⅲ様式のものがあった。

４．まとめ

今回の調査では、弥生時代から鎌倉時代に至る各種の遺構が、多量の土器を伴って発見されている。これらの数多くの発見の中には従来知られなかった新しい知見を得た。

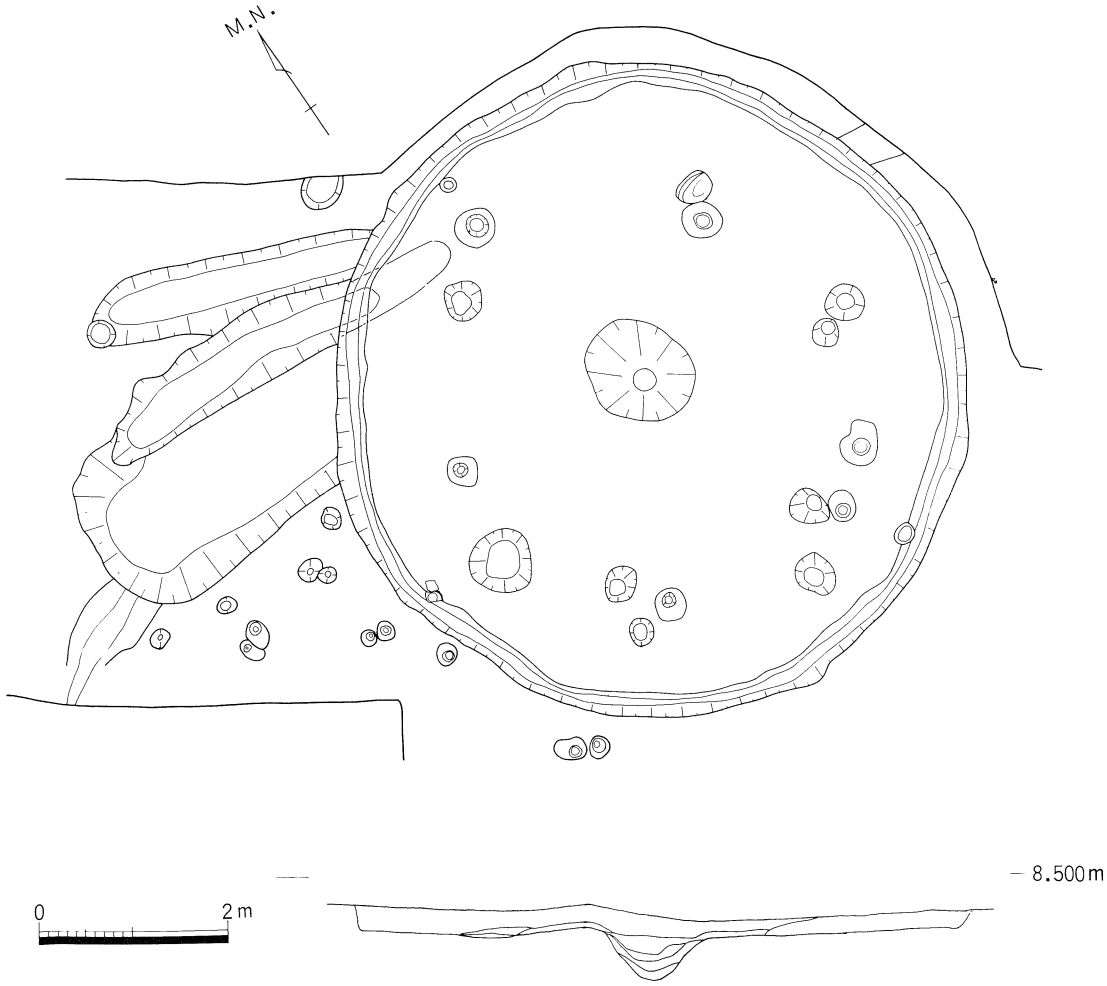


fig. 75　S B06実測図

まず、鎌倉時代の井戸が発見されたこと、またその中から出土した呪符は神戸市内で最初の例であること。

従来からの新方遺跡の推定範囲がさらに北へ延びることが明らかとなり、同時に複数の層位に各時期の良好な遺構の遺存があること。

洪水によって放棄された古代の水田址が残存すること。また、この水田畦畔や古墳時代の溝は方位に強く関連しているものと考えられ、現在に残る条里遺構とは方向を異にしている。これは鎌倉時代の各遺構が現在の条里残存方向と合致していることとの間に大きな相違が見られる。

この水田址が布留式以降奈良時代ぐらいのものであると思われ、この後に当地周辺一帯での大規模な地割の変更がされたものと考えられる。

5．新方遺跡（村中地点）

1．調査経過　今回の調査は当該地において宅地造成工事が行われることとなり、試掘調査を実施したところ、現地表下約0.4～0.6mの所に平安時代後期から鎌倉時代の包含層を検出した。開発関係者との協議を行い遺跡の保存を考慮して、現地表に盛土を行って造成を行うこととなったが、道路敷予定地には今後、地下埋設物が敷設されるとのことから、この部分の幅５m×長さ45mの発掘調査を実施することにした。平安期の遺構面精査作業終了後、土層堆積状況を知るために幅1mで深掘を実施したところ、断面に溝状の落ち込みを検出した。このため、この落ち込みの性格を知るため約0.5m掘り下げ、青灰色粘土層の検出を行った。

2．調査概要　今回の調査では、近世の水路、平安時代後期から鎌倉時代の遺構面、奈良時代の包含層、弥生時代中期の遺構面を検出した。

近世の水路　トレンチに沿って東西にのびる近世の水路で、深さ1.2mを測る。断面はV字形をなし、埋土は、細砂・粘土の互層となる。埋土中からは、染付碗、備前焼摺鉢などが多量に出土している。

中世包含層　地表下約0.5mの所で、厚さ0.15mの灰色粘土層からなる平安後期から鎌倉時代の包含層を検出した。包含層中からは東播系須恵器椀、片口鉢のほか白磁・青磁などが出土した。

奈良時代の包含層　地表下約0.7mの所で、厚さ0.1mの暗褐色粘土層からなる奈良時代の包含層を検出した。包含層中からは須恵器坏・坏蓋・土師器椀などの小片が少量出土した。

弥生時代の遺構面　奈良時代の包含層の精査後、下層での土層堆積状況や遺構の有無を確認するために断割り調査を実施したところ、地表下約1.2mの所で青灰色粘土層を切り込んで造られた溝状の遺構を検出した。このため、調査区全域において、青灰色粘土層を検出、遺構面を精査した。

周溝墓　この遺構面において検出した遺構は長方形の小型土壙１基、円、方形に巡ると考えられる溝３条である。

調査区が限定されており、全形を把握するには至らなかったが、中央付近のＳＫ02より完形の弥生土器が出土したことから、「周溝墓」と考えられる。時期は出土した土器から弥生時代中期前半頃のものと考えられる。

3．まとめ　今回の調査では鎌倉時代、奈良時代のそれぞれの遺物包含層を検出するとともに、弥生時代中期前半の周溝墓と考えられる遺構を検出した。このことから、新方遺跡が、かなり西方にまでその範囲が拡がることが明らかとなった。

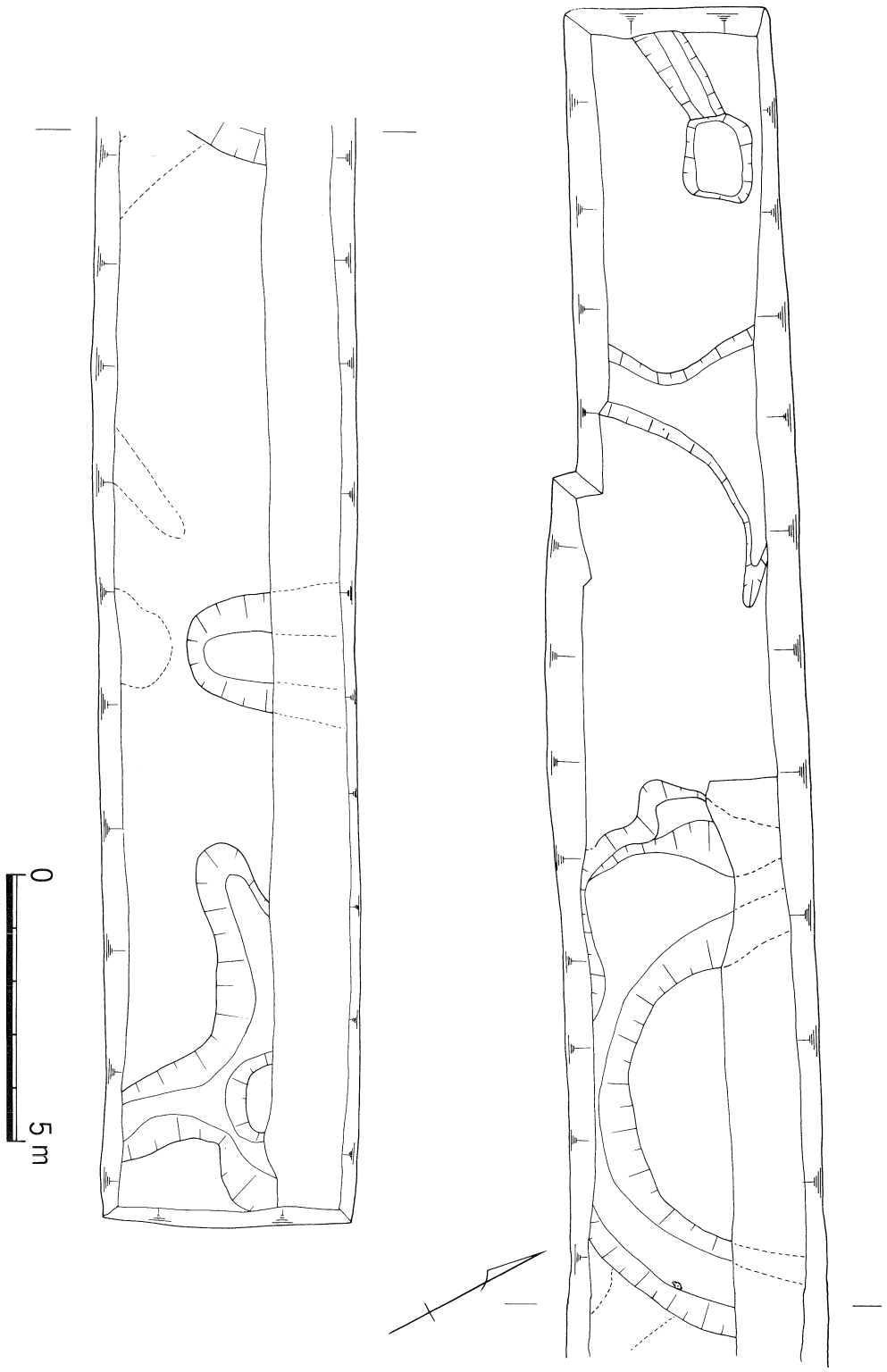


fig. 76　トレンチ内遺構平面図

fig. 77　トレンチ全景
（西から）

fig. 78　周溝状遺構
（北から）

fig. 79　周溝内弥生土器
出土状況

6．神出古窯址群（かんでこようしぐん）

1．はじめに　神出町一帯は、印南段丘と呼ばれる高位段丘上の東北端に位置する。付近は、雌岡山とそれに連なる隆起扇状地からなり、小河川による侵蝕によって、谷が東西に入り込み、その谷の緩斜面を利用して窯を構築している。

昭和53年に開始された圃場整備事業に伴う事前調査の結果、昭和58年度までに総計25基の窯跡が確認されており、今後さらに増加することが見込まれる。

2．調査概要　本年度施工予定地区の試掘調査は昭和57・58年度に実施された。その結果、現在の老ノ口集落の西に遺跡の存在が想定された。しかし、設計上保存が不可能な排水路敷とパイプライン敷についてのみ、発掘調査を実施した。そのため、最大でも３ｍ程の幅のトレンチのみの調査となったため、遺跡の全体像を知ることができず、ここでは遺構のまとまりのある地点の概要を記すことにする。

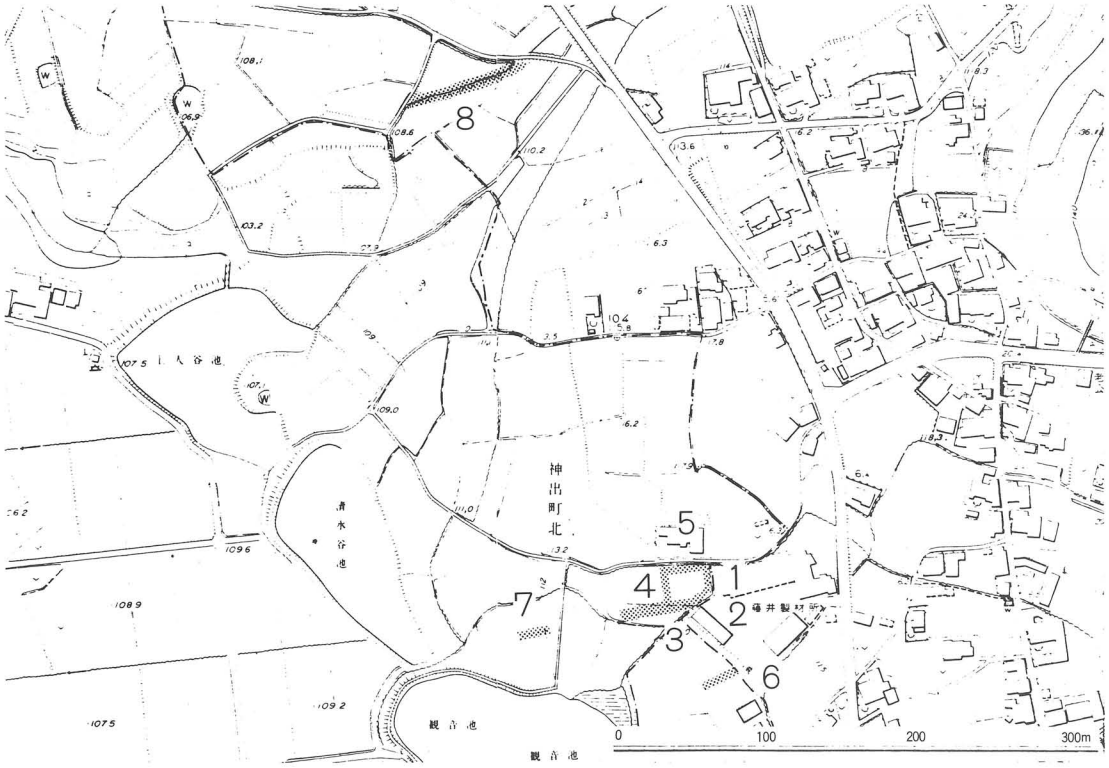


fig. 80　トレンチ設定図

1～5トレンチ　逆「P」字状のトレンチである。１及び４トレンチの北半分と５トレンチは削平を受け、比較的深く掘り込まれた５トレンチの溝ＳＤ11のみが検出された。検出された遺構は溝状遺構11条、土壙３基、柱穴と思われるピット多数である。しかし、調査を実施したトレンチ幅が1.7～2.1ｍと限定されたため掘立建物の

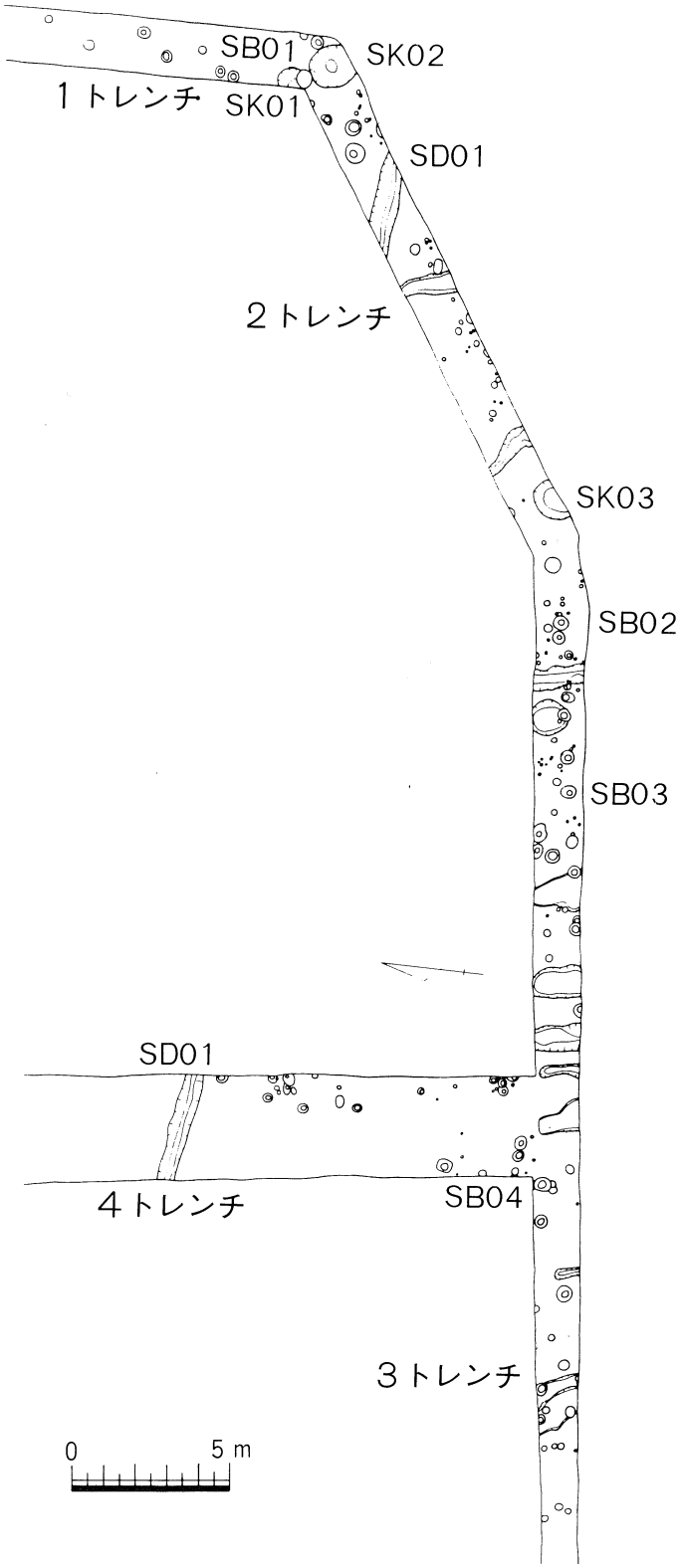


fig. 81　1～4トレンチ平面図

棟数、規模はもとより遺跡の状況を知ることは不可能であった。

ＳＫ01　１トレンチ南端付近で検出された平面円形の土壙で、西半分は調査区外、南端はピットによって切られているため正確な規模は不明であるが、推定径 0.8m、深さ 0.6mの擂鉢状の土壙である。土壙内からは１個体分の甕、埦等多量の遺物が出土している。

fig. 82　１～５トレンチ全景

ＳＫ02　２トレンチ東端付近で検出された平面円形の土壙である。径1.35m、深さ 0.9mの擂鉢状の土壙で、ＳＫ01同様土壙内から多量の遺物が出土している。

ＳＫ03　２トレンチ西端付近で検出された平面円形の土壙で、南半分が調査区外に延びている。径1.4m、深さ0.3mの擂鉢状の土壙で、ＳＫ01・02同様多量の遺物が出土している。

ＳＤ01　２トレンチ東側で幅0.8m、深さ0.75mで東方に傾斜する溝ＳＤ01 を検出した。断面Ｖ字状でかなり深い溝であるが、その用途は不明である。また４トレンチ内においても形態的に類似した溝が検出されたが、ＳＤ01とほぼ一直線上に位置する点から同一の溝と考えられる。

掘立柱建物　掘立柱建物は幅の狭いトレンチ調査のため、その様相を明確にすることはできなかった。しかし１～２トレンチにかけて３間分（ＳＢ01)、３トレンチ東端部で２間分（ＳＢ02)、３間分（ＳＢ03)、３トレンチの交点部で２間分（ＳＢ04）を確認することができたが、規模等は不明である。

ＳＢ03付近で、根固め石を入れた柱穴が３か所近接して検出された。これらはＳＢ02、ＳＢ03の柱列にのらないため、他にも数棟の掘立柱建物の存在が考えられる。

時　期　１～５トレンチで検出された一連の遺構は、包含層及び遺構内から出土した遺物から11世紀後半代から12世紀前半代に営まれた集落と考えられる。この時期の集落は神出地区ではまだ発見されておらず、神出古窯址群の操業開始時期を考えるうえで重要な発見である。

６トレンチ　観音池の東側に位置している。検出された遺構は、ピット13か所、溝１条と粘土採掘壙と考えられる土壙50基である。これら50基の粘土採掘壙は、円形若

fig. 83　1、2トレンチ

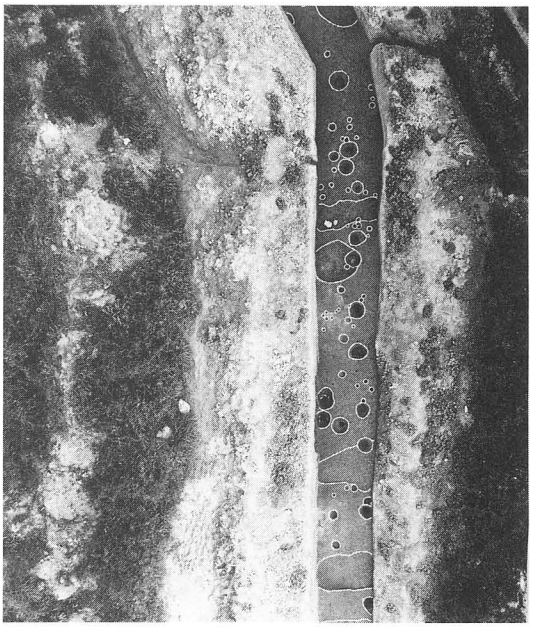


fig. 84　2、3トレンチ

しくは楕円形が原則であるが、規模は、径0.8～3ｍと一定せず、断面形もＵ字状や袋状のものもあり法則性は認められない。特に西側においては、その切り合い関係が激しく、12世紀中ごろを中心とする時期にかなり大量の粘土が採掘されたものと考えられる。

7トレンチ　観音池北側に位置している。検出された遺構は浅い落ち込み２、ピット及び掘立柱建物１棟である。掘立柱建物は、トレンチ調査のため全体の様相は不明であるが、２間以上（4.3m）×２間以上（3.9m）分を検出した。12世紀前半代の建物と考えられる。

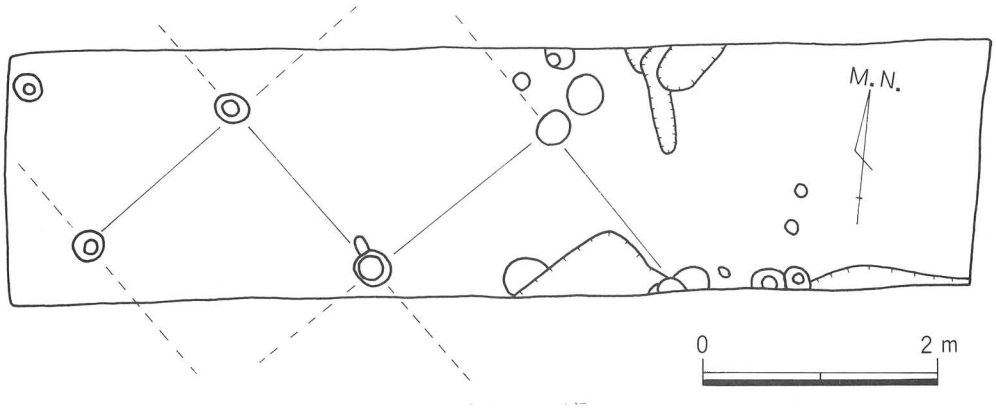
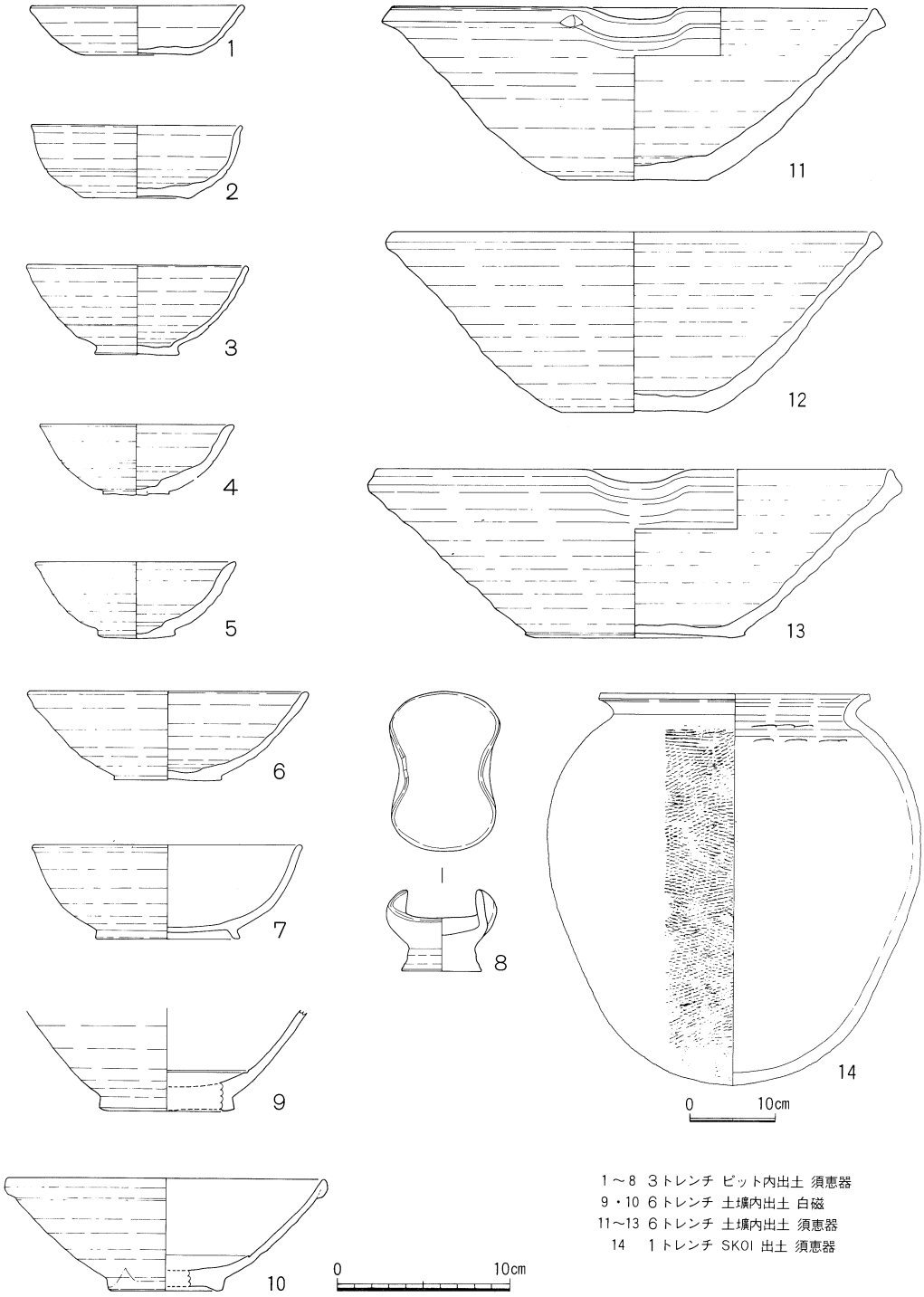


fig. 85　7トレンチ平面図



1～8　3トレンチ　ピット内出土　須恵器
9・10　6トレンチ　土壙内出土　白磁
11～13　6トレンチ　土壙内出土　須恵器
14　1トレンチ　SK01　出土　須恵器

fig. 86　出土遺物実測図

fig. 87　7トレンチ全景

fig. 88　8トレンチ2号窯

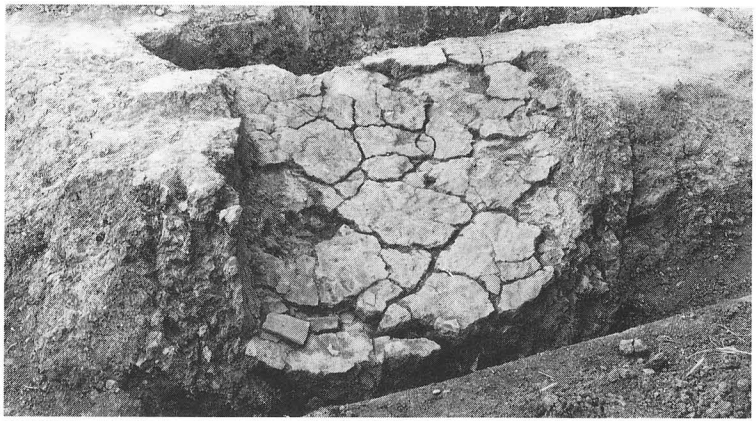
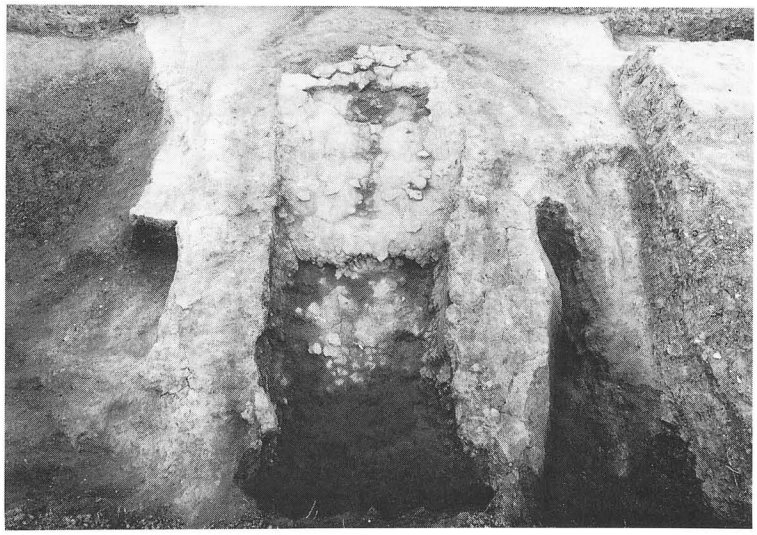


fig. 89　8トレンチ5号窯



8トレンチ　昭和57・58年度に実施した試掘調査の結果、かなりの窯体の存在が考えられる地点がある。その地点に窯址の基数・時期等を明確にし、資料化を図るため、A調査区を設定し発掘調査を実施した。その結果2基の窯体と4基分の灰原が検出され、各々が互いに層位的に上下関係をもっていることが確認され、今後の編年研究に大きな成果をもたらす結果となった。

1）2号窯　2号窯は調査区東端近くで検出された。検出された部分は焼成室下半部の約 1.7mのみである。窯体のうち焼成室上半は後世の削平により消滅していた。燃焼室・焚口は途中水路建設のため一部消滅しているが、残りは下方圃場内に残存しているものと思われる。

2号窯床面の最大幅は残存部上端で1.28m、床面傾斜角は16度、壁体の最も残存状況が良好な部分で高さ 0.4mを測る。

窯体床面に接して出土した遺物はほとんどなく、操業時期の決定は困難であるが、窯体内充塡土内の出土遺物から12世紀後半代と考えられる。

2）5号窯　5号窯は調査区西側で検出された。焼成室上半部・煙道部はすでに削平され消滅していたが、焼成室下半部、燃焼室・焚口は天井部を除いてほぼ残存していた。検出された窯体は、残存長3.15m、焚口幅0.85m、燃焼室長1.45m、最大幅0.75m、床面傾斜角0～12度、焼成室残存長1.7m、最大幅1.5m、床面傾斜角16度、壁体の最も残存状況が良好な部分で高さ0.35mを測る。燃焼室と焼成室の境には0.15m程度の段差が存在し、瓦窯の影響を感じさせる。窯体内は大量の未製品が残存しており、特に燃焼室には、焼成室から倒れ落ちた状態で多量の埦が出土している。片口鉢・甕など大型品や瓦は少量のみ発見されたに過ぎない。出土遺物から12世紀中頃に操業した窯と考えられる。5号窯検出中に、東側で窯体が半分重なり合ってもう1基存在していたことが確認された（5－B号窯)。主軸は5号窯とほぼ並行し、検出長 2.9mを測る。5号窯の保存を図るため調査を行っておらず、全様は不明である。5号窯は5－B号窯廃絶後盛土して構築されたことが明らかとなった。

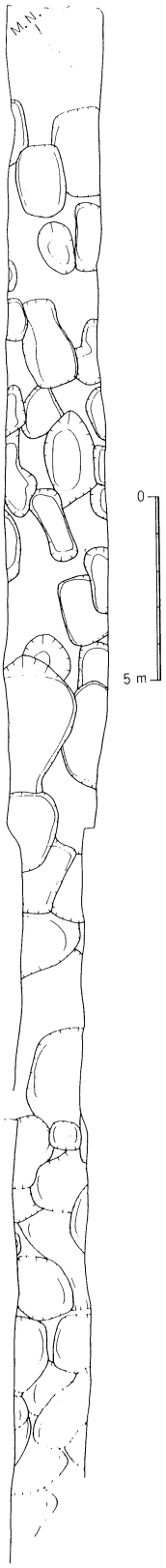


fig. 90　6トレンチ平面図

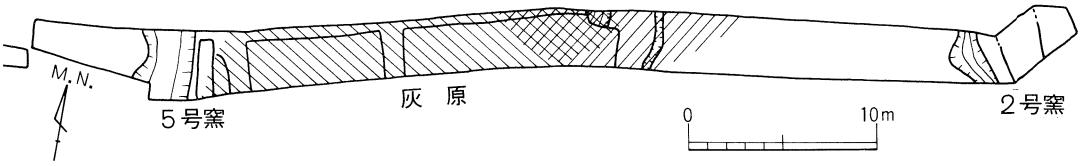


fig. 91　8トレンチ平面図

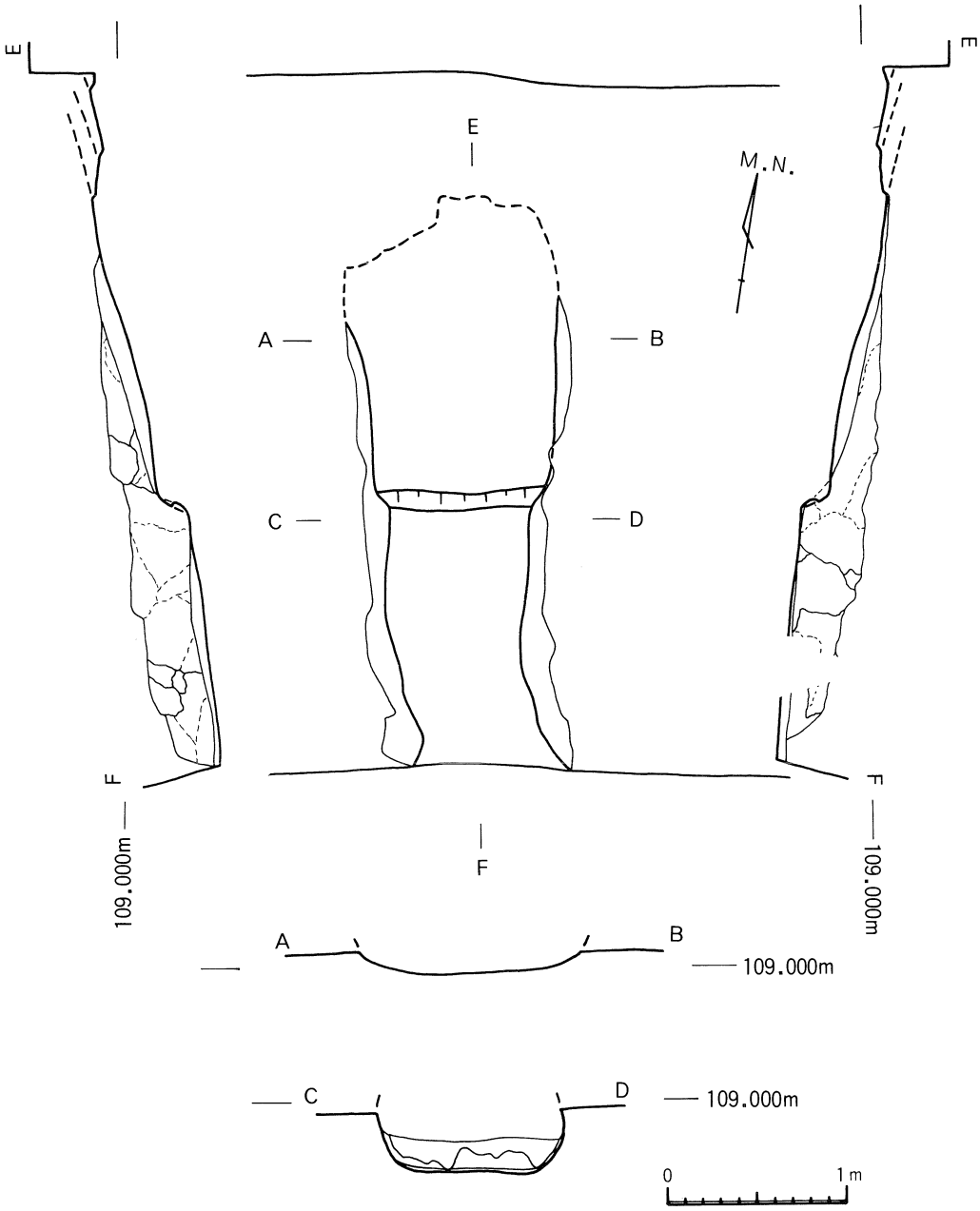


fig. 92　5号窯実測図

3）1、3、4、6号灰原　検出された２基の窯体以外にこの地点で４基分の灰原が確認された。そのうち３、４号灰原と５号窯との間には断面観察により、前後関係が明らかに存在し、５号窯→４号灰原→３号灰原と新しくなっており、12世紀中頃から後半代にかけての様相を知る貴重な資料となった。

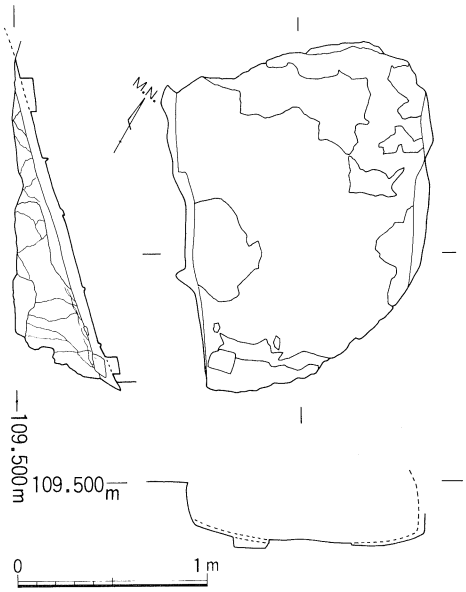


fig. 93　２号窯実測図

３．まとめ

今年度の調査はトレンチ調査のみとなったため、遺跡の全体像を探るにはいたらなかったが、窯・集落・粘土採掘壙という窯業生産の復原に不可欠な要素が明らかになった点は特筆されるであろう。

また窯の単位の問題では、８トレンチを設定した小浸蝕谷が注目される。ここでは合計13基の窯址の存在が確認されたが、谷の入口に存在する12世紀前半代の窯址（現状保存・未調査）から最奥地に立地する昭和58年度調査分の２基（12世紀末葉～13世紀初頭）まで連綿として生産が継続されていた。しかし、これをもって完結する一工人集団の存在を想定することは危険ではあるが、この一小浸蝕谷に展開された須恵器生産の様相は、貴重な資料を提供するものであろう。

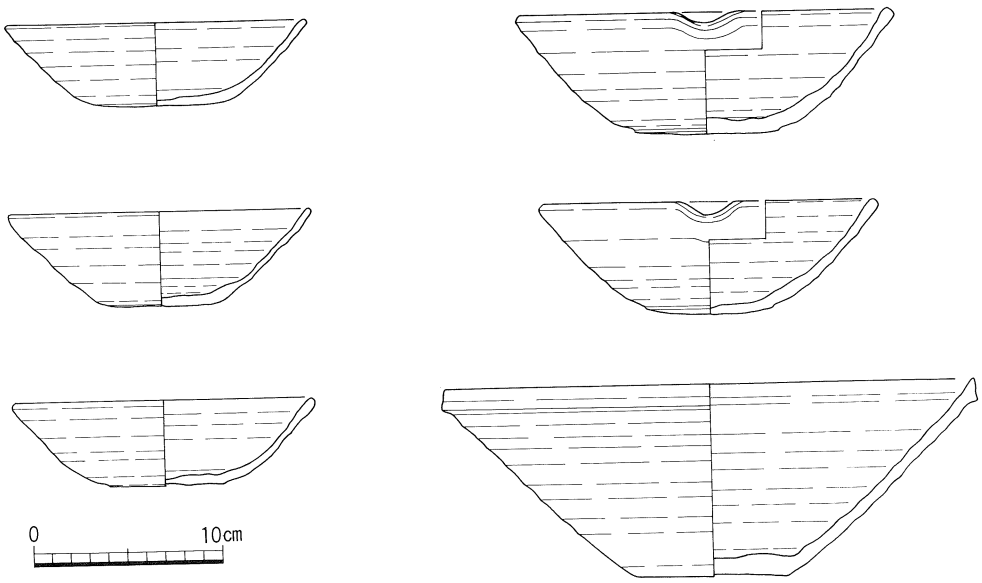


fig. 94　５号窯出土遺物実測図

7．前開（ぜんかい）遺跡

1．はじめに　西区伊川谷町前開地区は明石川の支流、伊川の中流域にあり、周辺には南別府・北別府・池上北・頭高山等の各遺跡をはじめ、縄文時代～平安時代に至る多くの遺跡の存在が知られている。

また、当地区には国宝の本堂を含む数多くの重要文化財を有する太山寺があるほか、近年の周辺部（長坂・小寺地区等）での圃場整備事業に先立つ埋蔵文化財調査においても、古墳時代から平安時代に至る遺構・遺物を発見している。

このようなことから、工事対象地内での試掘調査を実施したところ、平安時代後期から鎌倉時代の遺構・遺物を発見した。この成果を元に関係機関とも保存協議を行った結果、圃場面工事では包含層の保存が図られることとなったが、水路部分の工事計画の変更は、非常に困難であるため、記録保存となった。そのため、遺物包含層が存在すると考えられる範囲で水路敷となる部分を幅 2.6m、全長560m（1,456㎡）に6本のトレンチを設け調査を実施した。

2．調査概要　調査は包含層から上約0.1mまでをバックホーを用いて掘削を行った後、人力により包含層の掘削、遺構検出作業を行った。

第1トレンチ　向井地区に設定した長さ160mのトレンチである。トレンチの東半部では床土下に砂礫層からなる地山面を検出したが遺構、遺物は殆ど検出されなかった。西半部では地表下約0.4～0.6mの付近において包含層を検出したほか、中央部で南北に延びる幅0.6m、深さ0.5mのU字溝、土壙等を検出した。溝中には平安時代後期（12世紀）の土師器坏片や拳大の河原石等が出土した。

第2トレンチ　栂子木地区に設定した長さ92mのトレンチである。地表下約0.6～0.8mの所に厚さ0.2m内外の遺物包含層を検出したが遺構は発見されなかった。遺物量も少なく、多くのものは表面が摩耗をうけており、周辺部からの流入した二次堆積包含層と考えられる。

第3トレンチ　縄手地区北東部に設けた長さ48mのトレンチで、耕土・床土下には礫層を検出した。ごく僅かの遺物の出土を認めたが遺構は検出されなかった。

第4トレンチ　第3トレンチ南東約50mに設けた長さ70mのトレンチである。地表下約0.6mの所に厚さ0.15m程の遺物包含層を検出したが、遺構は存在しなかった。

第5トレンチ　第4トレンチの南方約30mの所に設けた、「L字形」のトレンチである。このトレンチでは遺物の出土は少なかったが、埋土中に炭化物を多量に含む土壙を2基検出した。両方とも幅1.2m内外、長さ3m程のもので上部は削平を受けていたため、深さは0.2m程度である。短辺の中央に長さ0.4m、幅0.3m程の突出部を持っていた。

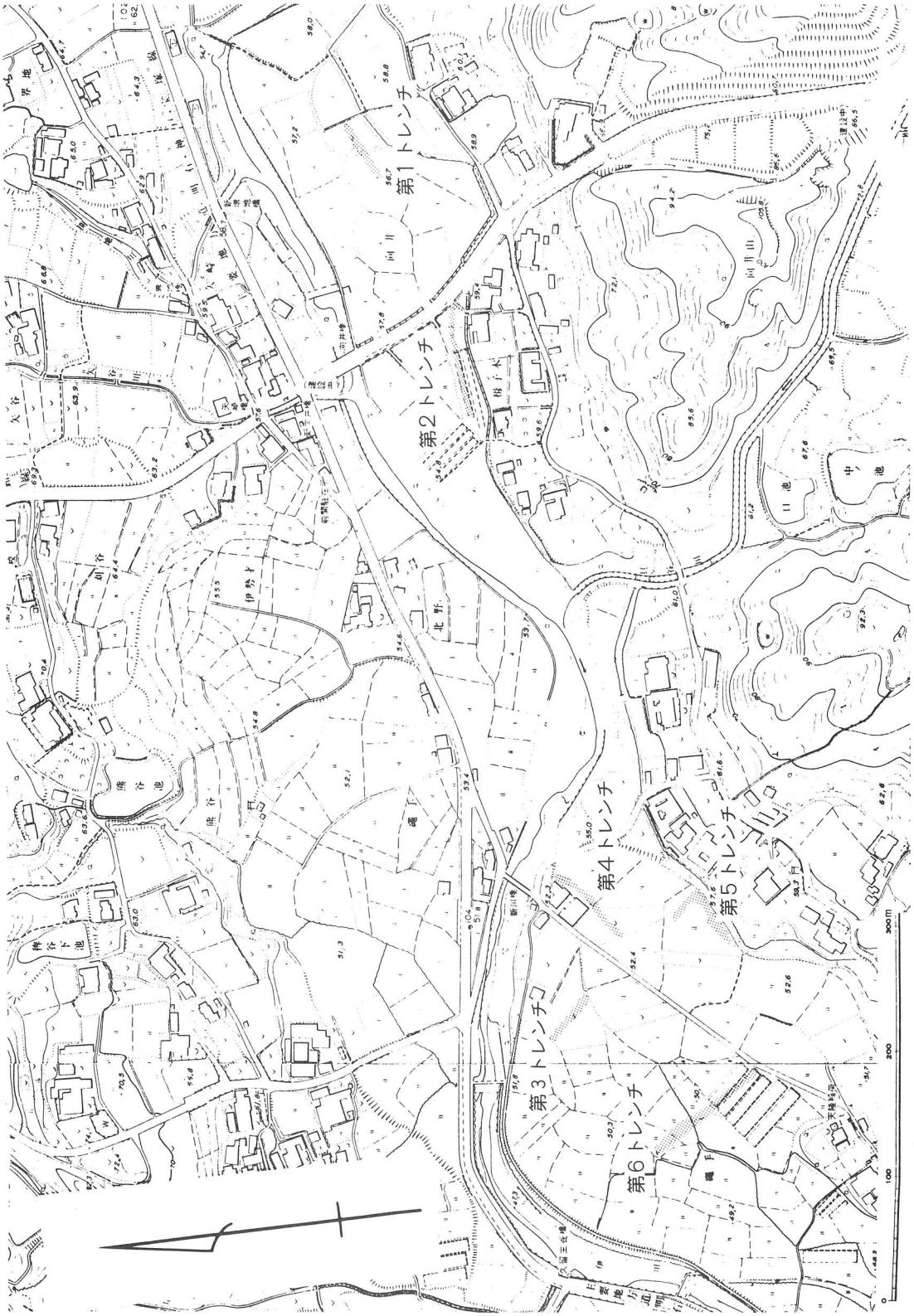


fig. 95　トレンチ設定図

fig. 96　6トレンチ
ＳＫ01（右）、
ＳＫ02（左）実測図

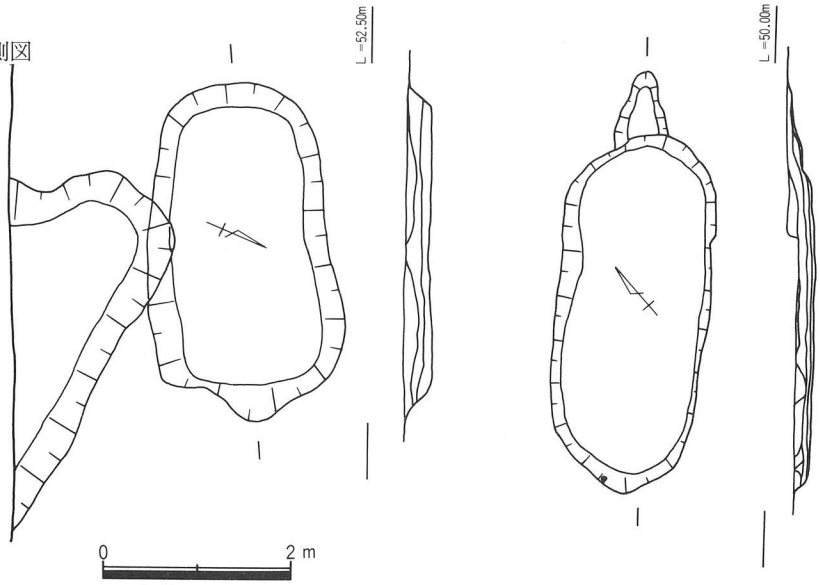


fig. 97　ＳＫ01

第6トレンチ　第５トレンチの北西約110ｍの所に設けた長さ105ｍのトレンチである。遺構・遺物は西北部に多く、南東部に行くに従って減少する。中央付近から北西部にかけて４基の土壙を検出した。全形のわかるものはＳＫ01のみであるが、４基とも埋土中には多量の炭化物が混入しており、第５トレンチの土壙同様、短辺に小突出を持つ矩形の土壙と考えられる。

３．まとめ

今回の調査では広汎な遺物包含層を検出したが、遺構の発見は極めて少なかった。この中において注目されるのは短辺に小突出部を持つ矩形土壙の発見である。この種の土壙は、現在まで伊川流域で２か所、櫨谷川流域で３か所を数えている。この土壙の特徴は全て埋土中に多量の炭化物を混じえていることなどの共通点は多いものの、その性格はいまもって不明である。

8．長坂（ながさか）遺跡

1．はじめに　伊川谷町長坂地区は明石川の中流域にあり、周辺には北別府・南別府・池上北・頭高山などの各遺跡が知られている。

当地区における圃場整備事業は昭和58年度より実施されており、工事に先立って埋蔵文化財試掘調査を実施している。

今年度の調査地は、県道平野・舞子停車場線の北側字池田・長坂地区と同道路をへだてた南側の字垣内・古堂・沢田ほかで、総面積10.7*ha*である。

昨年度から試掘調査を実施したところ、字長坂・古堂・垣内地区において古墳時代・平安時代後期の遺構・遺物を検出した。このため、工事関係機関との保存協議を行い、圃場面では包含層以下の保存のため、計画変更を行うこととなったが、水路工事部分での計画変更は困難であるとのことから、この部分の調査を実施することにした。

2．調査方法　調査は、試掘の成果に基づいて長坂地区において、第１トレンチ（８ｍ×８ｍ）・第２トレンチ（３ｍ×30ｍ）・古堂地区で第４トレンチ（３ｍ×100ｍ）を設けて実施した。

3．調査結果

第1トレンチ　土層は耕土・床土の下に遺物を僅かに含む暗茶色砂質土・暗青灰色砂質土があり地山となる。

遺構は地山面を切り込んでおり、柱穴と考えられるピット33か所、自然流路と考えられる溝１条を検出した。ピット中からは、須恵器・土師器・砥石等が出土しているが、建物としてのまとまりは認められなかった。この他、第３層中から、陶硯が出土している。風字硯で下半は欠失している。海と陸の境界は明確ではないが、海部はやや強いナデを施し、陸部は使用のため滑らかな面になる。現存長4.2cm、最大幅6.3cm、厚さ2.4cmを測る。遺構の時期は伴出遺物より鎌倉時代初めのものと考えられる。

fig. 98
トレンチ位置図

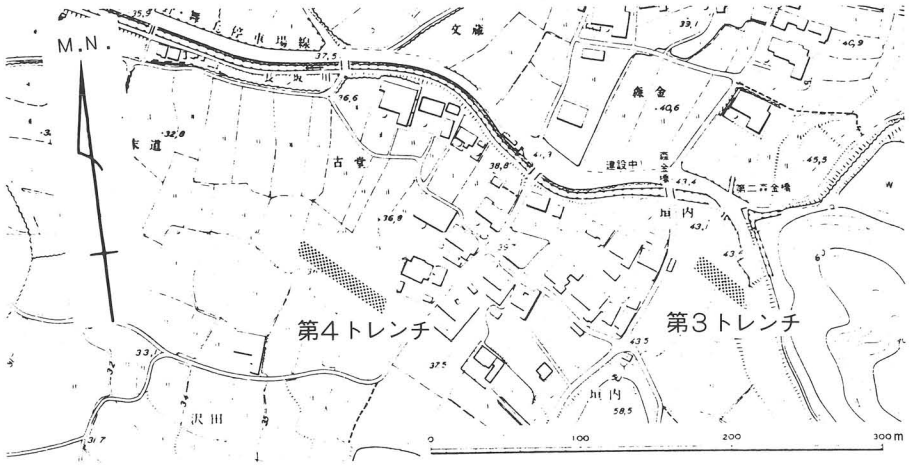
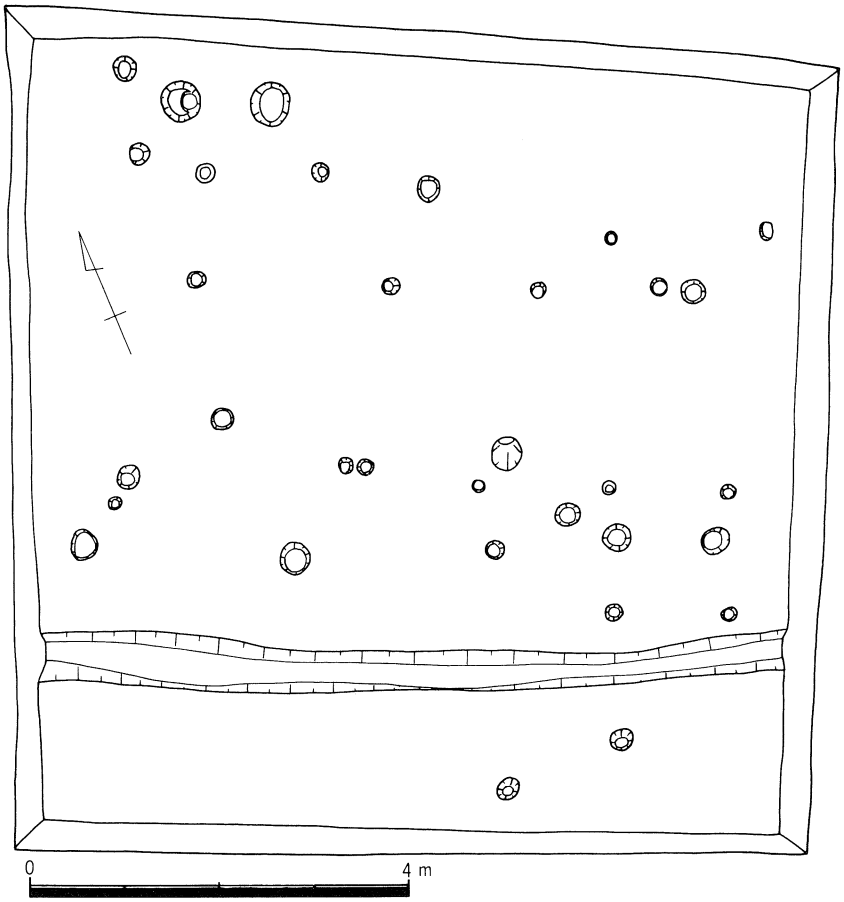


fig. 99
第１トレンチ平面図



第2トレンチ　第１トレンチの北に接したパイプライン敷設部分を現地表から1.6m～2.0mの掘削を行って調査を実施したが、遺構は検出されなかった。

第3トレンチ　このトレンチからは溝２条・土壙３基の他、性格不明の落ち込み１基を検出した。

ＳＤ01　東西方向に延びる幅1.7m、深さ0.4mの溝で溝底は幅広く平坦である。遺物は溝底より0.1m程浮いた状態で土師器羽釜・鍋等が拳大の礫とともに出土した。

ＳＤ02　ＳＤ01に切られた南北方向に延びる幅0.3mの溝である。

その他　土壙・柱穴等を検出したが遺物は少なくその性格も不明で、柱穴から建物を復元することはできなかった。これらの遺構の時期は伴出した遺物より鎌倉時代後期（13世紀末頃）のものと考えられる。

第4トレンチ　このトレンチからは、竪穴住居址２棟（ＳＢ01・ＳＢ02）掘立柱建物１棟、溝５条、土壙２基のほか性格不明の落ち込み２基（ＳＸ01・02）を検出した。

ＳＢ01　１辺が４ｍ程度の方形プランを持つ竪穴住居址で南半部は調査区外へ延びる。東辺中央部には小土壙が付設されている他、床面より２本の柱穴を検出した。４本柱からなる建物と思われる。また、定形品の小型丸底壺が３個体、床面よ

fig. 100　第3トレンチＳＫ01、ＳＸ01

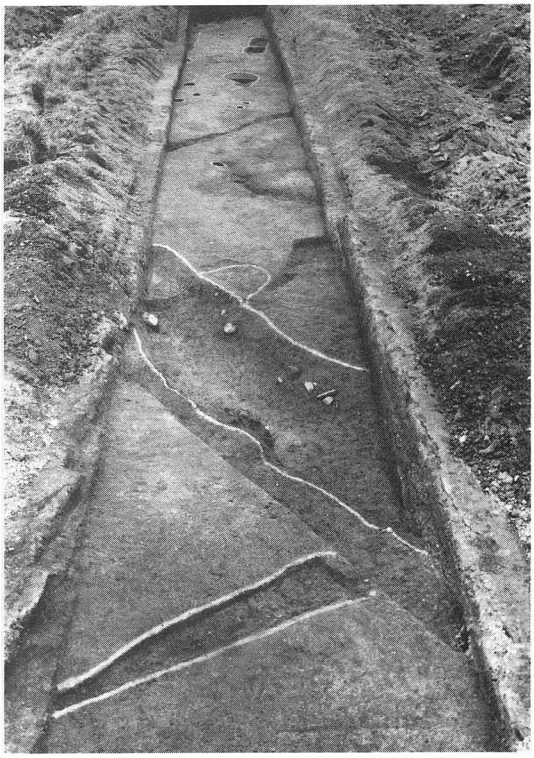


fig. 101　第3トレンチＳＤ01、02

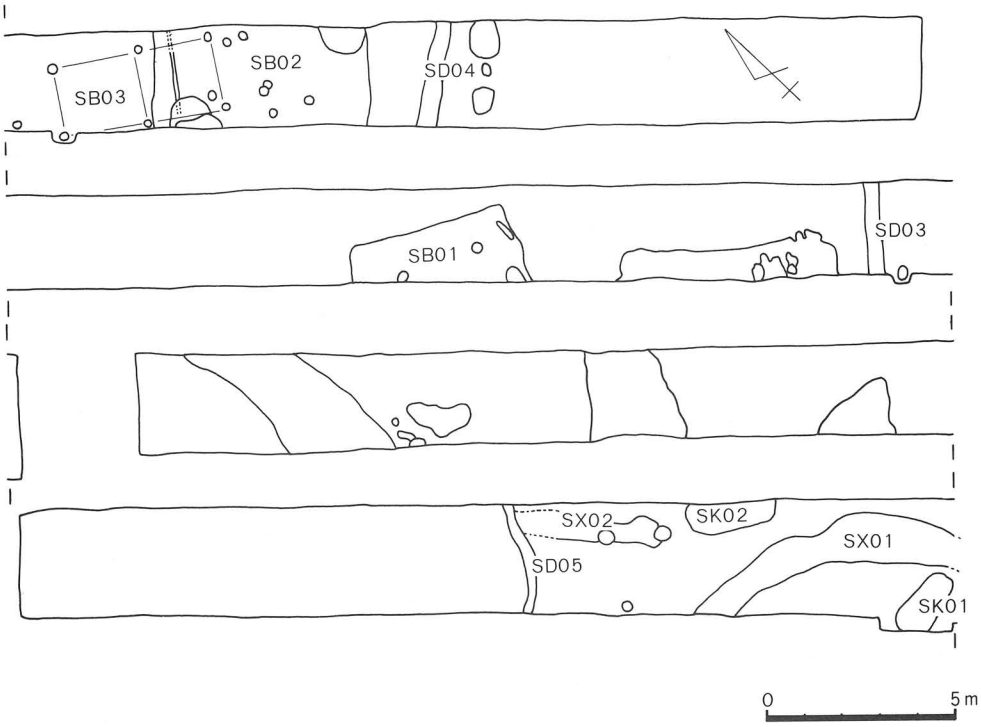


fig. 102　第4トレンチ遺構平面図

り10cm程はなれて出土した。

ＳＢ02　１辺が５ｍ程度の方形プランを持つ竪穴住居址で、南北両辺は地区外に延びる。西辺には周壁溝が確認されたが東辺には検出されなかった。東西両辺に接して小土壙が付設されている他、柱穴を６か所検出したが、地区外部にも延びているため、何本の柱を持つものかは不明である。

小土壙・床面などより、土師器甕・壺形土器などが出土した他、床面付近に炭化物層を検出した。

ＳＢ03　東西２間（4.4m）の掘立柱建物でＳＢ02に切られている。南北の規模については地区外へ延びる為、不明である。

ＳＤ01　幅1.8～2.4m、深さ0.5mの溝でほぼ南北方向に延びる。

ＳＤ02～04　トレンチに直交に延びる幅0.3m内外、深さ0.2m程の溝である。

その他　ＳＸ02で銀環が出土したが、その他の土壙、落ち込みなどは遺構も少なく性格は不明である。

以上の遺構の時期は伴出遺物などによりＳＢ01～03、ＳＤ02～04が古墳時代後期（５世紀後半）、ＳＤ01が平安時代後期（11～12世紀）と考えられる。

４．まとめ

今回は遺跡保存を図るため、調査範囲を水路敷設部などの最小範囲にとどめたため、遺跡の範囲およびその性格について十分に把握するには至っていない。しかし、長坂地区での小範囲の柱穴の存在、古堂、垣内地区付近での古墳時代集落址、平安・鎌倉時代の集落址の存在が明らかとなり、その広がりも試掘成果などから、かなり広範囲に及ぶ可能性がある。

従来、遺跡の存在が予想されながら、分布調査では知られなかった遺跡が、今回の調査によって知られた意義は大きい。

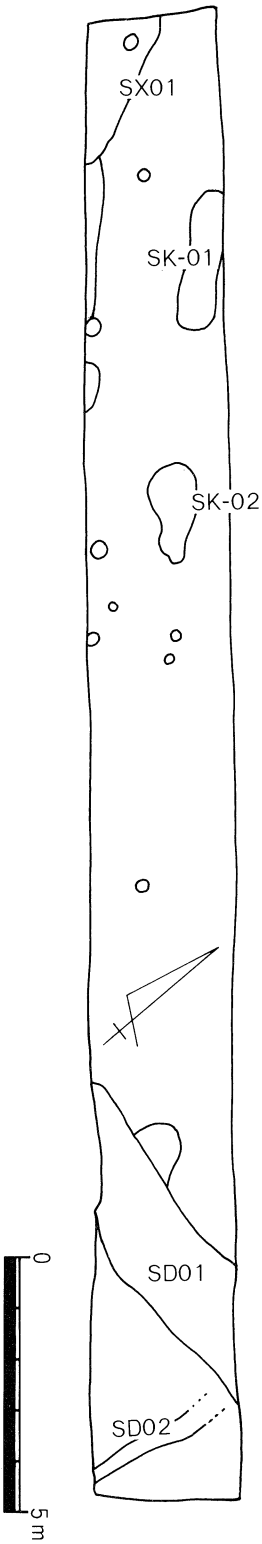


fig. 103　第３トレンチ平面図

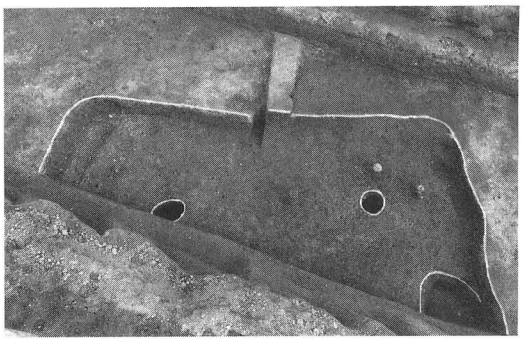


fig. 104　ＳＢ01（南から）

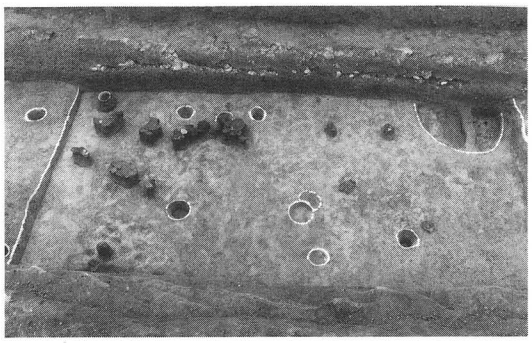


fig. 105　ＳＢ02（南から）

fig. 106　ＳＢ01平面図

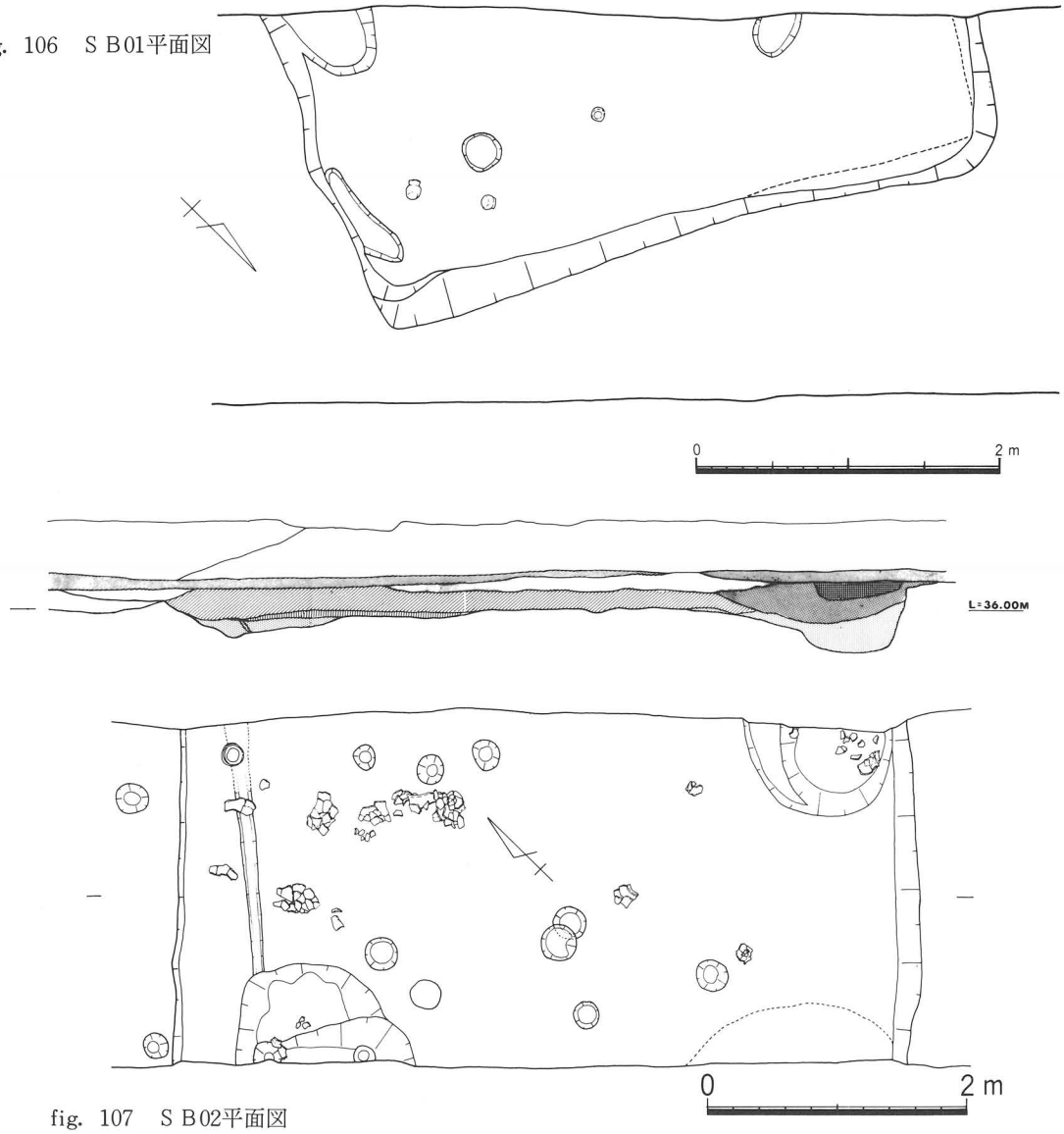


fig. 107　ＳＢ02平面図

9．福住（ふくずみ）遺跡

1．位置と環境　福住遺跡は、神戸市西区押部谷町福住に所在し、東から西へと流れる明石川上流域の北岸に位置している。当遺跡は、明石川に沿って東西方向へ細長く展開した狭い平野部の標高約90mのところに立地しており、北から南へと流れて明石川へ注ぐ支流・福住川の東岸に位置している。

周辺の遺跡として、東側には、弥生時代後期～古墳時代前期及び鎌倉時代前半の集落址である押部遺跡があり、北東には、弥生時代後期～古墳時代前期の墳墓と考えられる栄弥生墳墓などが存在している。

2．調査経過　西区押部谷町福住は、昭和56年度より圃場整備事業を開始した。圃場整備事業に伴い、遺跡の有無・範囲を確認する目的で試掘調査を行った。

昭和59年度の調査は、押部谷小学校の東側に位置する排水路予定地に検出された遺構の調査を行った。

3．調査概要　今回の調査は、排水路予定地部分の断面観察のみという限られた調査であったため、遺構の全容を明らかにすることは困難であったが、支線排水路18号において、遺物包含層及び遺構の存在を確認することができた。

基本的な層序は、耕土・床土・灰褐色粘質土（遺物包含層）・黄褐色粘質土（地山）である。包含層は、0.2～0.3mの厚さで堆積しており、鎌倉時代の須恵器・土師器が出土している。

確認した遺構は、ピット（Ｐ１～３）が３か所、土壙（ＳＫ01）が１か所、落ち込み（ＳＸ01～03）が３か所である。

Ｐ１は、径0.6m、深さ0.4m、Ｐ２は、径0.4m、深さ0.35m、P3は、径0.4

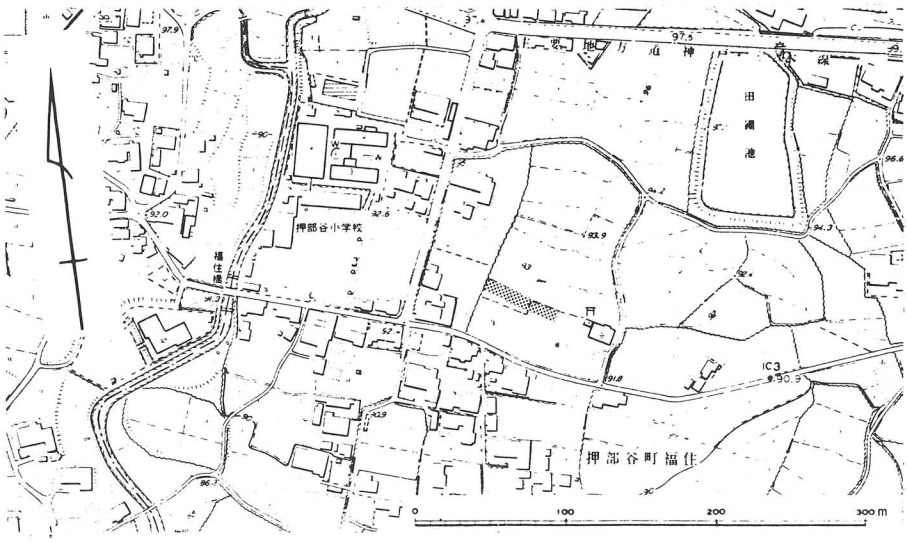



fig. 108　調査区位置図